
Contract ～契約～

深々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Contract ～契約～

【Nコード】

N8018M

【作者名】

深々

【あらすじ】

作者がいささか厨二病？でアホなこともあって、文章力がありませんが、そんなんでよければ是非読んでください。かなりベタです。あらすじは、主人公の蒼慈が異世界へ行き、元の世界へ帰るために魔王を倒そうとする物語です。

主人公は最強です。能力上、ハーレム前提です。

序章（前書き）

とりあえず、序章・・・

序章

体を感じるのは浮遊感。

下へ下へと、空が遠くなっていく。

青い、青い空。雲ひとつない空。

「ああ。まぶしいな・・・」

太陽が目の片隅に入り日光が自分の体を照らす。

心地よいと感じられるこの感覚、耳の横では風の音だけがする。

…ああ、落ちてるんだな俺。落ちて・・・

「え？あれ？え・・・うわああああ！！落ちてる！落ちてるよ！！」

空中で体を捻り体の正面を下に向ける。

眼前に世界の光景が広がる。

緑が多い。

日本のどこぞの田舎のような景色だ。

ただ、何故か神秘さがあり、それに圧倒される。

「すげえ・・・ってうわああああ！！！！地面！地面！！死ぬ！死ぬってコレ！！」

地面までは後、約500メートルほど。

重力加速度を9.8と考えて初速度は0。

いわゆる自由落下。

$y \parallel 1 / 2 \times g \times t \times t$

これに代入すると・・・

「大体t≒10sくらいか・・・ふっ」

この物語の主人公死亡まであと10s。

「か、カウントダウンはいりまあゝす」

若干涙目。

「10、9、8・・・」

眼前に迫る地面を凝視しながら、カウントしていく。

自分の死ぬ瞬間に目を瞑るなんてことしたくないから、目の前を凝視しながら死を覚悟していく。

そもそもなんでこんなことに・・・

時はさかのぼっ

——ドォォン！

る暇はなかったけども、一応回想へ。

1 回想(1)

「ふああゝ」

今は午前中の授業中。

2時間目は英語の授業だった。

この学校はわりと有名な進学校で、生徒は私語もほとんどすることなく授業を真面目にうけている。

そんな中で一人だけ窓に目を向けて欠伸をしている生徒がいれば、目立つのも当然のこと。

「・・・神城君。そんなに授業が退屈ですか？」

“神城君”と呼ばれた生徒は窓から目を離し、教卓の上で彼を睨みつけている教師を見る。

「あなた、それほど英語の成績がいいわけではないんですから、もっと真面目に授業を受けたらどうなんですかっ!？」

少々ヒステリック気味な声を上げる英語教師。年齢は30台後半といったところで、いかにも厳しそう、といった感じの女教師だ。

印象的なのはその三角の形をした眼鏡。

とにかく真面目な先生で、生徒にもその真面目さを強要している。

「ふああゝ」

授業中なのにもかかわらず、注意された生徒の机の上にはノートや教科書といった勉強道具の類は一切ない。

「あ、あなたね・・・せめて教科書とノートくらいは机の上に出しなさいっ！」

ものすごい目で教師はその生徒を睨む。

しかし、当の本人は全く申し訳なさそうなそぶりは見せず、

「ねむ・・・」

窓に視線を戻した。

「・・・神城君！！後で職員室に来なさいっ！」

教師は思いっきりその生徒に向けてヒステリック気味な声で叫び、怒りに震えながら授業を再開した。

生徒を怒ったことによつてだとしても、彼女にとっては授業を遅らせることはしたくなかつたため仕方なく授業を再開したのだが、当事者であるその生徒は全く気にする様子はなかつた。

チャイムが鳴り。委員長の声で授業が終わつた。

彼の名前は神城蒼慈。かみしろそうじ

ここ高山高校の2年生だ。

身長は163cm。体重は50kg。

体つきは華奢で背も低くいたためよく年齢よりも下に見られることがある。

顔は、目が隠れるくらいの長めの前髪、それ以外は全体的に整つた顔つきをしている。

彼は特別不真面目というわけではないのだが、今日はそれなりに理由があつたのだつた。

「ソージ。お前、授業なんてノート開いて教科書だして適当に前向いとけばいいものを、なんで何も出さないとか教師を挑発するようなことするんだよ」

授業が終了し、真っ先に蒼慈の机に寄ってきたのは、中学の頃からの仲で、いわゆる親友の赤坂洋平あかさかようへいだった。

「ん？・・・あれ？・・・授業は？・・・終わったのか？」

そんなアホみたいなことを言う親友に向かって、赤坂は言う。

「おいおい。何寝ぼけてるんだ？お前職員室に呼ばれてたろうに」

「職員室に？俺が？ははっ。何言ってるんだよ洋平。俺が呼び出される理由なんてないだろ？お前いつからそんな冗談言うやつになったんだよ」

はははと洋平の顔を指差しながら笑う蒼慈を見ながら洋平は大きくため息をついた。

「・・・ああ、そうだな。どうやら俺が寝ぼけてたみたいだわ。そんなことより今日はいつもより遥かにボーっとしてたけど、昨日なんかあったのか？」

「ボーっど？してたかな？てか授業受けてた記憶がないや」

やっぱりな。というように額に手をあてて洋平は本日二度目のため息をついた。

「どうしたんだ、洋平？ため息なんかついちゃってさ。悩み事でも

あるなら相談にのってやってるけど？」

「いや、いい。この悩みはだいぶ前から続いてて一生解消されないと、もうずいぶん前に諦めたからな。そんなことより、昨日なんかあったんだろ？」

「ふうん。ならいいけどさー。そんなことより、フッフ。そうなんだよ『なんか』あったんだよ昨日！」

「おお。何があったんだ？」

内心では全く乗り気ではないが、こうしていいことには話が進まないだろうと思い、洋平はさも興味があるような感じで再度聞き返した。

「フッフッフ。実はな・・・昨日、ついに『影をも切る刀』シャドウブレイカーを手に入れたんだ！！」

『影をも切る刀』とは、最近蒼慈がはまっているオンラインゲーム『サークルオンライン』に出てくる、超のつくレア武器のことである。

「昨日、フラフラッとモンスターを倒してたら、いきなりポロツと出たわけよ！！凄くない！？」

洋平はオンラインゲーム、というものをあまり知らないが、常々蒼慈から聞かされているためある程度のことは知っていた。

「いやあ。前々から欲しかったんだよね」

「それが授業中にボーっとしていた原因か」

「授業中に？」

「さっきまでずっとそのことを考えていたのか？ ってこと」

「おうよ！ さっきまではアレを使うべきか、それとも保存するか、それとも超高値で売るのが考えていたわけよ！ それでだな・・・」

その時、まるで蒼慈の話はもうウンザリだ、とでもいうようにチャイムが鳴った。

「ありやりや。洋平、次なんだっけ？」

「次は化学だったな。そんなことよりお前・・・まあいいわ」

「いいならいいけど。なんか悩みごとあるなら相談のるからなー」

まあそんなときは頼むわ。と言い残して洋平は自分の席に戻っていた。

：なんか言いたげだったな、洋平のやつ。まあいいか。そんな事より早く帰ってえー。ネットゲが俺を待ってるぜ。

例のレア武器をどうするべきか、蒼慈はいまだに考え続けていた。そして、化学の教員が来て授業が始まった。

1 回想（1）（後書き）

なかなか 異世界への話に繋がりませんが・・・

2 回想(2)

3時間目の授業では蒼慈は至って真面目な態度で授業を受けていた。

そして、チャイムによって授業の終わりの時刻が知らされ、委員長が号令をかけて授業が終わった。

「ふう〜。後3時限で帰れる〜」

そう言って蒼慈が大きく伸びをしていた時。

――ピンポンパンポン

校内放送が流れた。

『2年3組、神城蒼慈君。2年3組神城蒼慈君。今すぐ職員室まで来なさい。』

「・・・俺なんかしたっけ？」

「覚えてないのか・・・」

「あ。洋平。俺なんかしたっけ？」

蒼慈の言葉に呆れながら、授業が終わって蒼慈のそこへ来た洋平は言う。

「さあな。とりあえず行ってくれば？『今すぐ』とか言ってるしさ」

「そうだな。たぶんなんかの間違いだろうし。そいじゃ行ってくる」

そう言って蒼慈は立ち上がり、教室の出口へと向かって行った。

「失礼しまゝす」

職員室の扉を開き、蒼慈は中へと入った。

すると奥の方で英語教師が手招きしているのを見て、蒼慈はそちらへと歩いていく。

そして、英語教師の目の前に立った。

「なんででしょう？」

呼び出された理由がわからないといった風で教師の前で首をかしげる蒼慈。

「・・・『なんででしょう？』ですって？あなた自分が呼び出された理由も分からないのですか！？」

英語教師は立ち上がり大きな声で怒鳴った。

彼女の身長はそれなりに高い。男子生徒のなかでいささか背の低い蒼慈の目の前に立たれると、彼女のほうがいくばか上から話すことになる。

職員室内に大きな声が響いたので周りの生徒や教師が振り返るが、誰もきにしない。職員室ではよく見る光景だからだ。

「ええ。わからないから『なんでしよう?』と聞いたのですが、何か問題でも?」

「大有りです! あなたは2時間目の私の授業中に机の上に教科書もノートも出さずにただ窓の外を眺め、授業を聞いていませんでしたね。」

それだけでも許しがたいというのに、あなたという生徒は、私があの時『後で職員室に来なさい』にもかかわらず、あなたは来ませんでした!」

英語教師は蒼慈を睨みつけて、怒りを思いつき彼にぶつけた。プライドが高い彼女は、何より自分の呼び出しを無視したことに腹が立ってならなかった。

「・・・はて、そんなこと言われた覚えは全くないんですけど・・・」

蒼慈はあの時のことが全く記憶になかった。

「『覚えてなかった』・・・よくもまあそんな白々しい嘘がつけたものですね! あなた何故真面目に授業を受けないんですか!」

「受けてましたよ? 真面目に」

「ほお・・・あなたにとっての『真面目』は私の考える『真面目』とはだいぶ違うようですね・・・」

怒りのせいか、教師の顔は真っ赤だった。

「当たり前じゃないですか。人個人によってそんなものの定義なん

て変わりますよ?」

「私が聞いているのはそういうことではありません!」

「じゃあ、なんなんですか? あまり回りくどい言い方をされても時間だけが浪費されるだけなので、簡潔にお願いしてもいいですか?」

「じ、じかんの無駄ですって・・・? あなた・・・」

「で、話の続きをどうぞ?」

神城蒼慈という生徒は年上の人を苛立たせることにはもの凄いや能を持っているらしい。

「・・・あなたは授業中にノートも何も出していませんでした。あれはどういうつもりです?」

眼鏡をクイッと持ち上げ彼を見下ろしながら彼女は言った。

「授業中にノートを出さない生徒なんているんですか?」

「あなたは出していなかったでしょう!」

「? 出しましたよ? 英語の授業でしょう? 教科書 P 8 2 ページの」

「・・・今日の授業は P 8 4 からです」

「え? そうなんですか? 変ですね」

・・・あれれ? おかしいな。英語の今日の授業はちゃんと受けてたと思

うんだけど。

いまだに自分がボーっとしていたを思い出せない蒼慈は一人首をかしげていた。

「あなたは・・・教師をナメているのか!？」

ドンッと教師は自分の机を叩いた。

「何言ってるんですか。自分は先生方のことは心から尊敬しています。決してナメてなんていませんよ?」

ニコリと笑みを浮かべて蒼慈は教師に言った。

「そういう態度が教師をナメていると言ってるんです!!」

「だからナメてなんていませんよ」

「・・・あなたは去年からよくそういう態度をとっていましたね。流石にもう我慢できません。いつもならここであきらめてしまっていました。今回ばかりはそうはいきませんからね!」

そういつてビシッと蒼慈に向かって指を突きつける。

宣戦布告された側の蒼慈はその指を見て、そしてフツと笑った。

「なんですかそのポーズは逆○裁判ですか?それならちゃんとセリフも『意義あり!』にしなきゃ」

確かに言われてみれば今の教師のポーズは、まさにソレである。

「・・・あなたっていう生徒は・・・あなたっていう生徒はっ!!!
! 全くどんな教育を・・・」

「先生」

突如英語教師の言葉を遮り、蒼慈はさっきまでとは違ういたって
真面目な声で言った。

「な、なんですか？謝罪する気にやっとなりましたか？」

いきなり蒼慈の声色が変わりいささか驚きを隠せないまま、教師
は蒼慈を見つめ、彼の真剣な目を見て、蒼慈がやっとな謝る気になっ
たのだと思い、英語教師は真面目な顔で蒼慈を見た。

しかし、そんな教師の内心とは裏腹に蒼慈がとった行動は全く逆
のことであった。

「・・・」

「・・・は？」

2 回想(2) (後書き)

文章力がなくてなかなか話がまとまらず、進まない^^；

3 回想(3)(前書き)

も、もうちょっとで異世界へ・・・

3 回想(3)

その時の英語教師は過去にないほどアホ面をさらしていたに違いない。

向かい会って立っている蒼慈は真横に上30度ほどに腕を伸ばし、その先を指差していた。

その先にあるのは、

「もう時間です」

時計だった。

そして、彼の言ったとおりチャイムがなった。

「では、自分は次の授業があるので、これで失礼します」

そう言って蒼慈は去っていかうとする。

「ま、待ちなさい!! あ、あなたっ! 全然反省してないじゃないの!」

教師の言葉に蒼慈は足を止める。

「いや、反省するも何も、してない罪に反省もクソありませんよ。そんなことより授業始まっちゃったんですけど」

「・・・もう、いいわ。放課後。放課後もう一度職員室に来なさい!」

「放課後?・・・ちょっと待ってください。今日は大事な用事があ

るんですけど」

そう大事な用事が彼にはある。

「大事な用事？ そんなの後にしないさい！ どうせ大した用事でもないでしょ！」

「『大したことない』？ ……いくら教師と言えど、今の言葉は許されませんね」

常に笑っているか、ボーっとしている彼が怒った表情を見せるのはかなり稀なことだった。

「な、なんです？ じゃ、じゃあどんな用事なんです？」

若干後ずさりながら英語教師は蒼慈に尋ねる。すると彼の顔は怒りの顔から一変して、大好きな自分のおもちゃを自慢する子供のように輝いた顔になった。

「ふっ。よくぞ聞いてくれました。実は昨日、念願かってやつと
シャドウブレイカー
『(影をも切る刀)』を手に入れたんですよ！」

「……しゃ、しゃどうぶれいか……？ 『影を壊す者』？ なんですかソレは？」

「『影をも切る刀』です！ 今話題の『サークルオンライン』のレア度MAXの刀ですよ！ あれを手に入れるのをどれほど待ち望んだことか。一体どのモンスターがどの条件でドロップするのか全く分かってなかったんですよ。その状況で自分が一番に手に入れたんですよ！？ すごくないですか！？ これは早く帰って今後どうするか考える

べきなんですよ!」

教師は、蒼慈の勢いに押されて呆けていたような状態だったが、彼が話しおえるとだんたんと冷静になり、徐々に怒りが戻ってきた。

「つ、つまり・・・あなたはそのゲームをするために私の説教は聞けないのですか?」

教師は怒りにプルプルと震えながら蒼慈に向かって静かな声で言った。

「そうですよ。サークルオンライン>先生の話。ですよ?」

「あなた・・・今日は絶対に放課後残りなさい!絶対に帰しませんからね!それに『影をも切る刀』はシャドウブレイカーなんて英訳にはなりません!説教の後に英語の補習もしますからね!」

そう言って英語教師は蒼慈を怒鳴りつけ教室に向かわせた。

しかし、彼がこの日の放課後に彼女の前に姿を現すことはなかった。

今日ある一人の女性がこの学校に来ていた。

彼女は、初めてくる学校に戸惑いながらも確実な足取りで校舎へと入ってゆく。

腰あたりまで伸ばした綺麗な黒髪。そして、出るところはでて、引

っ込むところはひっこんでいる。いかにもお姉さんという雰囲気彼女はある場所へと向かっていた。

廊下を歩くと男子生徒も女子生徒も振り返り、彼女を指差している。

彼女には目的があった。

ずいぶん前から準備をしていた。そして最終準備のためにここに訪れていた。

彼女はある人物を探していた。

その人物を見つけるために一体どれだけの年月と、どれだけの労力がついやされただろうか。

彼女はそんな昔の苦労を思い出しながら思う。

「やっど。やっどだわ・・・やっど」

彼女の足取りは始めてこの学校に来たとは思えないようだった。彼女がカドを曲がろうとした時、後ろから声が掛けられた。

「すみません。すこしよろしいでしょうか？」

声を掛けてきた女の子を彼女は振り返ってみる。

彼女自身と比べれば見劣りするが、その少女はかなり美人であった。

「失礼ですが、あなたはどなたですか？この学校の関係者とは思えないのですが。」

そう、この彼女は初めてここに来たのだ。言ってしまうと不審者だ。

そんな彼女をかけるのはそれなりに勇気があるだろう、しかしその少女には勇気を振り絞ってその女性に声をかける必要があった。

少女は、委員長だった。

少女はこういう時に率先してこういうことをすることが委員長の役目だと思っていた。

「私？」

「ええ、あなたです。この学校で一度も見かけたことがありませんし、教員の方と一緒にいるわけでもありません。一体どちらさまですか？」

彼女は困った。

ここで一体なんと答えるべきか。

彼女には目的があつてこの学校に来たが、誰かに許可をとって入つてゐるわけではない。

つまり、不審者なのだ。

しかし、堂々としていれば誰もきにしないと思つていたので彼女は驚いた。

「うーん。一言で説明するのは難しいんだけど。・・・まあ、あえて一言で言うなら・・・」

目の前にいる少女に対して彼女が抱いた印象は、“からかいがある”だった。

ちょっとしたイタズラ心が彼女に芽生える。

「私はね・・・『魔法使い』よ」

そう言つて彼女はニツコリと笑い少女の横を通りすぎる。

意味が理解できなかったのか少女は固まっていた。

しばらくしてから後ろから少女が何か言っていたが彼女は止まら

な
か
っ
た。
。

4 回想（4）（前書き）

えっと・・・次回では異世界へ行けるはず・・・

4 回想（4）

「私はね・・・魔法使いよ」

彼女が訪れたことによって、ある少年の人生はおおしく狂わされることになる。

4時間目の授業が終わった時、校内放送で不意に呼び出しがあった。

『2年3組神城君。2年3組神城君。至急職員室まで来てください。』

昼休みになり弁当を開けようとしていた蒼慈は不機嫌そうな顔で教室にとりつけられたスピーカーをにらみ付ける。

「ソージ。お前、ちゃんと許してもらったのか？」

片手に弁当をぶら下げて蒼慈の席に洋平が近づいてきた。

「おかしいなあ。『放課後に来なさい』って言われたんだけど・・・」

「どのみち許してもらってないのかよ・・・」

弁当の開きかけた包みをもう一度包みなおし、不機嫌そうにボヤク蒼慈を見て飽きれながら洋平は思う。

：ソージの奴。結局まだ許してもらってないのか・・・どうせソレを見かねた他の教師が説教しようとして呼び出したんだろうな。

「とっと思ってきたら？そんでとりあえず謝ってこいよ。謝ればだいたいなんともなるから。そんでとっとと飯食おうぜ」

「・・・そうだな。今謝れば、放課後早く帰れるかもしれないしなあ。まあ、本日二度目だが、行ってくるわ」

「おう。行ってこい」

そう言って洋平はヒラヒラと手を振って蒼慈を教室から送り出した。

「失礼します」

本日二度目の職員室。しかし、どうやら蒼慈を呼び出したのは例の英語教師ではないようだ。

「神城君。神城君。こっちだ」

そう言って蒼慈に手招きをしたのは、頭のとっぺんが少々残念な古文の教師だった。

手に持ったハンカチでひたすら顔の汗を拭きながら、蒼慈についてくるように言って、職員室にある小さな会議室へと歩いていった。

蒼慈は付いていきながら疑問に思う。

…ん？あの先生じゃないのか？俺、他に呼び出される理由なんてあったっけ？

そして、会議室の前に来て教師が扉を開き、蒼慈に入るように促した。

「え？先生は入らないんですか？」

「あ、ああ。これは君の問題だからね。私が口を出すことはないよ。話がまとまったら言いなさい。外で待っているから」

そう言って古文教師は扉を閉めた。

この会議室という部屋は、主に教師が生徒の進路指導にあたったり、生徒の親を呼び出した時に使われたりする部屋だ。

室内は綺麗だった。

床はカーペットで、部屋の中央には教室の机を4つくっつけたくらいの大きさの木製の机があり、その両脇に2個ずつ座り心地のよさそうな椅子がある。

状況が理解できず、蒼慈は困りながらも部屋にある椅子に腰掛けようとした。

蒼慈が椅子に座ろうとした時、不意に目の前で何かが動いた。

「・・・っ」

とっさに座りかけていた腰を上げる。

さっきまでは確かに誰もいないはずだった。

少なくとも蒼慈はそう思っていた。

…い、いつの間に・・・さっきはまるで気配もなかったのに。

「あらあら。いきなりそんなビックリしないで欲しいんだけど。レディに対して今の反応は失礼よ。ちょっと傷ついたわ。とりあえず座ってくれる？」

薄く笑いながら、部屋の先客は大して傷ついた様子もなく彼女の向かいの椅子を指差した。

蒼慈は言われるままに椅子に座った。

「すみません。誰もいないと思っていたもので」

「そう」

蒼慈は目の前に座っている女性に頭を少し下げる。

「えっと・・・どちらさまですか？自分に何か用事でもあるんでしょうか？」

蒼慈がそう言うのと、目の前の女性はニヤリといやらしい笑みを浮かべ話し出した。

「一応さっきの教師には私はあなたの生き別れの姉と言ったから後で口裏合わせといてね」

「は？」

「まずは自己紹介からはじめましょうか。と言っても私はあなたのことはすでに調べてあるんだけどね」

「・・・調べた？・・・しかも姉だなんて、嘘ですよ？」

蒼慈に姉はいない。

戸籍上はそうなっている。

しかし、生き別れだとしてここまで似てない姉弟なんているはずない。

蒼慈は背が低い。そして、どちらかというと童顔よりだ。しかし、目の前にいる女性は背が高く、なにより大人びている。

多分見た目よりも3，4歳若いのだろうと思われる。

「ええ。嘘よ。そんなことより自己紹介してもいいかしら？」

知らずの間に目線を地面に落としていたことに気がつき、蒼慈は目線と女性の方へと戻す。

「ええ。どうぞ」

「私の名前は、咲森華奈恵もりさきかなえ。わけあってあなたに会いにきたの」

「わけあって、か。よほどの用事なんですか？」

「ええ、もちろんよ。」

「俺のことは、調べたって言ってましたよね。なら俺の自己紹介はいりませんよね？できれば先にその『わけ』を教えてくださいませんか？」

華奈恵は少しの間、考えるように下を向いた。
彼女は顔を上げると、何かを決意したような面持ちで言った。

「私が“異世界”に行くのを手伝って欲しいの。」

4 回想(4)(後書き)

文章力なくてすみませんOTL

5 回想(5) (前書き)

えっと・・・まだ

異世界へ行ってないです・

回想長いです

5 回想(5)

「・・・は？」

わけがわからない。

いきなり“異世界”へ一緒に言って欲しいと言われても話が見えてこない。

「わけがわからないかもしれないわね。でも信じてもらうしかないのよ」

初めからそういう反応が来るとわかっていたかのようにだった。

「信じる・・・？何言ってるんですか。あなた、俺をからかいに来たんですか？」

さすがに“異世界”なんて言われたらからかわれてるとしか思えないだろう。

しかし、対する華奈恵の方はいたって真面目である。

「からかいに来るためにわざわざ6年もかけてあなたを探し出したりしないわ」

「6年？俺を探すためにそんなに時間をかけて、その目的が一緒に異世界に行くため？」

「そうよ」

「・・・頭大丈夫なんですか？」

蒼慈が疑うのも当たり前のことだ。

この世界で“異世界”があるなんて本当に思っているのは、まだまだ子供の子かどこか妄想に浸りすぎてる子くらいだ。

「ええ。大丈夫よ。私はどうしても“異世界”へ行かなければならないのよ。」

「どうして俺と一緒に行かなければいけないんです？」

「私はね、魔法使いなの。」

…でたよ。“魔法使い”。くると思ってたよこの展開的に。

「信じてないでしょ。」

…当たり前だろ。

「でもね、実はもう魔法使ってるのよ。まあ、これは魔法というより能力、といった感じかな」

…この人、頭ヤバイわ。

「『もう使ってる』？　どういうことですか？」

華奈恵は組んでいた足を組みなおしながら、どこか得意げな様子で言った。

「さっきの教師、おかしいと思わない？」

「教師・・・？」

さっきの教師。それはつまり、蒼慈をこの部屋に入れた古文の教師のことだろう。

：『おかしい』・・・？

「・・・あなたが俺の生き別れの姉だという嘘を信じていたということですか？」

「そうよ。物分りがいいと助かるわ。さっきの教師が何故、私のことをあなたの生き別れの姉だと信じていたのか。答えは簡単、私の“能力”よ」

そう言われたとき、蒼慈の顔はそうとう嫌そうな顔になっていた。

「どうということなんです？」

「あの教師の、というか職員室に人全員の私への認識に“干渉”したのよ。つまり、最初私への“不審者”という認識を“神城君の親戚”へと、ね」

華奈恵が職員室に入ったとき、例の委員長の子が後ろから追いかけてきて職員室で『この人は不審者です』なんて教師に言うものだから、華奈恵は能力を使ったのだ。

そして、華奈恵への認識を変えた。

「そんな不確かなものを信じろと？」

何故かこの華奈恵という女性の話が真実めいて聞こえてしまう。

「そうね。確かに分かりづらいわね。私の能力は“干渉”。火をだしたり、なんていう派手なのではないしね」

悪い予感しかない。

「もういいです。こんなくだらない話になんて付き合ってもらえませんか。戻ります」

そう言っただけで席を立とうとした蒼慈に華奈恵は落ち着いた様子で言った。

「せめて話を聞くだけでもいいんじゃないの？」

「話？こんなくだらない話を？俺に何のメリットがあるんですか？」

華奈恵を睨みつけながら蒼慈は言う。

「そうね。ことが終わった後は人生を資金面で援助するわ。今、お金なくて困ってるんでしょう？」

そういわれた瞬間、冷や汗がでるのを感じた。

「あんたには関係ないだろ？」

声に怒りがこもるのがわかった。

「やっぱり困ってるのね。そんなことより話を戻しましょう。」

「まったくください。なんでそんなこと知ってるんですか？」

「知りたい？」

彼女は挑発するような目線を送ってくる。

「・・・」

「とりあえずは話を一回全部させてもらうね」

そして、一拍あけて彼女は話の続きを話し始めた。

「この世の中にはね、何十万人の確立で能力者が生まれるの。まあ、魔法使いみたいなものよ。そして、私の一族は代々“干渉”の能力者が生まれるのよ。私達が何故、今まで常に“干渉”の能力者を生み出し続けたかのはわからない。けど、私たちにはある使命があるの」

「使命？」

「うん。こちらに入る、ある能力を持った者と“異世界”へ行き、魔王を倒すという使命よ」

「その“ある能力者”ってのが俺なわけですか・・・」

「その通り。私たちは代々そうやってきたわ。魔王を倒さないことにはこちらの世界との均衡が崩れ、この世界が滅びるらしいわ」

「・・・らしい、って曖昧ですね」

「当たり前じゃない。確証があるなら、その時はもう滅びる時よ。」

それで、私はあなたと一緒に“異世界”へ魔王を倒しに行かなきゃいけないのよ」

「・・・はあ」

馬鹿馬鹿しいにも程がある。“異世界”“魔法”“能力”。そして“魔王”。

まるで御伽噺のようだ。“勇者”“英雄”、男の子なら誰でも一度はあこがれる。

だからといって、誰もそれを本気で願ったりなんてしない。

「信じてくれなくてもいいわ。一緒に行ってさえくれれば問題ない。でも、一度向こうへ行けば魔王を倒すまでは帰れない」

「・・・」

「信じられないでしょうね。だから行ってしまえばいいじゃない。行けばわかるわよ」

「俺は“異世界”なんて信じてない。でも行けるといいうなら行ってもいい」

「そう。ありがとう。もう後戻りは許されないからね。“男に二言はない”はずよね？」

挑発するように華奈恵が蒼慈に向けてそう言う。

「ああ。もちろん。“男に二言はない”」

「ふふふ。じゃあ、ヨロシクね。“契約”の能力者さん」

5 回想(5) (後書き)

次こそはっ！

なんかマジ話が進まなくて テンポ悪くてスイマセンOTL

1話（前書き）

やっとなですね。

やっとな本題です。

序章が長くて本当に申し訳ないです。

1話

「ふふふ。じゃあ、ヨロシクね。“契約”の能力者さん」

「“契約”？それが俺の能力だと？」

今にも噴出しそうだった。まさか本当に蒼慈にも能力があるなんて華奈恵が思っているなんて。

「そうよ。自分ではわかってないみたいね」

「当たり前です。俺にはそんな力はないし」

「ふふ。まあいいわ。とりあえず私と“契約”してもらえる？」

「いや、そもそもそんな能力、俺にはないから。そもそもあったとしても使いか・・・」

ふふふ、と口元に微笑を浮かべたまま華奈恵はみを乗り出し蒼慈へと近づいた。

そして、蒼慈がそれ以上何か言う前に迷わず唇を重ねる。

蒼慈は自分の唇に当たるやわらかいものを感じた。

「んんんっ!？」

時間としては10sほどだろうか。蒼慈が必死で顔を離そうとしても華奈恵はビクともしなかった。

そして、華奈恵が顔を離れた。

「・・・ちょ、一体なんのつも・・・」

蒼慈が何か言おうとするが、華奈恵の指がその唇を押さえる。

「今から言うことを復唱して。“男に二言はない”はずよね？」

そういわれてしまうと、蒼慈は華奈恵に従うしかなかった。

「復唱してね。『我、汝との間に契約を結ぶ』」

「・・・『我、汝との間に契約を結ぶ』」

「名前を自分のに変えて。『我が名は“華奈恵”。ここに契約を結ぶ者の名なり』」

「・・・『我が名は“蒼慈”。ここに契約を結ぶ者の名なり』」

「『盟約の血に従い、ここに契約を』」

「・・・『盟約の血に従い、ここに契約を』」

「『契約』」

「『契約』」

その瞬間、突然光が二人を包み込み、瞬時に消えた。

「・・・なんだ今の光は。手品なんかですか？」

「ふふ。そんなこと言っちゃって。分かってるくせに。わかるでし

よ？ 私達の間に生まれた“契約”が」

「・・・知りませんよそんなもの。そんなことよりちゃんと説明して・・・」

華奈恵の指が蒼慈の唇を押さえる。

「先に“異世界”へ行ってもいい？ あなた、そうでもしなきゃ信じなさそうだし。それと、行ったら結構な時間戻れないから、色々覚悟してね」

「・・・別に心残りなんてないし、行けるはずない。本当に行けるというなら、今すぐ連れて行ってみせてくださいよ、“魔法使い”さん」

どこが挑発するような蒼慈の口調。

しかし、華奈恵はそんなものを気にした様子はない。

「『魔術師“華奈恵”の名において命ずる。“異世界”への扉よ、今ここに開きたまえ。我は“巫女”なり。我が命に従え。開け、“^{ゲート}扉！”』」

その瞬間、目の前が真っ白になった。

…いわゆる回想終了というやつだ。

蒼慈はありえないくらいの高さから地面に落ちた。
常人なら即死間違いなしだ。なのに、何故か蒼慈は生きている。

「・・・なんでだ？」

「簡単に言うとパワーアップしたからよ」

横にふわりと華奈恵が降り立つ。

「・・・パワーアップ？意味不明だ。それより、なんで助けてくれなかったんですか？」

「助けるよりこうしたほうが早いし。」

「俺が死んだらどうするんですか・・・」

怒る気力すら湧いて来ない。

「死なないわよ。てかあなたが死んだら、私戻れなくなるし、そんなことさせないわよ」

「これ・・・映画の撮影かなんかですか？」

そう言って蒼慈は周り見渡した。

木が回りに生い茂っている。かといって森というわけではなく、すぐ向こうには町へと続くと思われる道がある。

こんな場所、少なくとも学校近辺にはなかった。

そうやって蒼慈が考え込んでいる時。

「うわぁ！すごい！すごい！すごいよコレ！」

いきなり横でうれしそうな声が聞こえた。

「・・・どうしたんですか？いきなり・・・」

蒼慈は目の前の光景が信じられなかった。

華奈恵の手から火が生まれていたのだ。

「どうなってるんです、ソレ？意味がわからないんですけど」

「ふふふ。ここが“異世界”ってことよ！」

まるでそれ以外の答えなんてありはしないというように華奈恵は言い切る。

「元の世界で魔法使いと呼ばれていた、まあ自称だったけど。その人たちは元々かなりの魔力を持っているのよ。でも、元の世界は元々魔法の存在がない世界だったから、その魔法の中で最も強い魔法が、能力となっただけ使える、という状況だったわけ」

「・・・それで？」

異世界に来た。ということはいまだに蒼慈は認められないでいた。

「こちらの魔法がある世界に来たから、私の魔法はかなりパワーアップしたってこと。まあ、言ってしまうえば、向こうで能力が使える人間がこちらにきたら、こちらの魔法使いの上から数えて100人

に入れるレベルよ。しかも、私はあなたと“契約”したから多分、ほぼ最強の分類に入るんじゃないかしら」

：意味がわからん。そもそもここはどこなんだ？さっきのはドッキリか企画かなんかだろう。じゃなきゃアノ高さから落ちて死なないはずがない。

「ほら。実際に“こっち”に来たんだから、そろそろ信じたら？」

「信じられるわけないでしょ・・・こんな非現実的なこと」

「でも、これからはこれが現実になるのよ。とりあえず町にでも行って、魔王の情報を聞きまわしましょう」

「ちょっと待てい。俺の能力？とやらも説明してもら・・・」

蒼慈はまたもや最後まで言うことはできなかった。

なぜなら、すぐ近くに、

——ドォン！という音と共に巨大な物体が降ってきたからだ。

「・・・は？何コレ・・・ドラゴン？？」

そう。蒼慈達に背を向けて降ってきたものは紛れもないドラゴンだった。

ドラゴン。龍。

そんなものは、あくまでゲームやお話の中でしか存在しない。

ソレが今、目の前にあった。

2話

「・・・まてまて。なんじゃコリヤ」

ドラゴンが獲物を探すようにノシノシと林の方へと向かっていった。

「何って、ドラゴンよ。見たら分かるでしょ？」

「わかる。分かりますよ。でも、ドラゴンなんて空想上のモンスターの話でしょっ！」

「でも、その目で見たでしょ？それにここは魔法が使える世界よ？ドラゴンくらい普通でしょ」

「・・・まじかよ」

蒼慈と華奈恵がそう言い合っている時、不意に近くで叫び声が聞こえた。

「っ！・・・今の悲鳴か！？」

「そうみたいね。あのドラゴンの仕業でしょ。行ってみましょう」

華奈恵と蒼慈はドラゴンの向かった方へと走っていった。

「あの、俺も魔法とか使えるんですか？」

さっき目の前で華奈恵が火を出してるのを見ると、やはり気にな
ってしまう。

「もちろんよ」

蒼慈と華奈恵はドラゴンを追った。距離はほとんどなかった。

「いたわ。・・・そうねちょうどいいわ。あなた、魔法試してみる
？」

ちょうど林を抜けたところにドラゴンはいた。蒼慈達はドラゴンの
真横10mほどに立つことになった。

ドラゴンの体長は10mほどの大きさで成人男性が5人いても足
りないくらいのおおきさだった。

全身には剣など効きそうにもない硬そうな赤い鱗で覆われて、い
かにもドラゴンといった感じだった。

そして、さっきの悲鳴の正体はドラゴンの前で腰を抜かしている
女の子だった。

「ひ、ひい・・・だ、誰か・・・助けて・・・」

涙をボロボロと流しながら少女は助けを求めている。

「魔法とか俺使い方知らないんだけど。それよりこの状況ヤバくな
いですか？」

「簡単よ。あなたの好きなネットゲームにあるような技を思い浮か
べて技名言っとけばなんとかなるわ。大丈夫。大丈夫。あなたが助け

ればね」

魔法なんて使い方、よもや存在すら知らなかった人間が魔法なんでもものいきなり使えるはずがない。

「大丈夫。あなたなら使えるわ。」

「無理だから。そんなことより早くあの子助けてあげてくださいよ。あなたなら楽勝でしょう？このままじゃ食われちゃうんじゃないですか？」

「だから、あなたが助けてあげればいいじゃない」

「・・・はあ。だいたい、俺には元々能力なんてないし、魔法なんて使えませんって」

しかし、だからといって放っておくわけにもいかない。

蒼慈はお人よしというわけでもないが別段冷酷なわけでもない。目の前で誰かが助けを求めているなら、なるたけ助ける努力はする。

「・・・あれ着ぐるみとかじゃないのかよ・・・もしこれで技名叫んじやって、なんも起きなかったら・・・俺、超イタイ奴じゃん」

「大丈夫。大丈夫。こっちの世界に来たんだから、私の言ってたことも信じてくれるでしょ？それに、あなたも能力があるんだから、こちらではかなり強いんだよ？」

蒼慈はいまだに信じられないでいた。いや、信じられる方がどうかしてる。

“異世界”への扉が開き、こちら側に着ても。あの高さから落下

しても自分が大した痛みすら感じなかったことがあっても。目の前に空想上のモンスター、ドラゴンがいたとしても。いまだに信じられなかった。

「・・・魔法、か。使えるなら結構憧れはするんだけど・・・」

そうつぶやいて蒼慈は右手に集中する。

蒼慈は自分の体の中にある魔力なんてものはわからない。でも、魔法といえはこういうものだろう。

そして右手をドラゴンの体と自分の目線との間に手を開いて遮るような形で持ち上げる。

想像するのは鋭利にとがった氷。

蒼慈がネットゲームで使っていたキャラは魔法剣士というジョブだった。

魔法剣士は剣と魔法を使えはしたが、魔法使いのように全部の属性は使えず、蒼慈はいくらかの種類の魔法を選んで使っていた。その中でもお気に入りだったのが氷の魔法だった。

本人曰く、『かっこいいじゃん?』らしい。

「貫け、アイスニードル!」

蒼慈が叫ぶ。途端、目の前からツララが真横になった状態でドラゴンに向けて放たれる。

そして、そのツララはあっという間にドラゴンの上半身を奪って、ついでに木々を何本もぶっ倒して消えた。

夢を見ているかのようなだった。自分が思ったもののそのものが本当に起こるとは、しかも魔法。

「・・・マジかよ。・・・ヤバイわ。ついには俺も幻覚を・・・」

そう言って頭を抱え込む蒼慈をよそに華奈恵は泣いていた女の子へと近づいていった。

「ねえ。大丈夫？」

少女はまだ幼さの残る顔つきで、15、6歳といったところ。

背丈は座り込んでしまっているのて正確にはわからないが150cm前後といったところだろうか。

少女の服はあまり汚れた様子はなく、怪我をしているわけでもなさそうだった。

…ドラゴンが出て腰を抜かしてヘタたり込んだ、ってとこかな。

「・・・あ・・・え?・・・」

少女は目の前のドラゴンが突然魔法によって倒され、自分が助かったという状況がうまく飲み込めていない様子だった。

「ドラゴンはまだ死んだわ。あそこで一人頭をかかえている子が助けてくれたのよ」

そう言って華奈恵は蒼慈を指す。

蒼慈はいまだに額に手を当てて、下を向いていた。

「あ・・・私、生きてる。ドラゴンに襲われそうになったのに生きてる・・・」

少女はやっと状況を理解したようだった。

ドラゴンの死体を見て、それから蒼慈に視線を移し自分が助かったという状況を再度確認した。

3話

「助けていただいてありがとうございますっ！」

そう言ってエリルと名乗った少女は頭を下げた。

あの後、助けた少女に町まで案内してもらい、今は彼女の家に来ていた。

「いえいえ。そんな、人として当然のことをしたまでですよ。頭をあげてください」

そんな蒼慈を横目で見ながら華奈恵は今後どうするか考えていた。

：とりあえずは、ギルドへ行って冒険者登録しなきゃね。冒険者になれば色々と便利だし、その上情報を手に入りやすい。

「ちょっといいかしら」

すっかり仲良くなった蒼慈と話しているエリルに華奈恵は声をかけた。

「は、はい。なんでしょうかなエさん」

「この町にギルドはあるかしら？」

「ギルドですか？ありますけど・・・依頼を受けに行くんですか？」

「登録すらしてないから、そっちを先にしようと思ったのよ」

「ギルド？そんなのがあるのか・・・マジでネットゲームの世界だな」

横から蒼慈が話しに割り込んでくる。

「ねっとげえむ？何ですかそれ？」

「え？いや、なんでもないよ」

「あははと言って蒼慈はなんとかごまかす。」

「まあ、できればギルドの場所を教えて欲しいんだけど、いいかしら？」

「もちろんですよ！」

「じゃ。早速案内してもらってもいいかしら？」

そう言って華奈恵は立ち上ががった。

「ちょ、もう行くのかよ」

「あんまりゆっくりもしてられないのよ」

華奈恵はそう言って立ち上がり扉へと向かっていった。

「ここがギルドです」

そう言ってエリルがつれて着てくれたギルドは、蒼慈が思っていたのと寸分かわらぬ形だった。

言うならば、モ〇ハンの集会所のようなところで、看板にはギルドらしき文字が書いてあった。

「ありがとう、エリル。もう帰ってもいいわよ」

「え？でもっ・・・」

「いいの。いいの。お礼なんて別にいらないから」

ヒラヒラと手を振ってエリルを追い払うようにする華奈恵。

明らかに残念そうにしている蒼慈に向かって華奈恵は耳打ちした。

「あの子がいるとあなたの能力説明しづらいのよ。」

「ああ、なるほど・・・仕方ないか。またね、エリル」

「・・・また機会があったら家によってくださいね！」

名残惜しそうにしていたが、そこでエリルとは別れる形となった。

「さて、とりあえず登録しましょう。その後ちゃんと話すから」

なんだかんだで、結局今もまだ自分のことが蒼慈は分かっているままだった。

「はいはい。わかったよ」

ギルドの扉をくぐると、中には冒険者と思われるたくさんの人
がいた。

「おっと。これはこれは、なかなかのべっぴんさんじゃねーかあ。
そこの姉ちゃん、そんな餓鬼じゃなくて俺と良い事しようやあ」

そう言って話しかけてきたのは、明らかに酒が回ったと思われる
赤い顔をした大柄な男だった。

背中には大きな剣を背負っていたため、剣士だと思われる。

「ごめんなさい。私、年下が好みなのよ。」

そういつて華奈恵は男の下品な誘いを受け流し、何か言われる前
に受付へと行った。

蒼慈は若干小さくなりながら、華奈恵の後を着いていった。

「初めての方とお見受けしますが、こういったご用件でしょうか？」

受付に立っていた女性は、華奈恵が受付前に来た時にそういった。

「ギルド登録したいんですけど、いいですか？」

「はい。かしこまりました。そちらの方もですか？」

「はい。彼も一緒をお願いします」

蒼慈が何か答える前に華奈恵が蒼慈の分も登録するように言った。

「では、ここに名前をお願いします。」

「すみません。私達、字が書けないので、書いてもらってもいいですか？」

そう、華奈恵と蒼慈はこの世界の字が読めないし書けない。なに何故か言葉は話せるしわかる。

このことは、さつきギルドの看板を見たときに思ったことで、蒼慈は不思議に思っていた。

…まあ、後で聞けばいいか。

「では、名前を言ってもらえますか？」

「私が、カナエ・モリサキ。で、彼がソウジ・カミシロ」

「・・・はい。では、こちらに血印をお願いします」

受付の女性は2枚の紙に二人の名前を書き、ポケットから小さなナイフを取り出した。

華奈恵はソレを受け取ると、躊躇なく指の先に滑らせ、そのまま言われたところに指を押し付けた。

「うげ、まじかよ。血印とかいつの時代の・・・」

「ほら、指かして。私がやるから」

そう言って華奈恵は蒼慈の手を強引に引っ張り、指にナイフを滑らせ、そのまま用紙に手を押し付けた。

：うわぁ。なんか全部やってもらって、俺赤ちゃんじゃねえかよ。
なんか周りの視線もアレだし・・・

「はい。確かに血印を確認しました。では、ギルドの説明をします」

ギルドとは、各地からやってくる冒険者が生活していくために、
護衛任務、討伐任務、はたまた雑用など、
色々な人が依頼したものをこなすことで報酬を受け取り、生活して
いくためにある。

そして、依頼にもい難易度というものがあり、それによって危険
度や報酬が変わる。

冒険者自身にもランクというものがあり、それによって受けれる
依頼が変わるのだ。

ランクは下からE－、E、E＋、D・・・A＋、S、SS、S
S、となっている。

SSSクラスはもはや英雄扱いである。

「では、こちらがお二人のギルド証です。今回の登録は無料ですが、
失くして再発行の場合50銀貨かかりますので、ご注意ください。

依頼の受け方は、そちらのボードから依頼用紙をとって受付まで
持ってきていただければ受けることができます。

何か、質問などはございますでしょうか？」

「いえ。一通りわかったわ。また明日から受けるのでその時はよろ
しくするわ」

華奈恵は蒼慈が何か言う前に蒼慈の腕をひっぱってギルドの外へ
と出て行った。

3話（後書き）

フラグ立ってないです。
全然たってないですから。

4話

「なんか怒涛のような一日だったぜ」

今二人は森の中の開けた場所に来ていた。
ここなら誰かに聞かれる心配もない。

「で、ちゃんと説明してくれるんですよね？」

「ええ、もちろん。どこから話そっか・・・じゃあ、まずはこの世界からね」

そう言つて華奈恵は話始めた。

「この世界は“異世界”よ。もうそれはわかったわよね？・・・それで、ここには魔法があつて、化学はない。それもわかった？」

蒼慈は頷く。魔法は実際に自分で使つたのだから。

「そして、この世界には“魔王”がいる。私達はそれを倒さなきゃ帰れない。これも、わかった？」

「何故？こっちにこれるなら帰ることも可能なんじゃ？」

「それが無理なのよ。理由は知らないわ。そして、何故か魔王を倒すと帰れるわけよ。わかった？」

「オッケー。わかった。で、次は俺について教えてくれない？俺を『探してた』ってことも含めて」

華奈恵は頷いた。

「それを話すには、まず私のことから話すわ。私の一族は代々“干涉”の能力をもつ一族なの。それで、“異世界への扉”を開けるのは、

“異世界”へ“干涉”できる私達のみ。でも、私達の力では到底“扉”は開けない。そこで、あなたの一族が必要になるの」

「俺の一族？」

「そう。あなたは代々“契約”の力を持った一族なのよ。“契約”の力は契約したものの力を大幅に上げる。だから、私達とあなたの一族は、代々“契約”を結びこの世界に来る。そして、魔王を倒して帰ってくる。というわけ」

「ふーん。じゃあ、なんで俺を『探してた』の？」

「私達は家同士、その時が来たときだけ連絡を取り合ってたの。だから、今回もそろそろだと思ったから、あなたの家へ連絡した。そしたら・・・」

「繋がらなかった、か。」

華奈恵が言う前に蒼慈がその言葉を遮る。

「そう、元々私のことあなたのところは電話番号を知っている程度だったのよ。本当にそれだけだった。だから、唯一の生き残りのあなたを探すのにずいぶん手間取ったのよ」

「なるほど。そゆことか。じゃあ、魔法とやらを教えてくれる？」

蒼慈にとっては自分の身の上のことなどどうでもよかった。

それよりも、今大切なのはこの世界でどう生き抜くかだ。

「・・・前にも言った通り、元の世界での“能力者”は世界によってセーブされて、なお力があふれ出した者達。だから、基本的に私とあなたは最強よ。特に、あなたはね」

「どうということ？」

「“契約”したら何故力が増えるのか。その力はどこから来るのか。わかる？」

「・・・俺の中？」

「おしいわ。でも、大体そんな感じよ。元々“契約”の能力者はかなりの力がある。でもそれが“契約”であるがゆえに使い所がない。だから気づかないけど、能力者のなかでは最強よ。

そして、“契約”した時に増える力は、あなたの力の一部が複製されたような形で私に移った。」

「力の一部ってのは単純に魔力のこと？」

「違うわ。あなたは、あなた達“契約”の一族は、生まれた瞬間に世界と“契約”するのよ。これに例外はないわ。そして、世界から庇護を受ける。それが私にも、ってことになる」

「へー。俺、結構強いのか？」

言いながら蒼慈は自分の手を見つめる。自分が強いなどとは一度も思ったことがなかった。

「ええ。結構どころか無敵よ。」

「でも、俺魔法の使い方、イマイチわからないんだけど」

「使い方なんて、もとよりそんなの必要ないわ。ドラゴン倒した時と一緒にいいのよ。この世界の住人は詠唱やらなんやらしてるけど、私たちは必要ないわ」

「なるほど、でこれからどしたらいいわけ？」

「とりあえず、今日の宿が問題ね。それと、私のことは華奈恵で構わないわ。“契約”したから、一応私があなたの下につくことになるから。変に年上だとか思わなくていいわ」

「了解。なら俺も蒼慈でいいよ。いつまでも“あなた”じゃ居心地が悪い」

「わかったわ。じゃあ、宿を探しましょうか、さっきドラゴン倒した時に鱗剥ぎ取ったから、それを売って宿に泊まりましょう。」

そして、二人はドラゴンの鱗を換金できるところを捜しに行った。

ちなみにドラゴンの鱗は一枚50銀貨で売れ、合計4枚あったため合わせて2金貨になった。

そして、そして、宿代は一晩飯つきで、2銀貨だった。

「わりと良いホテルだから、一拍2, 3万はするとして、1銀貨1
一万くらいかな？てことは、1金貨が100銀貨だから・・・10
0万？あれ？ドラゴンの鱗一枚50万で・・・高いな。

2金貨てことは、俺日給200万？・・・あれ？なんか金銭感
覚おかしくなりそう・・・」

蒼慈はぼやきつつ布団へと潜った。

もちろん華奈恵と部屋は別々である。

4話（後書き）

主人公のチートさはまだまだここからです（笑）

文章をうまくまとめられなくてなんかズルズルといきそうですが・

・
温かい目で見守ってくださいOTL

5話

「ふああゝ」

太陽の光を感じて目を覚ます。
いつもと違う天井が蒼慈の目に映る。

「ああ・・・そうか。夢じゃないんだな」

あらためて蒼慈は異世界へ来たことが夢ではないと思った。
家のほどではないが、十分にフカフカで寝心地の良いベッド。
体を起こして窓を見ると、日本とは全く違う景色が映っていた。

「はあ・・・」

ため息が出る。

別に異世界というものは嫌いではないと蒼慈は思う。
誰しもが憧れる“魔法”。今の蒼慈はソレが使える。

…魔法か・・・なんでもできるんだろうな。

魔法があればなんでもできる。なんていうのは魔法のない世界の
住人しか思わないことだ。

この世界では魔法で全てが決まる。
魔法によってこの世界は回っている。

…俺は、強くなれるんだろうか・・・

元の世界では何の力もないただの高校生だった蒼慈。

こちらの世界に来て彼は力を得た。

「はぁ・・・」

しかし、まだどれほどの力が自分にあって、自分がどれほどの強さなのか、蒼慈はまだ知らない。

「とりあえず・・・起きるか」

そう呟いて蒼慈はベッドを出た。

「・・・あ、おはよう蒼慈」

「ん、おはよう」

部屋で服を整えて蒼慈は下の階へと降りたところで華奈恵と出会った。

ちなみに服はこちらに来た時と全く同じだった。

「飯はここで食べるのか？」

蒼慈と華奈恵がいるのは宿屋の一階の食堂のようなところだった。

「ええ。そうみたい」

二人はご飯を配っているところまで行き、自分達の分の朝ごはんをトレイに乗せ、席へと向かった。

「飯は・・・普通だな」

二人のトレイの上に乗っている食べ物はほとんど同じだった。
蒼慈は、パン2枚と飲み物。

華奈恵は、蒼慈と同じパン1枚とサラダと飲み物だった。

「蒼慈」

ふと華奈恵が思い出したように蒼慈に呼びかける。

「ん？」

「これ食べたら、服買いに行きましょ」

彼らは今だ元の世界の服のまま。

こちらの世界でこの格好はいささか目立つ。

そして何より、毎日同じ服など着てられない。

「そうだな」

そして、しばらくして食べ終わって空になった皿をトレイに乗せ、
それを返してから二人は買い物をしに外へと出て行った。

「・・・おい」

「ん？ 何をしたの？」

「なんで俺が全部持つてるんだよ！」

今蒼慈の腕の中は華奈恵が買った物の袋でいっぱいだった。

「男の子が荷物もちするのは当たり前じゃない」

当然、とばかりに華奈恵は蒼慈に言う。

「一応、俺の方が立場的に上にあるんじゃないのか・・・？」

『“契約”したから、一応私があなたの下につくことになるから』
と蒼慈に言ったのは紛れもない華奈恵だった。

「それとこれとは別よ」

「なんで別なんだよ・・・」

はあ、とため息をつきながら蒼慈は華奈恵の後を追いかける。

これでは華奈恵が言った立場とは全くの逆ではないかと蒼慈は思う。

…なんで荷物もちなんか・・・

「あ！あそこのお店の服！・・・あそこ行きましょう、蒼慈！」

珍しい店を見つけては入って服やら何やらを買う華奈恵。

ちなみに蒼慈自身の服は最初に入った店である程度買ってしまった。

「はあゝ。いい年した大人が何はしゃいでんだよ。みっともない」

華奈恵に聞こえないような声でボソリと蒼慈は呟く。

「蒼慈いゝ。早く早く、これ持って！」

：買うの早いつての・・・てか、毎度毎度店員さんのその目線がどうしようもなく嫌なんだと・・・

蒼慈にそうやって荷物を持たせてる姿は周りからみると、体よく扱われている彼氏かパシリのようには見えならしく、物を買って、それを華奈恵が蒼慈に持たせるたびに店員さんが哀れみの目線を蒼慈に送るのだ。

「もう・・・勘弁してくれ・・・」

こちらの世界にて何故か知らないけどパワーアップしたため蒼慈は体力的には問題は全くなかったが、

「俺の精神しんせいがもたねえ・・・」

「蒼慈！早く！」

大きくため息をつきながら蒼慈は華奈恵を再び追いかけた。

「今日は買い物で終わりそうだ・・・」

「また、えらく買い込んだもんだな・・・」

呆れた声で蒼慈は広場のベンチらしき物に座りながら華奈恵に言った。

日は沈みかけていてあたりは赤く染まっていた。

「いいじゃないの。お金はいっぱいあるんだし」

「お金はあっても、体は一つしかないんだって・・・」

ため息をつきながら疲れた顔の蒼慈と違って、華奈恵はだいぶ満足したような顔だった。

「こっちに来るときは何も持ってこれないから、服とかが変なのしかなかったらどうしようか、それが一番の心配だったのよ」

「ふーん。だからって子供じゃないんだし、はしやぎすぎだろ・・・」

「うっ・・・い、いいの！女の子はそんなものなの！」

まるで駄々っ子のような華奈恵の口ぶりに蒼慈は吹き出した。

「くくく・・・もう、女の子って歳でもないだろうに」

「く、くうううう」

恥ずかしそうに下を向く華奈恵。

「實際華奈恵って何歳なん？少なくとも俺よりは年上だと思うんだけど」

「・・・21」

「・・・え？」

そう言っただけで蒼慈は横に座る華奈恵の全身を観察する。

「な、何よ！」

「いや、精神年齢と実年齢が一致しないから聞き間違いかと思って」

「なんですって！？どこが一致しないのよ！元の世界じゃ、街中を歩くだけでモデルの勧誘受けるしナンパもされる！待ち行く人が皆振り返るのよ！」

「自分で言っていると恥ずかしくならないか？」

「・・・っ！」

「まあ、確かに美人だよ・・・」

「で、でしょ！」

それだけを取り柄なのだろうか、華奈恵は安心した顔になる。

「喋らなきゃな。初めて会ったときはもっと落ち着いてたのにな」

「あ、あれは！・・・今日はたまたまよ！たまたま！偶然！」

「はいはい・・・とっと帰ろうぜ」

「ちょ、ちよつと！誤解を解かせないさい！」

「分かった。分かった。とりあえず帰ろうぜ」

「あ！その言い方は分かってないわ！・・・ちよつと！」

喚いている華奈恵を置いて蒼慈は荷物を持って宿屋へと向かった。

6話（前書き）

なんか物語の日数進むのがとことん遅いですけど御気になさらず。
もとより文章力がないためかなり雑でワンパターンですけど、それ
もまた御気になさらず・・・

6話

「こんちわーす」

蒼慈は勢いよくギルドの扉を開けた。

その瞬間、ギルド内の人の視線が一気に集まり、すぐに元の目線へと戻った。

蒼慈は華奈恵とボードの方へと歩いていった。

「蒼慈、これなんてどう？」

そう言って華奈恵が指さした依頼書は、討伐任務だった。

今の二人のランクはどちらもE-。ギルドのルールでは自分のランクより3つ上までが限度だそうだ。

そして華奈恵が指差していた討伐任務は、

「ランクD-か。受けれる上限いっぱいってところか。まあ、手っ取り早くランクを上げるにはもってこいだな」

ギルド内でランクを上げるには、自分のランクより2個上の討伐任務3回か、3個上の討伐任務を1回か、同ランクの討伐任務を10回。

そして、華奈恵たちがとった方法はその中で最も手っ取り早い方法だった。

「これ・・・なんて読むんだよ。そういえば言葉はわかるのに、文字はわからないんだよなあ。なんでなんこれ？」

「わからないわ。まあ、絵を見る限りイノシシのようなものだとは

思うけど・・・」

「まあ、いいか。とりあえずこれを受付に持ってけばいいんだよな」

そう言って蒼慈が依頼書をボードから取ろうと依頼書を掴んだのと、横から伸びてきた手がそれを掴んだのは同時だった。

「・・・離してくれる？今、俺らが取ろうとしたのわかんなかった？」

「・・・そっちこそ離してくれる？ビッグボアすら知らない初心者のくせに。雑魚いんだから、そこらへんの雑用やつときなさいよ」

そう言って女性はその依頼書の横にある雑用任務を指差す。

蒼慈とその依頼書を掴んで来た女性との間に火花が散った。

「・・・雑魚？俺が？あんたこそ、そんな細腕で腰にさしてる剣なんか振れるのか？このアマが・・・」

「これはレイピアよ。剣ではないわ。そんなことも知らないのかしら」

蒼慈と言い合っている女性は、蒼慈より少しが背が低くいが、年齢は蒼慈より少しばかり高そうに見える。

髪型はポニーテールで、色は金髪、結んだ髪は腰までの長さがある。

そして、特徴的なのはその目。幾戦もの戦いを経験してきたような鋭さのある青色の瞳だった。

そして、黙っていればかなりの美人と言える。

「それに、アマ？私を誰だが知っての狼藉か？この糞餓鬼」

女性の声色が変わった。そこ声には殺気が混じってきていた。

「・・・糞餓鬼？ちよつと自分が綺麗だからってあんま調子に乗んなよ、頭ぶつとばすぞ？」

蒼慈の目にも殺気が宿る。

普段の蒼慈はこんなにも挑発的な態度はとらない。

蒼慈には嫌いなものがある。

嫌いなものがあるのは誰でも同じことだろう。

そう、蒼慈にも皆と同じように嫌いなものがある。ただ、それが若干世の中を生きていく上で不便なだけだ。

蒼慈は簡潔に言って、上から目線、というものが嫌いでは仕方なかった。

いつから嫌いなのか、何が原因なのかは本人にもわからないが、とにかく“上から目線”が気に食わないのだ。

「ほう、やれるもんならやってみなさい。変わりにあんたの頭が吹っ飛んでも責任は取らないけど」

今にもレイピアを抜きそうな女性と蒼慈との間に華奈恵が割り込んだ。

「蒼慈。こんなつまらないことで喧嘩するのはやめて。それにあなたも、何処の誰かは知りませんが、少し大人気ないのでは？」

華奈恵の言い分は最もだ。しかし、二人には逆効果だった。

「華奈恵・・・いくらお前でも、邪魔すんなら殺すぞ？」

「私を知らない？ 大人気ない？ ……あなた死にたいの？」

そう言って、華奈恵をどけ二人は睨みあい、そして、

「「表へ出ろ（なさい）！」」

「なんでこうなるのかしら？」

このため息は華奈恵のものだ。

あのまま二人はにらみ合って決闘するだのなんだの言って外に出てきたのだ。

そして、今はこの野次馬の輪の中央に二人はいる。

「あちゃあ。よりもよってフレールに喧嘩売るとは、あの小僧死んだな」

華奈恵の横にやってきてぼやいたのは、華奈恵が初めてギルドに来た時に声を掛けた酔っ払いだった。

「あの方は誰なんですか？」

「姉ちゃん、そんなことも知らないで喧嘩売ってたのか？」

男は心底驚いたとでも言う風に言った。

「ええ。この国へ来てまだ2日目なので。それであの方はどちら様なんです？」

「フレールって言うところじゃ有名な冒険者だ。強いくて綺麗だからな、それでもって誇りが^{プライド}無駄に高い。ついた通り名は『閃光の戦姫』。国からスカウトが来るぐらいだからな」

「国からスカウト？なら、騎士なのですか？」

「いや、病気の姉がいるらしくてな、騎士にはなってない」

「なるほど。どれほどの腕前なんです？」

「かなり強いぜ、なんたって・・・おっと、もう始まるぜ」

いきなり男は口を閉じた。

二人の戦闘準備が整ったみたいだ。

まだ聞きたいことがあったが、華奈恵もこの決闘に興味があったため口を閉じた。

…蒼慈、戦い方ちゃんと分かってないけど大丈夫かしら・・・

6話（後書き）

主人公のキャラは崩れてません。

崩れてませんよ？

この話のときはちょっと暴走気味ですが・・・
それでも崩れてはいませんよ？

7話（前書き）

かなり序盤ですが、主人公暴走モードです。

7話

「今なら、土下座して謝るなら許してやるけど、どうする？」

「それはこっちのセリフよ。本気で頭とばすから、遺言を言うなら今のうちよ」

互いに引く気なんてサラサラなかった。

「武器くらい準備する時間くらい取ってもいいのよ？」

「武器？・・・ああ、なるほど。ならお言葉に甘えさせてもらおうか、その鉄屑もらえる？」

そう言って蒼慈はギルドの壁に積もった剣や鎧やらの残骸の一部をひっぱて来た。

「そんな鉄屑でなにをするの？まさかそれを投げるつもり？」

蒼慈を馬鹿にした態度でフレールは言う。

蒼慈はそれを見殺しして、鉄屑を足元に置き、右手を水平に突き出し、手のひらを開く。

メイキング
「生成・“刀”！」

蒼慈が刀を鉄屑から生成した瞬間、周りの空気が変わった。

「錬金術か！？あれは・・・」

「なんであんな小僧が錬金術なんて使えるんだ!？」

「詠唱もなし、その上陣も使っていないなんて・・・どういことだ!？」

急にざわつき出す野次馬。

蒼慈は詠唱なしで、しかもこの歳で錬金術が使えることの重大さを知らない。

周りの蒼慈への目線が変わってくる。

命知らずの小僧から、畏怖の者を見る目線へと。

「あんだ・・・一体何者? その歳で錬金術なんて聞いたことないわ」

本来、錬金術は賢者のみができることとされた、一種の魔法。

ただそれを行使するに当たっては魔力ではない、何か別の力が必要とされる。

そして、その力は世界から受ける力だと考えられていたため、長年この世界に貢献して来た者のみが、錬金術を使えるとされてきた。

「あんたの言葉を借りるなら、『糞餓鬼』だよ・・・準備はいいか?」

「・・・ええ。いいわ。所詮その程度・・・名乗りなさい!」

フレールは蒼慈にそう言い放ち、殺気を闘気へと変えた。

それに習うように蒼慈も殺気から闘気へとまとうものを変える。

「名乗るならそっちからだろう?」

「私は・・・『閃光の戦姫』、フレール・ニルフェール！」

そう言ってフレールはレイピアを構える。

「二つ名なんて俺にはないけど・・・蒼慈・神城！」

蒼慈は刀を天に向かって突き上げ、腰を低く落とした体勢をとる。
蒼慈には刀のことなんて知らないし、剣道をやっていたこともない。これはマンガの見よう見まねだ。

自頭流、『蜻蛉^{トンボ}構え』。

「それが、あなたの構え？・・・行くわよ？」

フレールはレイピアを“突”の構えにする。

『我は雷。雷よ我を纏え。サンダーエンチャント！』

唱えた瞬間フレールを電撃が纏いはじめ、全身が光りだした。

『サンダーエンチャント』は全身に電撃を纏い、体の電気信号をより強めることで、速さと威力を上げる技だ。

「でた・・・フレールの『サンダーエンチャント』。こりゃ、流石に一撃だ・・・」

野次馬の誰かがそうつぶやいた。

皆固唾を吞んで二人を見守る。

その中、蒼慈は魔法を使わず、ただ構えていた。

「一撃で決める・・・」

「それはこっちのセリフよ・・・」

そして、二人の間を沈黙が占める。

——ヒュッ

…誰よりも早く。閃光のごとく・・・

…誰よりも早く、強く、この一撃に全てを・・・

同時。

——ガキンッ

二人の元いたところの調度中間地点で鉄がぶつかり合う音がした。
共に一撃必殺の技。

二人は交差した。

そして、何秒か経ったのち、

——ブシュッ

フレールの肩から鮮血がほとばしる。

そして、カクンとフレールは膝をついた。

「・・・『閃光』も大したことないな。パワーがたんねえよ」

蒼慈のつぶやきだけがこの空間の中に取り残された。

そして、群集が騒ぎ始める。

「あの『閃光の戦姫』が負けたぞ！」

「あの小僧、一体何者なんだ!？」

その中蒼慈へと向かっていく人影があった。華奈恵だ。

「蒼慈・・・やりすぎよ。これは致命傷よ」

そう言って華奈恵が指差した先には血溜まりに倒れるフレールの姿があった。

「頭をふっ飛ばさなかっただけマシじゃないの？」

はははと笑いながら蒼慈はフレールへと近づいていく。

「これは決闘。これは一試合（殺し合い）だ。死ぬ覚悟はできてる
だろ？敗者には・・・死を」

そう言って蒼慈は刀を振り上げる。

「ま、まっってください!!」

蒼慈とフレールの間に割り込んできた影があった。

その女性はフレールと同じ金髪に青い目。

ただ、肌が無駄に白い。そして、ところどころに黒い斑点が見られる。

「蒼慈・・・彼女はたぶんフレールの姉よ。フレールが死ぬと彼女が困るわ。勝負はもうついたでしょ？」

華奈恵は蒼慈に刀を納めるように促す。

「・・・フレール。立てよ。まだ生きてるだろ？・・・それともお前の姉を守るといふ思いはその程度か？」

「ちよつ。蒼慈！何を言ってるの！？彼女は今にも死にそうなのよ！治療を早くしなきゃ、それどころじゃっ・・・」

「・・・な・ん・だと・・・？」

血溜まりに倒れていたフレールが顔をわずかに上げ、口から血を吐きながらしゃべる。

「立たないなら、お前の姉ごと殺すぞ。・・・弱いのは罪なんだよ。弱いから何も守れないんだよ。恨むなら、自分を恨め・・・」

そう言って蒼慈はもおう一度刀を振り上げ、フレールに止めを刺すように振り下ろした。

8話

世界は、ひどく残酷だ。

しかし、強き者が弱き者を食らう。そんなことは、ごく自然のこと。

人は何故だか自らを強き者と勘違いをしている。

人は自らが弱き者にならない限り、そのことに気づきはしない。しかし、その時になって、理不尽だのなんだの言い出す。人間とは醜いものだ。自分が弱いことに気づかない。

そんな弱い人間が、自らが強いと思い驕る人間が、蒼慈は、

「大嫌いなんだよっ・・・」

——ガキン

蒼慈が振り下ろす刀を受け止めるレイピア。

「姉さ・・・ん・は・・・わた・・・し・が・・・守るっ！」

蒼慈は弱者だった。

過去に彼はそのことに気づかずにごし、その生活が壊れた時初めて自分は弱者なのだと気づいた。

「・・・っ」

だから、今日の前で抗っている女性が彼にはとても輝いてみえた。あの時の自分はただ震えて隠れていたただだったから。

「・・・がはっ」

レイピアが力なく地面に落ちる。
でも、まだ意識はある。

フレールの目はいまだ戦意を失わずに蒼慈を捉えていた。

「ふ、フレール！」

咄嗟に姉と思われる女性がフレールを抱きかかえ、蒼慈の方を睨み付ける。

しかし、もう蒼慈はフレールと戦う気がなかった。

「お前は・・・強いんだな。・・・」

「・・・蒼慈？」

「癒せ。ハイヒール」

途端にフレールを光が包み込む。

5秒ほど経ったのち、その光が収まるとすでにフレールに傷はなかった。

自分の身に起こったことを理解し、信じられないという顔でフレールは蒼慈を見た。

「これで貸しが一つだな」

はははと笑いながら蒼慈は刀を一瞬で分解し、鉄屑に戻し、そのままフレールに背を向けて歩き出す。

「華奈恵。なんか色々めんどくさそうだから、周りの奴らに、今日の出来事を広めない程度に“干渉”しといてくれるか」

「わかったわ。・・・それよりもどういうつもり？殺すかと思えば助けたりなんかして。意味がわからないわ」

蒼慈の横を歩きながら小声で華奈恵は蒼慈にそう尋ねつつ、周りに『今日の出来事は口外するべきような事ではない』と“干渉”した。

「まあ・・・色々と心情に変化が・・・ね」

苦笑いをしながら蒼慈は思う。

：にしても、大人げなかったなあ、俺。勝てると分かっててあそこまでやるとは・・・

フレールとその姉は目を白黒させながら蒼慈達の背中を見送っていた。

「はあ。なんかやる気失せたああああ。それに思ったけど、俺って何でもあるわけ？」

「なんでもありよ。なんでも。・・・ただ、やっぱり“世界”に背くようなことは出来ないわ」

「例えば？」

二人はあの後、野次馬から隠れるように逃げて、喫茶店らしきところに来ていた。

「人を復活させること、とかね」

「まあ、ベタっちゃベタだな。てかさ、俺たちの前に魔王を倒した人たちって、最後はどうなったんだ？」

「私たちの世界へ戻って、その後『俺たちもう戻る気ないから』とか言って、また“異世界”へ行ったらしいわ」

「そりゃ、そうなるわな・・・こっちの方が断然楽だし」

「そう？私は元の世界の方が好きだけど」

「嘘つけー。こっち来てすぐの時に火だしながらキャッキヤ騒いだじゃん」

「・・・うつ・・・あ、あれは・・・」

顔を真っ赤にしながら華奈恵はしどろもどろになりなりだした。

「あれは・・・？」

蒼慈は華奈恵に顔をグッと近づけて更に追求する。

「・・・うう。あ、あの時は！・・・そ、その、アレよアレ・・・」

「ほほう。アレ・・・とは？」

うううと顔を真っ赤にしながら華奈恵は俯いてしまった。

「ん〜？隠すようなことなのか〜？」

——バシッ

景気のいい音が蒼慈の頭から鳴った。

「いてっ。何すんだよっ・・・」

実際は痛くもなんともないのだが、ついそう口から出てしまう。

「『何すんだよ』じゃない！こんなところで女性に迫ってるあなたこそ何してんのよ」

蒼慈の頭を叩いたのはフレールだった。

さっき戦ってた時に着ていた戦闘服は汚れたのもあって着替えてきたのだろう。

今のフレールは普段着のようなものを着ていた。

「・・・なんだよ。闇討ちにでも来たのか？さっきの腹いせに。でもそんなじゃ俺の頭は吹っ飛ばないけど？」

「別にそんなじゃないわ。それに、あなたには今の私じゃ歯が立たないことがわかったから」

「ふ〜ん。で、何か用？」

「ええ。ただ、ここじゃなんだから私の家まで来てくれる？」

「ここじゃ話辛いことなのか？」

「ええ」

蒼慈のどこか茶かしたような雰囲気は、フレールの纏う真剣な雰囲気によってかき消された。

「・・・わかった。行こう。・・・華奈恵、何してるんだ？いくぞ」

「・・・はっ。わ、わかってるわよっ！」

8話（後書き）

ええ、こんなものですよ。

所詮、私の文章力はこの程度ですよOTL

9話

「ここが私の家よ。入って」

フレールに案内されてやってきたフレールの家は木造の小さな家だった。

建っている場所もあまりイイとは思えない。

中に入ってみると、それなりに綺麗はされているものの、やはり外装と変わりはなかった。

「ギルドで稼いだ金は・・・姉さんのために？」

「ええ。向こうが姉さんの部屋」

家には大きなリビングらしきところと部屋が一個しか見受けられない。

「あんたはここで寝てるのか？」

そう言って蒼慈はリビングにある簡易ベットらしきものを指差す。

「そうよ。今日は姉さんのことで話があるから、あっちの部屋に行きましょう」

フレールの姉の部屋は外装からは想像もできないほど綺麗にしてあった。

明らかに寝心地がよさそうなベッドに床も壁も綺麗されている。ただ、それに不似合いなくらいやつれた女性がベッドに寝かされていた。

「紹介するわ。私の姉のセリーヌよ。今日、外へでて体調が悪くなつたから今は寝てるけど」

「・・・何？俺のせいだって非難するために連れてきたわけ？」

「違う」

即座に否定するフレール。

蒼慈も違うなんてことはわかっていた。

しかし、こうも当てつけのように見せられては皮肉の一つも言いたくなる。

「で、用ってのはなんなんだ？」

そこで、フレールは一呼吸おいて、地面に方膝をつき、地面に這い蹲るような体勢をとり、言った。

「姉を助けてください！お願いします！」

フレールは勢いよく頭を下げた。

ガツンと額が床に当たる音がする。

「お願いします！助けてくれるなら、なんでもします！お願いします！す！」

「・・・」

呆氣にとられる蒼慈と華奈恵。

「・・・ちよつと待ってくれ。状況がよくわかんないんだけど、てか頭あげてくれ」

フレールは額を少しだけ浮かし、体勢は土下座のままで言った。

「この町には治療師ヒーラーが極端に少ない。そして、姉の病気は不治の病と言われている。普通のヒーラーでは治せないんだ」

「俺が見た時のあんたのお姉さん是不治の病には見えなかったんだけど？てか頭上げてくれ」

「姉の病気は、黒斑病と言って滅多にかかるものではない。うつることもない。そのため治療法もない。病状は、普段は大したことはなく普通に歩くことも可能だ。

だけど、しばらくすると全身が痛み出して、話すことするままならないんだ。体中にできている黒い斑点が全身を段々と侵食していき、最後には死にいたる。

姉は、もう・・・もう何年もこの状態なんだ！もう！後何日ともたないだ！お願いだ・・・助けてくれ・・・自分から決闘を挑み、負け、その上こんな頼み・・・でも、でもっ！他に頼る術がないんだ！」

フレールは床に額をこすり付けながら、何度もお願いしますと言いつづけた。

「・・・顔を上げろ。頼むから上げてくれ」

それでも顔を上げないフレールを蒼慈は目線をやって華奈恵に無理やり立たせた。

華奈恵に立たされて、蒼慈と目があつたフレールの顔はあの時の

ような覇気はなく、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「お願いします・・・お願いします・・・」

この目を知っている、と蒼慈は思った。

昔の自分もこんな目をしていたのだろうと。

あの時の自分の願いは届かなかった。

なのに何故、この女性の時だけその願いを聞き届けられるんだ？
自分は助からなかった。自分の家族は助からなかった。

「姉が死ぬのも、そのせいで自分の居場所がなくなるのも、全部・
・全部、自分のせいなんだよ」

「・・・っ」

蒼慈の言葉にフレールの顔が引きつる。

「・・・お願いします。なんでもします。・・・お願いします・・・」

「蒼慈・・・私ではこれは治せないわ。つまりあなたしか治せない
のよ。助けてあげて・・・」

華奈恵は言う。

「・・・どんなに願おうと、神は助けてはくれない。誰も助けては
くれない。自分を救えるのは自分だけ・・・」

まるで自分に言い聞かせるかのように蒼慈は呟く。

そう、頼れるのは自分だけ。いざという時に助けてくれる人なんていない。

蒼慈はフレールの姉が寝ているベッドに近づき、寝ている女性を眺める。

「この病気は・・・回復魔法なんかじゃ治らない」

「・・・っ！そんなっ！」

崩れるようにフレールは床に落ちる。

今の蒼慈にはわかる。これは病気じゃない。まるで、

「この“世界”がこの人を拒絶している・・・」

「・・・世界・・・が？」

蒼慈はセリーヌから目線はずし、フレールに近づいていく。

「方法がなくてはならない」

はっとフレールが顔を上げ、蒼慈を見上げる。

「ただ、これをして大丈夫なのかはわからない。こちらの人間にや
って大丈夫なのか分からない。成功するか保証はできない」

それでもいいか？と蒼慈は目線でフレールに尋ねる。

「助けて・・・くれるの？」

「やってみる。ただ、今からやることは誰にも言わないで欲しい」

フレールは首が千切れるくらい勢いよく何度も首を縦に振った。

「蒼慈……どうということ？」

華奈恵が不思議そうな声で蒼慈に尋ねる。

「これは、病気じゃない。この“世界”から拒絶されてる。だから、俺の力で……」

「あっちの“世界”の庇護でなんだろう、ということ？」

「ああ。それしか思い浮かばない」

「お姉さんを起こしてもらってもいいか？」

：助かるかどうかわかんないな。助からなければ……俺には関係ないことだ。人が一人、消えるだけだ。

蒼慈は心のなかで自分にそう言い聞かせながら、フレールが起こしにかかっているセリーヌへと近づいていった。

10話

蒼慈と戦いフレールは負けた。

あの時は強がって見せたけど、内心は怖くてたまらなかった。

「本当に私のことを殺そうとしてた・・・あれはそういう目だった」

なのに突然彼は私に回復魔法をかけてどこかへ行った。

「私は致命傷だったわ・・・あの傷を一瞬で治すなんて、並みの治療師でも出来ることじゃない・・・」

そう、確かに彼女は致命傷だった。

肩からバツサリと切られ、血も出すぎていた。

あの状態で普通のヒールをかけられてたところでは、血すら止まらないはずだ。

なのに彼の魔法は彼女を一瞬で治してみせた。

「あの人なら・・・もしかしたら・・・」

彼女は今、家に戻ってきていた。

病気の姉をかかえて。

「・・・姉さん・・・」

あの後すぐに彼女の姉は倒れ、全身に痛みを訴え始めた。

彼女の病気は黒斑病と言い不治の病だ。

フレールはギルドでは2位という、かなりの力がある。

ランクにしてAー。

あのギルドでの依頼なら彼女には出来ない依頼はほとんどない。

「強くなった・・・こんな、物を壊す力じゃ・・・」

彼女の魔法は雷属性。

使う武器はレイピアで、その組み合わせで彼女は絶大な威力と速さで幾戦もの戦いを戦い抜いてきた。

「でも・・・これじゃ姉さんは治せない・・・」

いくらギルドで金を稼いでも意味がなかった。

「どうして・・・どうして・・・」

何故不治の病なのか。

どの薬師、医者、名高い治療師に見せても治せなかった。

かといって遠くの都心へ行くこうにも、途中で姉が苦しみだすのがわかっていた。

今の姉は起きてから1時間ほどこしか行動ができない。

そんな姉を連れて旅などできなかった。

「姉さんは・・・私が守るんだ・・・」

彼女らに親はいない。

昔に二人を残してどこかへ行ってしまった。

捨てられたのだ。

今の彼女には姉しかいない。

「失いたくない・・・絶対に、何があっても・・・」

気づけば居なくなっていた両親。

あの時は本当に絶望した。

自分達を捨ててあの人たちは何処へ行ったのか。

そんな自分を支えてくれたのは姉だけ。

でも自分は姉を救うことができない。

「この命にかえてでも守ってみせる」

ふとフレールの頭に思い浮かぶ言葉。

『お前の姉を守るといふ思いはその程度か？』

この程度じゃない。この程度でいいはずがない。

『立たないなら、お前の姉ごと殺すぞ。・・・弱いのは罪なんだよ。弱いから何も守れないんだよ。恨むなら、自分を恨め・・・』

彼はそう言った。

弱いのは罪だと。

まるで彼が、彼自身に言ったようにも聞こえた。

だから、何故か彼ならと思った。

フレールの方から喧嘩を売ったも同然だった。

あの時、フレールにはビッグボアの牙が必要だったのだ。

もしかしたら姉に聞くかもしれないと、いつも診てもらっている

医者が言ったのだ。

だから、あの依頼書も一緒に受ければ一石二鳥だと思った、その矢先。

「文字すら読めない、ビッグボアすら知らない。それなのに、のほほんとして・・・」

そう、嫉妬したのだ。

自分がこんな苦しいのに、何故彼らはあんなにヘラヘラしているのか、気に食わなかったのだ。

だから、つい喧嘩腰になった。

元々フレールはプライドが高かった。

それだけの力もあったし、それだけの功績を残してきた自信もあった。

ここらへんでは誰もが彼女のことを知っている。

「なのに・・・『アマ』ですって・・・」

彼女のプライドはひどく傷つけられた。

だから、懲らしめてやろうと思った。

「そしたら、逆に返り討ちにあうなんて・・・」

彼女は対人戦では負けたことがなかった。

なのに、あれはあっけなかった。

本当に一撃。

彼が剣を振ったのが見えなかった。

「・・・ほんと、情けないな・・・ははは」

乾いた声が家に響く。

くだらないプライドも無くなった。

ただ、今は救いを求めることしか彼女の頭にはなかった。

それからフレールは蒼慈達を探し始めた。

この町はそれなりに広い。

だけど、あれほどの騒ぎを起こしたのだからすぐに見つけられる
と思った。

なのに、あの決闘のことを知っている人がほとんどいないことに
フレールは驚きを隠せなかった。

町中を走り回り彼を探した。

彼女にとっては町中を走り回ることは大した苦勞ではない。

体に電撃を纏ってしまえば一瞬だ。

それでも彼女はあの時、内心焦っていた。

…見つからない。何処。何処！何処に行ったの！

もしかしたら町を出たのかもしれない。

一瞬でどっかへ行ってしまったのかもしれない。

そう思うと涙が出そうだった。

そして、彼を見つけた時は心の底から安堵した。

同時に涙も出そうだったけど、なんとか踏みとどまり彼を姉の元
へ案内した。

彼に頭を下げたときは、もう何も考えられなかった。

ただ、涙が溢れた。どうしようもなく、助けて欲しくて。

10話（後書き）

だんだんと更新速度が落ちてきていてすいません。
一日に一話を今は目標にします（汗）

11話（前書き）

ベタです。

ベタベタな展開です。

11話

人を助ける。

…ただ泣いてたあの時とは大違いだな、ははは

心の中で自嘲気味に笑いながら蒼慈は起きて辛そうにしているセリーヌの前に立つ。

セリーヌは蒼慈の姿を見ると途端にまゆをよせた。

「別にあなたを殺しに来たわけじゃない。むしろ、助けに来た」

蒼慈がそう言うのとセリーヌは目を見開いて驚いた。

「これで助かるか、失敗したらどうなるか・・・正直、俺にもわからない。でも、今はこれ以外の方法が思い浮かばない。だから・・・」

「

蒼慈は最後まで言わなかった。

目線でセリーヌに問いかける。

それでもいいのか、と。

セリーヌは状況がうまく掴めていない様子だったが、数秒考えた後、黙って頷いた。

「じゃあ・・・」

あの時は全くわからなかったが、今は頭に言葉が浮かぶ。

…“契約”か・・・やっぱり俺は能力者だったんだな。

蒼慈はセリーヌの顔に自分の顔をぐっと近づけ、唇を重ねる。
重なった瞬間、セリーヌの肩がビクツとなるのを蒼慈は感じた。
蒼慈が唇を離す。

「復唱してくれ」

フレールも蒼慈の行動に驚きを隠せないでいたが、その行動を黙って見守っていた。

「『我、汝との間に契約を結ぶ』」

「・・・『我、汝との間に契約を結ぶ』」

セリーヌが擦れた声で復唱し始める。

「名前を自分ので置き換えて。『我が名は“蒼慈”。ここに契約を結ぶ者の名なり』」

「『我が名は“セリーヌ”。ここに契約を結ぶ者の名なり』」

「『盟約の血に従い、ここに契約を』」

「『盟約の血に従い、ここに契約を』」

「『契約』」

「『契約』」

途端、二人を眩い光が包み込む。

しばらくし、その光が消える。

「・・・ど、どうなったの・・・？」

フレールは期待半分、不安半分の声で蒼慈に尋ねる。

「・・・」

蒼慈は黙ってセリーヌの様子を見ていた。

セリーヌはだんだんと自分の体に変化が起き始めたことに気づいた。

「・・・黒い斑点が・・・」

セリーヌの体を覆いかけていた黒い斑点がだんだんと消えていく。

「・・・まあ、成功か」

蒼慈は呟いた。

セリーヌとフレールは今起きたことが理解できず、互いに目を白黒させていたが、

「・・・姉さん・・・姉さん!!」

「ふ、フレール！斑点が消えていくわ！」

互いに抱きしめ合う二人。

それを視界の端に収めながら蒼慈は部屋を後にしようと扉へと向かった。

黙って出て行く蒼慈を追いかける華奈恵。

「ま、待って！待ってください！」

蒼慈達を呼び止めるフレールの声。

「お、お礼をつ！なんでもする・・・って言ったから」

「別にお礼なんていらないよ。成功するかどうかもわからない、いわば俺も実験させてもらったんだし」

「で、でもっ！・・・」

「じゃあ、例のビッグボアだっけ？あれは俺達がやらせてもらう、つてのでどう？」

フレールがビッグボアを倒そうとしたのは、あくまで姉の病気が治るかもしれない薬の材料を得るため。

そして、もうその病氣も治ったため、もうビッグボアを倒す必要もない。

「そ、そんなんじゃない！お礼になってない！」

「ちゃんとお礼をさせてください！」

フレールの後に言ったのは姉のセリーヌだ。

「お礼って言われてもな・・・」

困ったような顔で蒼慈は華奈恵を見た。

「このままじゃ埒が明かないわ。何でもいいから向こうの気の済むようにさせたら？」

「・・・まあ、それがベストなんだろうけど」

：自分の強さが分かった以上、金を稼ぐのも容易いし、特に今は何かが必要ってわけでもないし、あえていうなら“魔王”の情報くらいか。

「じゃあ、聞きたいことがあるんだけど」

「な、なんでもどうぞっ！」

若干、声がひっくり返りながらフレールが答える。

「“魔王”って知ってる？」

「魔王・・・？」

「ああ。知ってるの？」

「ちょっとだけなら・・・でも、それがどういう？」

「俺達旅をしてるんだけど、その目的が“魔王”でね。その情報が欲しいんだよ」

少し記憶を探るようなそぶりを見せながらフレールは話し始めた。

「魔王は、王国ヴァルテールの北にある、ブラッドフォレスト血の森にいたと言われています」

「『いたと言われて』る？　どういうことだ？」

「どうということ、と言われても・・・」

蒼慈と華奈恵は互いに顔を見合わせる。

「今“魔王”が何処にいるか分からないかしら？」

華奈恵がフレールへと問いかける。

「『今』ですか？」

何を言っているんだ？　とでもいうような顔でフレールは華奈恵の質問を聞き返した。

「え、ええ。今よ」

「流石にもういないと思うけど・・・」

「いない！？　どういうことだ？」

「え？　え？　だって・・・ね、姉さん」

フレールは困ったように姉のセリーヌの顔を見る。
セリーヌもフレールと同じように不思議そうな顔をしていた。

「えっと・・・」

フレールの視線に応えるようにセリーヌが言う。

「魔王はあくまで伝説ですし、それこそ夢物語で・・・」

「・・・伝説？」

「え、ええ。魔王がいたのは今から5000年前とされていて、それを伝説の勇者が倒したといわれています」

「・・・つまり、今現在この世界に“魔王”は・・・？」

「えっと・・・いません」

12話(前書き)

連続で・・・更新です。

12話

「・・・おい、華奈恵」

「何かしら？」

「俺達・・・帰れんの？」

「・・・」

「・・・おい」

蒼慈は目の前が真っ暗になったような気がした。

蒼慈はあの後すぐ華奈恵を連れてフレールの家を出た。

フレールが引き止めてきたがそれを聞くつもりもなく蒼慈達はそのまま宿屋へと戻った。

そして、そのまま会話もせずに二人は自分の部屋へと戻っていった。

「華奈恵。どうすんだよこれから」

翌朝、二人はギルドに来ていた。

「別にいいじゃない。蒼慈、そんなに帰りたいうには見えなかったんだけど」

疲れていたわけではないが、なんとなく昨日はそのことについて追求する元気もなく寝てしまったため、次の日になって蒼慈は華奈恵に昨日のことを問い詰めていた。

「そういう問題じゃねーよ。最終的に帰れるとわかってたからだよ。華奈恵は帰りたくないのか？」

「・・・あんまり」

「元の世界の方が良いとか言ってたのは何処の誰だよ・・・」

「・・・そ、そんなことより！今晚の宿代のために何か依頼をこなしましょう！」

話題を急に変えて華奈恵はボードのほうへと歩いていく。

「ドラゴンの鱗売った金あるから別に大丈夫だろ、てか元の世界が減びるんじゃないのかよ・・・」

「・・・あ」

「・・・何その反応」

「まあ・・・元の世界の住人はご愁傷様ってことで」

「待て待て。そんな簡単に世界をまるごと見捨てるってどうよ？」

「嘘だって。なんか考えとくわよ。それよりなんか討伐任務しましよ」

華奈恵はボードに貼ってある依頼書を見定めていく。

「ビッグボアでいいだろ・・・」

「あんなんじゃないわ」

「ストレス解消のためかよ・・・」

ため息を蒼慈がついていた時、不意にギルドの入り口からこの場に似合わない女の子の声が出た。

「お願いします。助けてください！」

蒼慈が目を向けた先には、10歳に達するかどうかくらいの少女が机で話している冒険者たちに何かをお願いしている姿だった。

「お父さんを助けてください！」

必死に冒険者一人一人に頭を下げていく女の子。

「お嬢ちゃん、御免よ。流石に報酬がそれだけなのに、そんな無茶な依頼は受けられないんだわ」

「で、でも・・・」

「それにな、岩龍はなモンスターとしてはBランクなんだよ。Aランク以上の冒険者が何人も集まらなきゃ倒せないんだよ、今、このギルドにAランク以上の冒険者は2人ほどしかないんだ」

「お、お願いします・・・お父さんが・・・」

「悪いな、俺にはそんな危険を冒す余裕はねえんだわ。他をあたってくれ」

男は少女の頼みを断り、再び冒険者の輪の中へと戻っていく。
ギルド内のすべての冒険者に依頼を断られた少女は泣きそうになりながらも涙を堪え俯いてその場に棒立ちになる。

「・・・蒼慈。聞ってるの？」

「え？ ああ、なんだ？」

「この依頼はどうかって・・・何？ あんな少女が趣味なの？」

華奈恵はいまだあの場から動かない少女を指さして言う。

「・・・」

「聞ってるの？」

またもや蒼慈に無視された華奈恵は若干怒りを含みながら言う。
しかし、蒼慈はそれには反応せず、少女の方へと歩いていった。

「ちよっ・・・まさか本当にロリコン・・・？」

蒼慈は少女の元へと歩いていき、少女の目の前で止まった。俯いていた少女は蒼慈の気配に気づき顔を上げる。

「どうしたんだい？何か困ったことでも？」

「あ、あの・・・」

「やめときな兄ちゃん。いくら『閃光の戦姫』を倒したからって、岩龍は無理ってもんだ」

少女が蒼慈に何か言う前にさっきまで話していた男が口をはさむ。少女はそれを聞いて再び俯いた。

「ねえ、君、名前はなんていうの？」

しかし蒼慈はその男の言葉を見せず、少女の視線の高さに合わせるようにしゃがんで言った。

「・・・メル・・・です」

今度は不思議そうな顔をして少女は蒼慈を見る。

「そっか。メルちゃんか。どうしたの？お兄さんに出来ることなら助けるよ」

ニコリと笑みを浮かべ蒼慈はメルに言った。

「おいおい・・・兄ちゃん・・・」

男は飽きれて蒼慈にはもう何も言わなかった。

「あのね・・・お父さんがね・・・山に行ったきり戻ってこなくて、それで・・・」

少女は涙を我慢するように唇をかみ締め俯く。

蒼慈はそれを咎めることもせず、ただじっとメルが喋り出すのを待つ。

「・・・ろつくどらごんっていうのがあそこにはいるから、きっと食べられちゃったんだろう、って・・・」

「誰がそんなことを言ったんだい？」

「周りのみんな・・・となりのおばちゃんも、そう言ってた」

「なるほど。それで、お父さんを助けるためにギルドへ依頼しに来たんだね？」

蒼慈が尋ねるとメルは違う、という風に首を横に振った。

「お金がないから・・・お願いしにきたの」

：なるほど。さっきの冒険者が言うには、岩龍てのは相当強いわけか。

「じゃあ、そのお願いをお兄さんが聞いてあげるよ」

再び少女に笑顔を向ける蒼慈。

「ほんとに?・・・お父さんを助けてくれるの?」

「ああ。もちろん」

「でも・・・わたし、お金ない・・・」

「気にしないで。俺は、お金で動く人間じゃないから」

そう言ってまたメルに笑顔を向ける蒼慈。

そんな蒼慈の言った言葉の意味がわからないのかメルは不思議そうな顔をした。

「・・・？お金なくてもいいの？」

「うん。大丈夫だよ」

蒼慈は笑顔をのままメルの頭を撫でる。

途端にメルの顔が崩れていき、蒼慈に抱きついた。

「ふ、ふえええええん」

蒼慈に抱きしめながらメルは泣き続けた。

まだ、父親が助かったわけでもない。

でも助かるかもしれない、というだけで緊張の糸が切れたのだ。

12話（後書き）

ストックが切れ・・・ガクツOTZ

13話

「まさか、蒼慈があんなに優しかったとはねえ・・・」

「昨日がたまたまだったんだってば、普段はこんなもんさ」

「もしかして、蒼慈って本当にロリコン!？」

「ちげーよ。むしろ年上好きだ」

「ほほー?じゃあ私なんてどうなのかしら?」

からかうように華奈恵は蒼慈の前でポーズを取ってみせる。

「ああ。かなり好みだ」

華奈恵の挑発に真顔で答える蒼慈。

「え?え?ええ!?!な、何!?!告白!?!」

顔を真っ赤にして、悶える華奈恵。

「別に告白なんてしてないってば。ただ好みであるってだけだし」

「いや!それも告白じゃない!」

「・・・言っとくけど、見た目の話だからな?」

「見た目が一番重要なんじゃない!」

二人はあの後、メルという少女の父親が行方不明になったという山へと着ていた。

山はあまり木が生えてなく、岩が目立つような所だった。

「俺は中身が一番大事だと思うけど・・・」

「照れ隠しのつもり!?・・・なるほど、蒼慈は私に惚れているのね!」

かなり勘違いをしている華奈恵を放置して蒼慈はズンズンと山の上へと上っていく。

二人の力があれば山の頂上まで飛ぶことも可能だが、岩龍がどこに潜んでいるか、わからないため、しらみつぶしに下から地道に登っているのだ。

地道と言っても二人の山を登るスピードは尋常ではない。

この程度では疲れることがない二人はかなりの速度で頂上へと向かっていった。

「ふふふ。照れちゃって、もう!なんだかんだいってまだまだ子供ね!」

「・・・」

…ああもう誤解解くのすら面倒だあ

「・・・ん?おい、華奈恵」

「何?何?ついに認めるの!?ちょ、ちょっと待ってね今心の準備す・・・」

「あの岩、おかしくないか？」

華奈恵の言葉を思いっきり遮る蒼慈。

「は？岩？今はそれどころじゃないでしょ？」

「いや、それどころだよ。あれ岩龍じゃね？」

そう言っただけ蒼慈が指を差すのはなんの変哲もない岩。しかし、よく見るとわずかながら魔力が洩れている。

「どう見たって岩じゃない。そんなことよりも今は・・・」

蒼慈は足元に落ちていた石を拾い、それに少々魔力を籠め、その岩に投げつける。

——ガツン

岩の一角が吹っ飛ぶ。

「何してるの？いい加減にしないといくら私でも怒る・・・」

——ガアアアツア！！

途端、周辺の岩が持ち上がり、あっと今に龍の姿へと変わる。

「ビンゴ」

呟く蒼慈。

岩龍は自分の鱗の一部をいきなり吹っ飛ばされたことに怒りを感じ、蒼慈へと敵意を向ける。

「華奈恵。ストレス発散するには良い相手だぞ」

蒼慈は自分に向けられた龍のものすごい威圧受け流し、華奈恵に喋りかけた。

「・・・」

「華奈恵？」

「なんでよ。今から告白タイムじゃないの？私だってまだまだ乙女なのよ？なんでこうなるの？」

華奈恵は蒼慈に聞こえないような小さな声でボソボソと文句を言う。

華奈恵は元の世界でモテなかったわけではない。

むしろかなりの人気があった。

しかし、彼女は“干渉”の能力の血筋であるがゆえに誰かと付き合うことは許されなかった。

もし、その彼氏が原因で“異世界”へ行くことを拒む、なんてことが万が一にもあつては困るからだ。

「だから、こっちに来たら、あとはもうやりたい放題だったのに・・・」

「どうしたんだ、華奈恵？」

「・・・なんでもないわ！！やってやろうじゃないの！」

「華奈恵？いきなりやる気出してどうし・・・」

「蒼慈！ちよつとどいててくれるかしら！？・・・それと後で話があるから！」

「え？ああ。わかった・・・けど」

若干不安な蒼慈であった。

「いくわよ岩龍！絶対に許さないわ！」

華奈恵が駆けていく。

岩龍へと向かい、岩龍の手前で飛び上がる。

——ガアアアア——！！

自らよりも高く上がった華奈恵に岩龍は岩を吐き出す。

「遅いわ！・・・出でよ、“風銃”！」

華奈恵は風を使って空中で移動し、その岩を避ける。

そして、華奈恵の手の内が光り、そこから風属性で形成された銃が現れる。

見た目はデザートイーグルのような女性には大きめのハンドガン。ただし、色は白く、薄っすらと風を纏っているのがわかる。

華奈恵はその銃を岩龍へと向ける。

——ガアアアア——！！

岩龍は再び吼え、華奈恵を追うように空へと飛ぼうとし翼を広げる。

「させないわ！・・・くらいなさい！！」

華奈恵がトリガーを引く。

銃口から空気の固まりが圧縮され岩龍へと向かい、当たった瞬間弾ける。

——グガァァァ！

苦しげな声を岩龍があげる。

続けて華奈恵はトリガーを引き続ける。

「あの場を邪魔した罪は、その命をもって償いさなさい！」

銃口から空気の圧縮されたものが飛び出し、岩龍へ当たる。

当たり、弾け、血しぶきが舞う。

岩の鱗が削れ、血肉までも吹き飛ばしていく。

「ああああああ！」

これでもかというくらいに華奈恵はトリガーを引き続ける。

しばらくたち風を使いながら、ゆっくりと地上へと華奈恵が降りてくる

岩龍は完全に死んでいた。

翼はもげ、岩の鱗は粉々になり、体の部分部分が吹っ飛んだ状態だった。

ストンと華奈恵が蒼慈の真横に降り立つ。

「ふう。すつきりしたわ。やっぱりストレスを溜めちゃ駄目みたいね」

華奈恵はかなりすつきりした様子でそう言った。

蒼慈は思う。

…これはさすがに・・・

「やりすぎじゃね？」

「そう？それよりもどっかのロリコンが好きな少女の父親を探しに行きましょう」

スタスタと華奈恵は蒼慈の前を通り過ぎ、岩龍の体が宝石のような物を取り出した。

「これ。一応高価な物だから、取っときなさい」

華奈恵はそう言って蒼慈にそれを投げてよこすと、メルの父親を探しに岩龍がいた奥を探し始めた。

13話（後書き）

だんだんと雑になってきたかも・・・
^^^;

14話

「メル!!」

「お父さん!!」

蒼慈達の目の前でメルと父親が抱きしめ合っていた。

「メル・・・心配かけてゴメンよ」

そう言って父親はメルを強く抱き寄せる。

二人は岩龍を見つけた時点で、父親は死んだとばかり思っていた。しかし、二人の予想に反して、父親は生きていた。

「いやあ、本当にありがとうございます。まさか岩龍が来るとは思わなくて焦って逃げたら、まさか町とは逆方向に逃げるとは、我ながら情けない」

彼は岩龍が飛んでくるのを見つけ、見つかる前に必死で逃げ出していた。

しかし、運悪く町とは逆方面に逃げてしまい、かといって町の方へ行こうにも岩龍がいたため立ち往生していたという。

「貴方達が着てくれて本当に助かりました。あそこはあの道しかなかったもので、あのまま餓死するかと思いましたよ」

彼は蒼慈達に何度も頭を下げた。

蒼慈達にとっては、あそこに道なんてあったかどうかすら分からなかったが、彼が町へ帰るには岩龍のいるところを通るしかなかった

たらしい。

「なんてお礼をしたらいいか・・・」

彼は蒼慈達に再び頭を下げる。

「あいつら、本当に岩龍を倒しやがったのか？立った二人でか？」

「ああ。そうみたいだな。さっき岩龍からしか取れない、岩龍石をギルドで換金してたからな」

「ほ、本当かよ・・・一体何者だよ、あいつら・・・」

蒼慈達の後ろの方で冒険者達が数名で話していた。

「別にお礼なんていいですよ」

はははと笑いながら蒼慈は言う。

「どうせなら彼女に言うてください。岩龍を倒したのは彼女ですし」

蒼慈は華奈恵を指差す。

「そ、そうなんですか？すいません、勘違いをしまして、何か私達にできることがあれば、何でも言うってください」

「え？・・・あ、その」

いきなり話を振られ慌てふためく華奈恵。
蒼慈はそれを見ながらニヤニヤしていた。

そんな蒼慈を横目で睨みながら、

「お礼なんて、かまいませんよ。これは私達が善意でやったことですし……」

「し、しかし……」

互いに遠慮し合っている二人を見ながら蒼慈はふと視線を感じて振り返る。

「今度は岩龍か……あんた、やっぱり凄いな」

フレールだった。

隣には姉のセリヌ。

「町にいないと思ったら、また人助けなんかしてたの？」

「まあ……な」

「にしても、その父親の足にへばり付いている女の子、メルちゃんだっけ？あの子にはずいぶん優しくかったみたいだね」

どうやらギルドで彼女の依頼を受けたことが広まっていたらしい。

「誰かさんと違って、いきなり喧嘩なんて売ってこないしな」

その言葉に苦虫を噛み潰したような顔をするフレール。

「あ、あれは……その、ごめんなさい」

挑発気味に話しかけてきたフレールが今はシュンと小さくなっていた。

「嘘嘘。別に気にしてない。あの時はこっちも悪かったよ、ごめん」
苦笑いしながら蒼慈はフレールとセリーヌに謝罪する。

「い、いえ！別にあなたは悪くないので謝る必要は・・・その上私のことまで治してもらっちゃって・・・」

こちらもまた、申し訳なさそうに言うセリーヌ。

「あ、あのさ・・・その、ちゃんとお礼・・・したいんだけど」

小さな声でフレールが蒼慈へと言う。

あの程度の情報ではお礼にはなっていないと彼女達は思っていた。

「だから別にいいって・・・」

「蒼慈いいいい」

気がつけば例の親子はすでに帰っており、華奈恵が怒りの形相で蒼慈を睨んでいた。

「私が困っていた時にあんたは女の子とイチャイチャしてさ・・・」

「あゝはいはい。悪かったよ。で、どうなったんだ？」

「あそこ鍛冶屋さんらしくて、なんか困った時に助けてもらうってことで話は終わったわ。それとメルちゃんがありがとうだって」

「ふ〜ん。直接言えばいいのに・・・」

「あんたが女の人と話しているのを見て、邪魔するのも悪いとか言
って帰ったのよ！」

「あ、そうなんだ。別にたいしたことでもないのに・・・」

「あ、あの・・・」

二人の会話にフレールが割り込んできた。

「え、えっと・・・その、喧嘩はよくないです・・・よ？」

「お前が言うか？」

笑いながら蒼慈はフレールに言う。

「う、うぐ・・・それを言わないで・・・」

さらに小さくなるフレールだった。

「え、えっと、カナエさん・・・ですよね？ 貴方にもお礼を・・・」

セリーヌがフレールの言葉を継ぐ。

「私は別にいいわよ。治したのは蒼慈だし」

「で、でも・・・」

「それに、お礼はあの時もらったじゃない」

「あ、あれは誰でも知ってるお伽話であって、そんな大層なものじゃ・・・」

「いいのよ、もう。別にいらなんて言ってるんだから。それより、あなたセリーヌだけ？ 体の方はもういいの？」

「あ、そうなんですよ！ 調子が良いっていうか、良すぎるっていう感じで」

セリーヌはあの後しばらくして、自分の魔力の量がとんでもない量になっていく事に気がついた。

その上、体も軽くなり、治療してもらってから何かと力が増していた。

「“契約”のせいね」

「契約？」

「そう。蒼慈と“契約”すると、かなり力が增えるわ。それも並の強さじゃなく、まさに英雄ってレベルにまで・・・ね」

たしかにセリーヌの力は増えすぎていた。

しかし、まさか英雄レベルにまでとは彼女も考えていなかった。

「ど、どういうこと！？ 姉さんが強くなったのはわかったけど、それがあの・・・その、えっと、アレのせいだったの？」

若干顔を途中から赤らめながらフレールが華奈恵に尋ねる。

「まあ・・・“契約”したんだし、いいか。ちよつと話があるから家まで行ってもいい？」

華奈恵は蒼慈に目線で許可を取ると二人に言った。

「え？ええ、もちろん構いませんが・・・」

「“契約”のことはその時に話すわ。ここじゃ人が多すぎる」

そうじて四人はフレール達の家へと向かった。

登場人物（前書き）

あとで設定変わったらすいませんへへ；

まだまだキャラは少ないですが・・・

登場人物

かみしろそうじ
神城蒼慈

主人公

16歳 身長…163 体重…50

黒髪 黒目

能力 “契約”

契約した者の力を跳ね上げる

得意魔法は氷系 仕様武器は刀

もりさきかなえ
咲森華奈恵＜契約済み＞

21歳 身長…170 体重…46

黒髪 黒目

能力 “干涉”

他人の認識などをかえることができる

得意魔法は風 仕様武器は銃

意外とウブで照れ屋(?)

エリル

ヒロインでも何でもない脇役

フレール・ニルフェール

18歳 身長…162 体重…45 ランク…A-

金髪 青目

二つ名『閃光の戦姫』 得意魔法は雷系

仕様武器はレイピア

近接戦闘が得意で姉思い

セリーヌ・ニルフェール＜契約済み＞

19歳 身長…163 体重…42

金髪 青目

フレールの実姉

不治の病である黒斑病にかかり、何年も寝たきりだったが、蒼慈に助けられる

元気だった頃はフレールと共に冒険者をしていた

得意魔法は水系 仕様武器はロッド

15話

蒼慈、華奈恵、フレール、セリーヌの四人はフレール達の家へと“契約”について話すために集まっていた。

「私達は“異世界”から来たの」

華奈恵の家に着いてからの第一声にフレール達は驚き声も出せないでいた。

「それで、私達には特別な力があるの。蒼慈の場合はそれが“契約”だったってわけ」

フレールの家のリビングらしき部屋の中央に置かれた机を囲むように、四人は座っていた。

蒼慈と華奈恵が隣に座り、その真正面にくる形でフレール、セリーヌと座っている。

「その“契約”を蒼慈とすると、まあ、一種の主従関係のようなものが結ばれるわ」

主従関係。

華奈恵はそう今言ったが、

：俺と華奈恵は立場が対等というか、むしろ俺がないがしろにされてる気が・・・

「つまり、あなたのお姉さんは、蒼慈の物になったのよ」

堂々とセリーヌのことを物と言う華奈恵。
そして、華奈恵はフレール達の反応を見るために、一度口を閉じた。

「も、物・・・ですか？」

おずおずとセリーヌが華奈恵に尋ねる。

「ええ。物よ。所有物」

物ということはいわば奴隷と言ってるようなもの。

しかし、それはあながち間違いでもない。

蒼慈と契約することは、蒼慈から、つまり蒼慈達の世界からの庇護を受けさせてもらうということ。

そして、契約主である蒼慈に対し、契約者の人は逆らうことが許されない。

「蒼慈と“契約”で繋がっている限り、あなたの命は蒼慈の気分次第でどうにでもなるのよ」

「・・・それは・・・」

「つまりは、奴隷よ」

「なるほど。じゃあ、この力はなんなのですか？」

奴隷という言葉に対してショックも受けずにセリーヌは尋ねる。

「あまりショックは受けないのね」

「ええ。まあ、そんなことだろうとは思ってました」

「・・・そう。それでその力だけど、それは蒼慈の力の一部が渡されたと思って」

「力の一部？これが、一部なんですか？」

「ええ。蒼慈にとっては本当にどうでもいいくらい少ない力よ」

そう言って華奈恵は蒼慈を見る。

「大体、1万分の1くらいだな」

なんとなく契約した蒼慈自身はどれほどのものか分かっていた。

「つまりあなたはこの力のさらに1万倍ということですか？」

「まあ、そうなる・・・のか？」

自信なさげに蒼慈は華奈恵に目を向けた。

「ええ。そういうこと。ちなみに私も契約者の一人だから」

「なるほど。だからそれほど魔力が・・・もう一つ聞いてもいいですか？」

「ええ。どうぞ？」

セリーヌはまだおおきな疑問を抱えていた。

「異世界から来た。というのはなんとなくわかりました・・・」

「確かに。尋常じゃない力だった。私は戦士系だから魔力はあまりわからないけど、あれだけの力があるなら異世界から渡ってきてもおかしくない」

姉の言葉が続く前にフレールが蒼慈を見ながら言った。

「・・・なんのためにこちらの世界へ来たんですか？」

『異世界から来た』と言われた時、最初に思ったことだった。

…一体何のために・・・この世界を滅ぼすために？

「魔王”よ。 “魔王”を倒しに来たの・・・」

「え？でも魔王なんて・・・」

「そうよ。この世界にはいないみたいね」

そう。華奈恵達は“魔王”を倒しに来たのだ。

倒さなければ帰れない。

しかし、肝心の“魔王”がない。

「“魔王”を倒さないと帰れないんだけど・・・いないんだよね？」

「え、ええ。魔王という存在自体が伝説ですので・・・」

4人の間に沈黙が流れる。

魔王を倒しに異世界から来た、と言う蒼慈と華奈恵。

しかし魔王というのはあくまで伝説でしかなく、そんなものはいないと言うフレールとセリーヌ。

「倒さないと帰れないってことは・・・もう帰れないってこと？」

フレールが蒼慈へと尋ねる。

「・・・そうなるのかな？」

華奈恵へと話を振る蒼慈。

「たぶんね。私もこんなこと聞いたことがなかったから、わからないけど」

別にこれだけの力があればこの世界も嫌いではないと蒼慈は思う。でも、

・・・だからと言って、戻れないってのはな・・・

特段戻りたいわけではない、しかし戻れないのと、戻らなくてもいい、は違うのだ。

「貴方たちはこれからどうするんですか？」

蒼慈達へと疑問を投げかけるセリーヌ。

「それに気づいたのが君を治した日なんだよ・・・どうしょっか？」

再び華奈恵に視線を向ける。

「なんで全部私に聞くのかしら？ 私は蒼慈の保護者ではないのよ？」

若干苛立ちながら華奈恵がその目を睨む。

「・・・はあ。こっちに俺を連れてきたのは何処の誰だよ・・・魔王なんてひょっこり現われたりしないわけ？」

「さあ？ どうでしょう？ 私には分かりませんが・・・」

「それこそこういう時は・・・その、アレだアレ・・・」

「アレ・・・とは？」

「えっと・・・予言だ。予言。なんかそういうのなの？」

「予言・・・ですか？ 王都になら預言者がいますけど・・・そんな話聞いたことありませんが」

「・・・予言で魔王が出るって出たけど、民が混乱するから言えない・・・ありえることない？」

蒼慈は腕を組んで、若干ムスツとしてる華奈恵に聞いた。

「まあ、なくはないと思うけど・・・王都にでも行く？」

「そうだな。そうする以外やることもないし」

気づけば、家に来た時と話題が全く変わっていた。
そして、外もだいぶ暗くなっていた。

16話

「じゃあ、ここらへんで帰らせてもらおうわ」

外が暗くなったのを見て華奈恵は帰ろうと席を立った。

「ちょっと待ってください」

まだ話は終わっていなかった。

事実、フレールとセリーヌは二人とも納得した顔をしてない。

「私は・・・どうなるんですか？」

セリーヌは言った。

「奴隷のようなもの、と言いましたよね？」

確かに華奈恵はそう言った。

『奴隷のようなもの』だと。

奴隷ならば主人に付き従って行くべきなのか、セリーヌはそれを考えていた。

「私は、貴方達に付いて行くべきなのですか？」

セリーヌの問いに蒼慈が答える。

「せっかく助かったんだ。別にわざわざそんなことする必要はないよ。妹と一緒に暮らせばいいさ」

蒼慈の言うことは華奈恵と違う。

「それはどうかと思うわよ」

華奈恵は蒼慈に言った。

「彼女はあなたの“契約者”なのよ？」

「別にだからと言って付いてくる必要なんてないだろ？」

蒼慈は彼を見下ろすように立つ華奈恵に言った。

「じゃあ、私が連れて行ってくださいと言ったらどうします？」

セリーヌの問いかけに蒼慈は信じられない、というような顔をする。

「ちょ、姉さん!？」

フレールも慌てた様子でセリーヌを見る。

しかし、セリーヌは彼女を見ることはせず蒼慈を見ていた。

…妹のあの目は、姉譲りなのか・・・

ふと蒼慈はそんなことを思った。

「付いて来ると言うなら、こちらとしては嬉しい限りだけど・・・」

「貴方は私の命の恩人です。私のこの命、貴方のために役立てさせてもらえませんか？」

まっすぐな目でセリーヌは蒼慈を見つめる。

「そう言って貰えるのは嬉しいけど、せっかく治ったのにいいのか？」

そういうながら蒼慈はフレールの方に目をやる。

「ええ。私は貴方に付いて行くと決めたんです」

「ちょっと待ってよ、姉さん！」

二人の間にフレールが割り込む。

「姉さんが行くなら私も行くわ！」

堂々と言い切るフレール。

「俺は一向に構わないけど、別に無理する必要なんかないんだよ？」

蒼慈はセリーヌが無理をしてると言う。

セリーヌとしては無理をしているという感覚はない。

妹がいなければ生きていけない。

そんな弱い自分が嫌いで仕方なかった。

だんだんと起きていられる時間も減って、そのたびに自分がもうあまり長くないのだと思いきらされた。

そんな自分を見て泣きそうな顔をする妹。

辛かった。妹すら守ってやれない、むしろ守ってもらい、そのうえ心配まで掛けて、自分は姉失格だと思った。

だから、自分がもう、後数ヶ月も持たないとなった時、死ぬ怖さ

よりも、やっと解放されるのだという感覚の方が大きかった。

ただ、心残りは妹を一人にするということ。

自分達姉妹は互いを支えに生きてきた。だから、自分が死んだ時、フレールが支え失ってしまいどうなるのか、それだけが心配だった。そんな時、私は助けられた。

もう妹のお荷物にはならない。むしろ守ってやれる。

「無理なんてしてません。私は、貴方に付いて行きたいと心から思いました」

自分を助けてくれた。

絶望から救ってくれた彼は、とても輝いて見えた。

その輝きに1歩でも近づきたいと思ってしまった。

『役に立ちたい』なんて少しも思っていない。

自分の自己満足のための恩返し、そして自分が憧れた者に少しでも近づきたいという思い、ただそれだけ。

「・・・わかった」

蒼慈は気付いたのだろうか、彼女の瞳の奥にある自己中心的な思いに。

「わ、私も行くからね！私も付いてくからね！」

必死に声を上げるフレール。

姉を守るのは自分の役目。

姉と離れることなんて考えられない。

そして、何より彼女も蒼慈に少なからず憧れを抱いた。

彼の人柄や能力ではなく、ただ純粋なその力に。

「いいよね、華奈恵？」

「ええ。仲間が増えることに越したことはないわ」

こうして、蒼慈はフレールとセリーヌを合わせた4人で王都へ向かうこととなった。

「準備はいいのか？」

「ええ。完璧よっ！」

蒼慈の前で馬車の荷台に荷物を載せながらフレールは言う。

「今さらだけど、本当によかったのか？」

「何が？」

「言わなくてもわかるだろ」

「・・・姉さんが決めたんだから、私はそれに付いて行くだけよ」

「・・・そっか」

4人で王都向かうことが決まってから2日後。

4人は個人の準備をして、旅に必要な物を買った。

「蒼慈、全部乗せた？」

華奈恵は馬のいる方から蒼慈に声を掛けた。

「ああ。これで・・・最後っ。よし。全部乗つけたぞ」

最後の荷物を蒼慈は荷台へと押し込んだ。

そして、4人は馬車へと乗り込んだ。

「じゃあ、しゅっぱーっ！！」

セリーヌが馬車の中から、御者台に座っているフレールへと声を掛けた。

蒼慈と華奈恵は馬車の運転なんてしたことがない、セリーヌもそれは同じだった。

だから必然的にフレールが御者をする事となったのだ。

この町からほとんど出たことがないというセリーヌは初めての長旅に期待を膨らませていた。

16話 (後書き)

17話

「なんもないな・・・」

「ええ。思った以上に面白くないわ」

「そうですね。景色も、もう飽きちゃいましたし」

「普通は御者が何か面白いことをしてくれるんじゃないのか？」

「せめて景色が変わるように走ることはできないのかしら」

「流石につまらないですね」

蒼慈と華奈恵とセリーヌはしばらく走った後、口々に文句を言い出した。

「もうっ！普通はこんなもんなの！私のせいじゃないんだから！」

旅はしたことはないが、目的地まで1日ほどかかるところへ馬車で行ったことがフレールには多々あった。

そして、そういう時は大抵同じような風景が続いているようなものののだ。

「仕方がない。ここは俺のトークで盛り上げるしか・・・」

「ねえ、蒼慈」

「・・・待て。今、考えてるとこだから」

「誰もトークの事を言ってるわけじゃないわ」

「・・・？」

「思ったんだけど、蒼慈、龍とか召還したら帝都まで一瞬じゃないの？」

「・・・」

「・・・」

蒼慈とセリーヌは固まる。

「確かに・・・」

「龍を召還・・・？」

華奈恵のナイスアイデアに驚く蒼慈。

軽々と龍を召還などと華奈恵が言ったことに啞然とするセリーヌ。

「4人を乗せれる龍くらいなら簡単に召還できそうだな・・・」

蒼慈の言葉にさらにギョツとするセリーヌ。

「え？りゅ、龍！？いくらなんでもそれは無理なんじゃ？」

御者台の方からフレールが振り返り言う。

「大丈夫だよ。てか、召還ってのはそんなに難しいのか？」

「あ、当たり前です！」

セリーヌは昔、元気だった頃はフレールと一緒に戦う時に魔法をメインで使っていたらしい。

そのため、そういった魔法への知識も豊富だった。

「召還魔法、錬金術、飛行・転送魔法、亜空間魔法などというものは、この国、いえ世界でもほんの一握りの人間しか使うことはできません。そのうえ、魔法を行使するために多大な対価、つまり何人もの優秀な魔術師を集めなければなりません。そのなかでも異次元への扉を開き召還するのは魔力をかなり消費するんです」

セリーヌの魔法の知識は目を見張るものがある。彼女はベッドから出れない時は大抵魔法の本を読んでいたらしい。

「低レベルのモンスターなら、才能があれば個人で召還することも可能ではあります。しかし、龍ほどのモンスターを召還するのは不可能です。そもそも何人集まろうとも龍の魔力に合うだけの魔力を人間が出せるはずがありません」

「そうなのか・・・まあ、そう言うセリーヌも龍なら頑張れば召還できると思うけど」

サラッとしたことを言う蒼慈。

「私が・・・ですか？」

「うん。大体どれくらいの魔力がセリーヌに今あるのかわかるし、それぐらいあれば龍の1，2体ならなんとかいけそうな気がするん

だけど」

龍はこの世界ではほぼ最強の生命体だ。

国には竜騎士と言って、龍を使役する騎士がいるが彼らが扱う龍は最も知能の低い龍でランクもそれほど高くない。ランクにしないでいたいCランク。

ちなみに依然蒼慈が倒した岩龍はBランク

しかし、蒼慈は4人を乗せる龍と言った。4人が乗ろうとするならそれは、

「最低でもAランクですよ。そんな龍は」

「?モンスターにもランクとかあるの?」

「ええ。冒険者のように細かい十や一はありませんが、大まかにならランクづけがされています」

「へ」

「下からG、A、S、SS、SSSランクとなっていて・・・」

Gランク。最も弱いモンスターで人間に対して害がほとんどない。

Fランク。1匹ではそれほど強くはないが集まるとやっかいなモンスター。

Eランク。冒険者に討伐が依頼されるレベル。そして、個人が召還できる最高レベル。

Dランク。Bランク以下の冒険者がパーティーで挑むレベル。

Cランク。龍族の最低レベルで、大勢のBランク以下の冒険者が集まって倒すレベル。

Bランク。ボスクラスモンスター。人間が太刀打ちできる限界レ

ベル。Aランク以上の冒険者がパーティーで挑むレベル。

Aランク。Sランク以上の冒険者、つまりは大隊長レベルの人間が何人も集まり倒せるかどうかのレベル。

Sランク以上。これはもはや神などと崇められたりするレベル。というのがセリーヌの説明だった。

「ふうん。前に倒した岩龍はランクいくらなの？」

「Bランクですよ。というかアレを倒すなんて、もはや人外です」

「うわ、人外だってさ、華奈恵。ドンマイっす」

華奈恵は平然とした顔をしていたが青筋が一瞬立ったのを蒼慈は見逃さなかった。

「それで、4人くらい乗れるのはランクBくらい？」

「だからAランクです。そんなのを召還して帝都に行ったら、完全に化物扱いですよ」

「あらま。ちなみにセリーヌはランクBくらいなら1，2体は召還できるよ。ランクAは流石に無理だけど」

「『Bランクくらい』なんて言わないで下さい。十分異常なんですよそれでも」

「ふうん。それじゃあ仕方ないか。華奈恵・・・華奈恵の案はボツだってさ。ドンマイ」

華奈恵の顔に青筋が立つ

「ドンマイドンマイ、うるさいわね。言われなくてもちゃんと聞こえてたわよ。私が間違っていました。何か問題でも？」

「別に問題なんてないよ。ただ華奈恵があまりにも得意気にしてたから」

ニヤニヤと顔に笑みを浮かべながら蒼慈は華奈恵の方を見る。

「・・・何よ？ニヤニヤして、そんなに私が間違ったのが面白いわけ？」

怒りモードに入りかけている華奈恵。

「そんなことないよ。セリーヌが言うたびに一瞬シュンとした華奈恵が可愛くてね」

もちろん蒼慈はそんなことは思っていない。

しかし、わかってしまえば華奈恵の扱い方なんて簡単なのだ。

「な、何言ってるのかしら。別にシュンとなんてしてないしっ！」

落ち着きがなくなり、顔を真っ赤にする華奈恵。

何日か過ごしていてすぐに分かったことだが、華奈恵は慣れてないのだ。

元の世界で美人だと周りから思われていたのは事実だが、実際に面と向かって、可愛いだのなんだの言われるのには極端に弱い。

言ってしまう^{ウツ}えば華奈恵は初心だった。

「あらら。顔真っ赤にしちゃってさ。かわいー」

さらに追い討ちをかける蒼慈。

早くも華奈恵の性格に気付いたセリーヌは、蒼慈の言葉でさら真っ赤になって慌てる華奈恵に畳み掛ける。

「本当に可愛いです。美人でスタイルも良いのに、そのうえこんなに可愛かったら男なんてイチコロですね」

プシューという音を立てて華奈恵の顔から湯気が昇り、華奈恵は下を向いて固まってしまった。

18話（前書き）

いつもより頑張って長めに・・・

18話

「てかさ、王都までどれくらいかかる？」

「4日ほどかな」

「・・・かかり過ぎだろ」

「そんなもんなの！」

「・・・はっ！今名案が浮かんだ」

「龍はなしだからね」

「大丈夫。そこらへんは心得たつもりさ。・・・てなわけで、^{フィ}体力強化！^{ジカル}筋力強化！^{ストレッチス}」

蒼慈は馬2頭に補助魔法を掛けた。

「今の補助まほ・・・うわああああああ」

途端フレールの絶叫がこだまする。

ボーっと外を見ていた華奈恵とセリーヌは驚いてフレールの方へと顔を向けるが、

「「きゃあああああああ」」

彼女らが状況を把握する前に絶叫が再び。
馬車はもの凄い速度で走っていた。

「これなら間に合うかな？」

「し、死ぬ！止めて止めて！」

「ちゃんと手綱握つてくれよ、フレール。・・・それと硬度強^{ソリツ}化。これでよし、と」

壊れないように馬車全体にも強化魔法をかける。

「よ、よくない！！止めてええええええ！」

フレールの絶叫がこだまする中、先に落ち着きを取り戻したのは華奈恵だった。

「全く、ちゃんと馬は王都に向けて走ってるのかしら？」

「大丈夫だって。方向はあつてと思うし」

「で、適当ですね・・・」

若干青ざめながらセリーヌが言った。

「まあ、なんとかなるさ。流石にこのまま4日なんて耐えられないし」

「それは一理あるわね」

「確かに、旅ってこんなにつまらないものだなんて思ってもいなかっただすし、こっちの方がいいですね」

「よくないいいいい!!!!」

一人だけ否定の声を上げるフレール。

「ま、これなら1日とかからないだろ」

普通にスルー。

「ちょ、私が死ぬから!こ、これ死ぬって!ちょ、ほんとにつ、グ
フッ!」

木の枝が顔面に当たったようだ。

「・・・ドマイ」

「言うことはそれだけかああああ!!誰か止めてええええ!」

一行はそのまま高速で走り続けていた。

「も、もう・・・無理」

フレールが力尽きた。

「え?マジで?ちょ、フレール」

馬はあらぬ方向へと走りだす。

「フレール！起きて起きて！」

気絶しているフレールに呼びかける蒼慈。

「・・・」

あらぬ方向へと走っていつてしばらく経った後、蒼慈が無理やり御者台に座り馬を止まらせた。

「蒼慈、馬扱えたのね」

驚いた声を華奈恵が上げた。

「適当だよ・・・流石に死ぬかと思ったっての」

「それはこっちのセリ・・・うつぷ」

木陰でフレールがうずくまっていた。

「大丈夫？」

セリーヌが彼女の背中をさすりながら優しく声をかける。

「あ、ありがと、姉さん・・・気持ち悪いし、顔は痛いし、もう散々」

「それよりここは何処なんだよ・・・フレールが手綱を放したりなんてするから・・・」

「仕方ないでしょっ！だって・・・うっぷ」

「・・・はぁ。まあ、なんとかなるかな・・・」

——ガサガサ

「ん？」

ふと茂みの方へと目をやる蒼慈。

あたりはそれなりに暗くなっていたため、蒼慈は目を凝らしてそれを見ようとする。

その時、茂みから何かが飛び出して来た。

「動くなっ！」

飛び出して来た何かが、蒼慈らに向かって声を上げる。

「山賊！？」

瞬時に立ち上がり剣を抜いて構えるフレール。

まだ、顔色はよくないが、鋭い目つきに変わっていた。

山賊と思われる人影は全員がフードを被っていた。

「ああ、そうだ。悪いけど痛い目を見たくなければその馬車を渡してもらおうか」

「女？」

山賊は5人いた。

その先頭に立って蒼慈達を脅している者はどうやら女性のようにだった。

「だったら何だ？どの道ここで死ぬような人間には関係ない話だろう？」

先頭に立つ女山賊が蒼慈にそう言う。

「穏便に話し合おうじゃないか」

なんて言ってみる蒼慈。

目の前に立つ山賊は蒼慈と同じくらいの背丈だった。

「はっ！死にたいのか？とっととその馬車を置いて消えてもらおうか」

「・・・華奈恵」

蒼慈はその状況を見守っていた華奈恵に声を掛けた。
その蒼慈の声に華奈恵はコクリと頷き、魔力を集める。

「っ！？・・・お前、魔術師か！」

先頭にいる山賊のすぐ横に経っている長身の山賊が驚いた声をあげた。

そしてすぐさま懐の剣を抜き放ち華奈恵に迫る。

——キンッ

甲高い金属音が鳴る。

山賊の剣をフレールが受け止めていた。

「・・・ほう。私の剣を止めるとは・・・」

声からしてその山賊も女のようなだった。

「一人じゃそれくらいが限界だろうっ！」

その山賊の後ろから大きな影が二つほどフレールへと迫る。

「吹っ飛びなさい、ウィンドスライサ！」

その時、華奈恵の魔法が発動した。

華奈恵の目の前から発生した風の刃が二つの影へと迫る。

「ぐっ！早いっ！」

影の一人が呻きながら、その風の刃を剣で受け止める。

「っ!？」

暗くてよくは分らないが、華奈恵が驚いたのが分かった。

「・・・魔法を受け止めるなんて、なかなかやりますね。ですが、
こっちにも魔術師はいますよ！」

セリーヌが叫ぶ。

『激流よ、目の前の敵を飲み込め。地下水!』
グラウンドウォーター

突如、二人の山賊の足元から水が噴出す。

「何!？」

その水はそのまま二人の山賊を飲み込み、後ろの方へと流して行った。

「ちっ」

フレールと剣を交えていた山賊が舌打ちをした。

そして、そのままフレールからバックステップで離れる。
その時。

『光よ、荒野に降り注げ。光の雨!』
レイレイン

途端、眩い光がその場を包み込み、次の瞬間にはまるで槍の様に光の魔法の塊が当たりに降り注いだ。

「まさに光の雨だな・・・守れ、ダークネスバリア」

光と相反する闇の魔法が蒼慈達の頭上にドーム型のバリアとなつて現われる。

「なっ!闇魔法!？」

レイレインを放った山賊の長的な女性が驚いた声を上げた。
驚くのも当たり前である。闇と光の魔法はどちらも上級魔法であり、この世界で使える者はだいたい限られている。

上級魔法を使う者であれば大抵名を知られている者のはず。
しかし、

「お前達・・・一体何者だ？」

山賊のリーダーが蒼慈達に問いかける。

彼女の横には流された2人以外の残りの2人が両脇に控えるように立っている。

「さあ？何者なんでしょうね」

「とぼけるな！殺されたいのか！？」

「はははっ。さっきの光魔法は結構な大技だったと思うんだけど・・・大したことなかったね」

「っ！？」

蒼慈の言葉に山賊は動揺を隠せないでいた。

そう、さっきの魔法はかなりの魔力を消費した、彼女の最大の魔法だった。

それを目の前にいる男はいつも軽くあしらって見せた。

「凶星か・・・セリーヌ」

「はい。なんでしょう」

蒼慈はいつの間にか横に立っているセリーヌに話しかける。

「光魔法ってのは誰でも使えるの？」

「いえ、上級魔法なのでそう誰でもというわけにはいかないはずで

す」

「・・・なるほど。あんたこそ一体何者？ただの山賊には見えないんだけど」

「貴様らには関係のないことだ！」

「・・・そう。隠す気？その横に立つ人もそうだけど、明らかに訓練されたような動き、そして貴方自身もどこか気品が見られる」

蒼慈は無言のままの山賊3人にそう言って言葉を続ける。

「どこかの貴族の者か？」

ビクッと山賊のうちの今まで何もしていなかった者が震えたのがわかった。

「当たりか・・・場合によってはこの馬車をくれてやってもいい」

「なっ！？蒼慈！？」

「本当か！？」

華奈恵と山賊のリーダーらしき女性が同時に反応した。

「大丈夫だ、華奈恵。そんなに急いでるわけでもないだろう？」

「・・・まあ、そうだけど・・・」

「と言うわけだ。あんたが何者なのか教えてくれれば、この馬車は

やるよ」

「・・・」

山賊のリーダーらしき女性はしばし考えるように下を向く。
彼女の横にいる2人はしきりに彼女に耳打ちをしていた。

「わかった。その話、乗った」

「!？」

山賊の両脇に立つ2人が驚くが、すぐに呆れたような感じでため息をついた。

「これから言うことは他言無用。言えば殺す等という脅しが通用しない、だからこれはあんた等の良心に掛けるしかないが・・・」

「ああ。信用してくれ。・・・とは言っても信用できないだろうけど、信じてくれとしか言い様がない」

「・・・この取引をしてあんた等には何の得もない」

「ああ・・・まあ、そこは好奇心が満たされるってことで」

ヘラヘラと笑いながら蒼慈は山賊のリーダーのような女性に言う。

「私達は・・・スパイなんだ」

そう彼女が言うといつの間にか起き上がってきた山賊を含む全員がフードを脱いだ。

19話

フードを脱いだ下から現われたのは赤髪の女性だった。
やはり蒼慈が思ったとおりどこか気品さを臭わせる。

「私の名は・・・キエラ・フォールズ・レッテンベルグ」

凜と通る声でキエラは言った。

「・・・へえ」

「・・・へえ、って・・・何も思わないのか!？」

「なんで?・・・セリーヌ、フレールどうしたんだ?」

「え?・・・レッテンベルグ・・・?」

「レッテンベルグ・・・」

蒼慈の反応にキエラは驚いた声をあげた。
しかし、その蒼慈と全然違う反応をするフレールとセリーヌ。

「??? レッテンベルグってなんなんだ?」

「し、知らないんですか!？」

「だって・・・ほら、俺アレだし・・・」

蒼慈がそういうとセリーヌは納得したようだった。

「あ、ああ。そうでしたね。レッテンベルグっていうのは今、この国、クリスパニアと敵対関係にある国なんです」

「へえ……で、名前にレッテンベルグが入ってるってことは王族なの？」

「……ああ、そうだ。私はレッテンベルグ王国第二皇女だ」

「へえ、凄いジャン」

「……それだけ？」

「え？他になんて言えば？」

キエラは内心焦っていた。

キエラは王族である。そして、彼女の国は今、この国とは敵対関係にあるのだ。

彼女自身がフードを脱いだ理由としては、このまま素性を隠し通せば命が危ないと感じたからだだった。

彼女の護衛の者達もそれには同感であった。

しかし、彼女が素性を晒す、つまりはスパイであるとバラすことは彼女の死に直結していると言ってもいい。

それだけ敵国で自分の素性を晒すことは無謀だった。

「お前……私はスパイだぞ？わかっているのか？」

目の前の自分より幾分か幼く見える男はキエラの素性に特に驚いた様子も見せず、自分達を殺そうともしない。

もちろん殺しにかかられたら、今の彼女達では勝てないことは百

も承知しているが、死を覚悟してまで取った行動の反応がそんな軽いものというのは彼女もいささか傷つくところがあった。

「別にスパイだろうと関係ないよ。特にこの国に思い入れがある訳でもないし」

軽く言っただけの蒼慈。

「何を言ってるんだ。この国の情報を我々が祖国に持ち帰れば戦争が起こったとき、この国が負ける可能性があがるのだぞ！」

「いや、俺冒険者だし。何処の国にしようと生きていけるし」

王族であるキエラは目の前の男の言う言葉が信じられなかった。

「・・・お前、名前はなんと言う」

「俺はかみし・・・ソウジ・カミシロだ」

「ソウジか・・・カミシロは聞いたこともないな。一体何者なんだ」

「ただの冒険者ですよ」

“ただ”の冒険者が闇魔法を使えるのが普通なのか？この国では

そう言っただけでキエラはセリーヌの方へと視線を向ける。

「いえ、そんなことはありませんが・・・」

セリーヌ自身もビクリしていた。

妹のフレールがソウジと戦った時、彼が使ったのは錬金術とおそらくは身体強化魔法だと思われる。

だからセリーヌはソウジは少しかり戦闘慣れした錬金術師だと思っていた。

しかし、彼が異世界から着たこととその異常なまでの能力を知った。

この世界において彼の年齢で錬金術を使えること自体がまず異常なのだ。

だからセリーヌはソウジの闇魔法を見たときは我が目を疑った。

錬金術と補助魔法、そのうえ闇魔法までも使う。まさに人外の域に達しかけている。

「そんなことより馬車が欲しいんだっけ？」

「あ、ああ」

蒼慈は自分達の乗っていた馬車を指差しながらキエラに言った。

「それに乗って祖国へ戻るの？」

「・・・ああ。そのつもりだ」

「今あの馬には強化魔法が掛かってるからかなり速度で走れると思うよ」

「強化・・・補助魔法か。しかし、本当にいいのか？」

「うん。そんなことより急いだ方がいいんじゃない？ここ結構王都に近いよ？」

「そうだな・・・この恩は忘れない」

蒼慈達が自分達を油断させて馬車に乗ったところで殺す可能性もある。

しかし、今のキエラはそれがないとはっきりと思えた。
敵国の姫であるにも関わらずそれを見逃す男。

「興味深いな・・・いすれまた会おう」

そう言つてキエラは馬車へと向かう。

「ああ。またな、キエラ」

蒼慈はキエラの背中に声を掛ける。

すると、どこか驚いた様子でキエラは振り返った。

「？」

蒼慈はその行為に首を傾げる。

…私の名が気軽に呼ばれるのはいつ以来だか・・・

「またな、ソウジ」

そう言つてキエラは馬車の中へと消えた。

それに続くように従者と思われる者たちが蒼慈に頭を下げながら馬車へと向かっていった。

そして最後に御者台に座った従者がもう一度頭を下げた後、馬車はものすごい速度で森の方へと走り去った。

「行ったね・・・」

「蒼慈」

「ん？何？」

「これからどうやって王都へ向かうのかしら？」

蒼慈が呼ばれて振り返った先にはどこか怒りを感じさせる雰囲気
を纏った華奈恵がいた。

「ん？どしよか・・・フレール？」

フレールはキエラの従者と戦っていた位置から1歩も動かずに立
っていた。

「・・・強かった」

「さっきの剣を使ってた人か・・・俺より？」

「流石にそれはないけど、最近は自信を失くすことが多いな・・・」

「なんならフレールも俺と“契約”する？」

「それだと意味がないのよ。私は自分の力で強くなるから」

「そっか・・・まるでセリーヌが俺の力で強くなったみたいない言
方だな」

「あ・・・いや！そんなつもりじゃないよ！ね、姉さん！落ち込ま

ないで！」

「い、いいのよフレール。だって、事実ですもの・・・グスン」

セリーヌはショボンと落ち込み地面をグリグリと木の枝でついていた。

「ね、姉さんは元々強かったんだから元に戻っただけよ！あいつの力なんて関係ないわ！」

「『あいつ』って・・・ひどい言われ様だな・・・グスン」

セリーヌに続いて蒼慈もしゃがみ込み地面に木の枝で絵を書き始めた。

「え、ちょ、ちょっと！ソウジ！そんなつもりじゃっ・・・」

落ち込むセリーヌと蒼慈をなんとか励まそうとするフレールだった。

20話（前書き）

お気に入り件数が100を超えて、テンション上がったたら、普通にストック切れて焦りました。

更新遅くてお気に入りから消されるのではと、内心冷や汗だらだらでした^^;

誤字などがあれば感想で指摘お願いします。

20話

「もうすぐ王都ですね」

セリーヌが言った。

蒼慈達は結局徒歩で王都に向かうこととなった。
しかし、蒼慈によって全員補助魔法を掛けられ、大した疲れもな
いまま王都へもうすぐのところに來ていた。

「おお。もうすぐか、結構近いんだな」

「全然近くないわよ！」

「誰かさんが馬車を勝手に強化して大分距離を稼いでいただけよ」

フレールは蒼慈に怒鳴り、華奈恵はやや冷たい視線を向けていた。

「あらま。二人ともそんな怒ってどうしたんだよ」

「言わないとあなたは分からないのかしら？」

「ははは。まあ、そうカリカリすんなって。どうせもう着くじやな
いか」

「そういう問題じゃないの！」

フレールが馬車の時のことを怒っていることは蒼慈は百も承知だ。
しかし、あえて言わない。

「じゃあ、どういう問題なの？」

「あんたわかんないの!？」

「分かってたら聞き返さないよ？」

「っ・・・いちいち尺に触るような言い方ばかり・・・あんたねえ!」

「はいはい。ちょっと五月蠅いって。門番の人がこっち見てるから、恥ずかしいことはやめようね」

子供をあやす様な言い方で蒼慈はフレールに言った。

「はあ!？あんたねえ!」

蒼慈は苛立つフレールを無視して門番へと向かっていった。

門番の前には何組か商人や冒険者らしき人間達が並んでいた。

そして、しばらくして蒼慈達が門の前に来た。

「お前達、冒険者か？」

「はい。そうです。これが証明証です」

さっきとは打って変って礼儀正しい話し方で、フレールは慣れたようにギルドカードを門番に渡した。

「ほら、あんた達もギルドカード」

「はい」

「ほい」

「はい」

若干一名ふざけてるような声で返事をしている人がいたがあえて気にせず進もうとするフレールだった。

「あれ？てかさ、なんでセリーヌはギルドカード持ってるの？」

「？言ってますでしたっけ？」

「聞いてないと思う」

「えっと、昔はフレールとペアを組んで冒険者をしてたんですよ」

「へえー。いくら俺と“契約”したからと言ってあそこまで強い人にはビックリしたから、これで納得がいったな」

二人は話ながらそのまま門を潜って王都へと入った。

「うわあー。ここが王都・・・」

皆が進もうとする中、一人王都に来たことに喜びを隠せない者がいた。

その者は目をキラキラさせながら王都を見ていた。

「・・・まずは宿かな？フレール」

「なんか凄いね！」

「・・・ええ、そうね。荷物も馬車と共になくなったし、買い物も
しなくちゃね。姉さん、お金ある？」

「あそこにも！あっちにも！冒険者がいっぱいだわ！」

「・・・お金はちゃんと持ってたから大丈夫よ。問題は服かな」

「あ！見て蒼慈！あそこにお城がっ！」

蒼慈の腕を握って王都の中心にある城を指差す。

「あそこにいるのもしかして貴族！？貴族だわ！蒼慈、本物よ！」

「あ、あのさ・・・恥ずかしいから落ち着こうよ」

「こんなの落ち着いてられるもんですか！」

「・・・華奈恵。まるで子供だね」

蒼慈のそんな一言に固まる華奈恵。

「っ！・・・オホン！・・・さあ、何してるの？早く行きましょう。
いつまでも此処で止まってたら迷惑よ」

顔を真っ赤にした後、一つ咳払いをしてから華奈恵はいつもの落
ち着いた口調に戻った。

「・・・」

そんな華奈恵を皆ジト目で見つめる。

「な、何？」

「別に。フレール宿の場所わかる？」

「もちろん。こっちよ」

「い、言いたいことがあるならハッキリ言えばいいじゃない？」

「言って欲しいの？」

「・・・さ、さあ！宿探しましょう！」

慌てた様子で宿探しを進める華奈恵。

…中身はかなり子供なんだな・・・

内心でそんなことを思う蒼慈。

そして、一行は王都での宿を探しに王都の中心部へと歩き始めた。

「とりあえずこんなもんか？」

蒼慈達は宿を取った後、馬車と共に山賊にあげた服などの生活用

品を揃えていた。

「そうですね。これくらいあれば十分ですけど、よかったんですか？」

「別にいいよ。元はと言えば俺のせいだしね」

フレール達は稼いだ金を全てセリーヌに使っていたため、資金的に余裕がなかった。

だから荷物代はすべて蒼慈達が負担したのだ。

「それにしてもカナエさん、はしやぎすぎじゃ・・・」

セリーヌはチラリと華奈恵の方を見る。

「ふふふ。この服いつ着よっかなあゝ。えへへゝ」

買った服やアクセサリーを見ながらニヤニヤしている華奈恵がいた。

「華奈恵のせいで大分お金が飛んだし、明日はまず依頼受けて金稼ぐか・・・」

「そうですね。フレールがいるからそれなりに高いランクの依頼をすぐに受けますしね」

そう言って蒼慈とセリーヌが雑談をしている横を歩くフレールはどこかそわそわしていた。

「フレール。華奈恵じゃないんだからもうちょっと落ち着いたら？」

「あ、うん・・・ソ、ソウジ」

「ん？」

「この服・・・変じゃない？」

町の中で防具を付けていては歩きにくいだろうと、宿に防具を置いて店で買った私服をフレールは着ていた。

「普通に似合ってるよ」

そう言ってニコリと笑みを向ける蒼慈。

実際フレールの服は似合っていると見える。

ちなみに言うところ、こちらの季節は春と夏の間でぽかぽかと暖かい。

だからフレールの服装は割と薄着だった。

フレールは最初こんな服装だと襲われた時に対処できないと言っていたが、町で襲われることなど早々ない。

その上、蒼慈達がいれば正直フレールの出番はないのだ。

「そ、そうか・・・」

若干顔を赤らめながら歩くフレール。

ずっと姉のために戦い続けていたせい、こういう女性らしいことにはかなり疎かった。

「じゃあ、今日はとりあえず宿に戻ろうか、華奈恵いつまではしゃいでるんだよ」

「あれを明日着て、あのスカートは明後日で・・・はっ！・・・は、はしゃいでなんかないわよ」

：いや、もうバレバレですから。今更取り繕われても・・・

心の中で呆れる蒼慈だった。

21話

「おおお・・・流石王都、ギルドがこんなにデカイとは」

「本当ですねえ。私達のいた町とは大違いです」

王都にあるギルドはセリーヌ達のいた町のギルドよりも5倍ほど大きかった。

構造は4階建てで、石造りでかなりシッカリと作られているようだった。

中に入るとすぐに受付があるのだが、依頼書を張るボードの数かなり多かった。

入ってまっすぐ行けば受付、そこで右を向くと雑用系の依頼ボードが3個ほど。

一個のボードにだいたい10～15個は依頼が貼れる。

そして左は椅子や机などが置いてあり、数人の冒険者が話していた。

そのまま左の奥へいくと上の階への階段があった。

「おお・・・流石王都」

全員が驚きを隠せないまま上の階へと登った。

2階はどうやらアイテムショップのようだった。

値段を見てみると幾分か町の店よりも安い。ギルドだから値引きされているのだろうとわかった。

そして、店の左右にボードが並べてあり、右には討伐任務、左には護衛任務が張ってあった。

ボードは左右共に3個だった。

「ねえねえ！次行こう！もう一個上！」

そして、一人異常にテンションが高い。

「華奈恵・・・」

「カナエさん・・・」

蒼慈とセリーヌがそろってため息を吐く。

そんな2人を無視して華奈恵は上の階へと向かう。

蒼慈達を見ずにもう一人付いていく者が。

「フレールまであんなに目キラキラさせちゃって」

この中で最年少だが最も落ち着いている蒼慈だった。

「あの子ったら・・・」

3階は冒険者がくつろげる場所になっていた。

格安でご飯を食べることが出来るみたいだった。

その光景を見てまたもや目を輝かせる2人だった。

「次っ！次！」

子供のように次へ行こうとする華奈恵。

フレールも無言でそれに続こうとする。

「ちょっと、あんた達」

その時、その2人に声が掛かった。

「4階はAーランク以上の者以外は立ち入り禁止だよ」

3階の受付にいるご飯の注文を受けている女性が言った。

「・・・」

固まる華奈恵。

華奈恵と蒼慈は今だにランクはEーのままだったからだ。
しかし、そんな華奈恵を無視して一人上に上がる者が。

「フレールってランクいくら？」

疑問に思い声を掛ける蒼慈。

「Aー」

言ってから何故か親指を立てるフレール。

そして、そのフレールに親指を立て返す華奈恵。

「フレール・・・Aー・・・」

受付の女性が何か考えるように呟く。

「あんだ『閃光の戦姫』かい！？」

途端周りの冒険者がざわめきだす。

「そうよ。この人たち私のパーティーだから一緒に行ってもいいわよね？」

「いいけど・・・あんた今まで王都への招待全部断ってきたのにどういう風の吹きまわし？」

「まあ・・・色々とあって・・・」

そう言って言葉を濁すフレール。
そんな彼女の横をズンズンと抜かしていく華奈恵。

「あっ！ちよつとカナエ待って！」

フレールはそれを追っていった。

「フレールって割と有名なんだな・・・」

ちよつとビックリする蒼慈だった。

「ねえ、あんた」

「？」

頭にクエスチョンマークを浮かべながら自分を指さす蒼慈。

「そうよ、あんただよ。一体どうやって『閃光の戦姫』を落としたんだい？」

「落とした、って・・・人聞きの悪い。別にそういうんじゃないかもしれませんから」

「ふうん。まあ、いいわ。さっき付いていったあの子とあんた等の

ランクは？」

「俺と華奈恵はどちらもEーです。それで、セリーヌは・・・セリーヌってランクいくら？」

「私はCですよ」

「Eーが二人にCが一人。とんだお荷物さんだね」

そういつて馬鹿にしたような笑みを浮かべる受付の女性。
それに合わせて周りの冒険者達も笑う。

「ははは。そうですね。足引っ張りまくりですもん、フレールが」

そう言つて4階へと登る蒼慈。

その背中に強がっちゃつて、なんてと周りからの言葉が投げ掛けられたが、蒼慈はそれらを無視して4階への足を進めた。

「全く困ったもんだな・・・あんなかに俺らの魔力を見れる奴はいないのかよ・・・」

「魔力を見るにはよほどの力量が必要なんですよ。ランクなら最低でもAはなくちゃ」

「ふーん。そんなもんかなえ・・・」

4階はAーランク以上しか受けれない依頼があるボードが2つあった。

「ほお・・・」

そうやって周りを見渡す蒼慈。

ボードの前に立つ華奈恵とフレールは置いといて、周りの椅子に座って話している冒険者を見る。

ほとんどがフレール以上の力を持っている者だと思う。

そうやって蒼慈が他の冒険者を見ていると横から声が掛かった。

「あんたらここ来るの初めてか？」

「ん？そうですけど・・・」

かなりガツシリした体付きの男が蒼慈に声を掛けてきた。

「このルールを教えといてやるよ」

「ほう」

“このルール”この男はそう言ったが、たぶんその“ここ”が指すのは王都のことではなく、ましてやこのギルド全体のことではないのだろうと蒼慈は思った。

「“ここ”のルールですか・・・是非聞かせて貰いたいね」

“ここ”というのは多分、このフロアのこと、言うならAー以上のランクの冒険者間でのことだろう。

「ふっ・・・この世界は弱肉強食だ。それはわかるな？」

「もちろん」

「特に“ここ”では力が全てなんだよ。下手にA一になったからといって気軽に来て良い所じゃないんだよ、坊主」

「ほう・・・つまりは小手先の強さなら“ここ”には来るな、と？」

「ああ、そういうことだ。ましてや1人だけがランクを満たしているからといって雑魚が付いてくるなんてのは、論外なんだよ」

「へえ。それはそれは、ご忠告どうも」

男は暗に蒼慈らに「ここはお前らが来る所じゃない」と言いたいのだろう。

男は蒼慈に対してかなり威圧的な目線を送っていることがその証拠だ。

しかし、蒼慈はそんなのをものともせず男の前を通過してボードへと歩いていく。

「フレール、華奈恵。なんか良い依頼あった？」

蒼慈がそう二人に聞くと周りから鋭い殺気が飛ぶ。

「早く出て行け」そう言ってるのだ。

「えっとね・・・これは？」

フレールはそんなものに慣れているのだろうか、なんの躊躇いもなくボードに貼り付けてある任務を指す。

「それが一番報酬がいいのよ」

華奈恵もフレールと同じ考えのようだった。

「へえ・・・護衛任務か・・・面倒臭そうだな」

「でもさ、ほら。結構な額だよ？それにランクもSだし、ぎりぎり受けれるし」

「これ成功させたら私達一気にランクあがるよ？それに5金貨も貰えるなんて・・・」

フレール達はどうしてもこの依頼がいいらしい。

どこか諦めた様子で蒼慈はその依頼をボードからちぎった。
その時、

「おい、それは俺らが今から受けようとしてたところなんだよ」

…あれ？なんかデジャブに近いものが・・・

22話

「おい、それは俺らが今から受けようとしてたところなんだよ」

この瞬間蒼慈と華奈恵はデジャブに近いものを感じただろう。

「俺が今ちぎったよねこれ。こういうのって早いもの勝ちだと思うんだけど？」

「ああ、そうだな。普通は早いもの勝ちだ。“普通”はな」

そして、男はニヤリと意地汚い笑みを浮かべる。

男は戦士なのか背中に大きな斧を背負っていた。

男の後ろには4人ほど似たい様な体格の者達がいた。

「ここは“普通”じゃないと？」

「ああそうだ。さつきモッドの旦那がてめえ等に忠告しただろう？ここは弱肉強食だと」

さつき蒼慈に話しかけてきた男はモッドと言うらしい。

「確かに聞いたね。でも、だからと言ってこの依頼をあんた等に譲る理由にはならないだろう？」

「ああん？俺の言ってることがわからねえのか？」

「ここは弱肉強食。そして、今の時点で強者は・・・俺らだ」

蒼慈は睨む男を睨み返して言った。

「てめえ等が強者？ はははは・・・笑わせるなよ餓鬼が」

「なら試すか？」

「くくくく。いい度胸だ。でもこの世界じゃ生きていけないなあ」

「ふっ・・・セリーヌ」

「はい」

「リハビリついでに1発かまして来い」

「わかりました」

そんなことだろうと思っていた、とでも言う風にセリーヌは蒼慈の言葉に従いギルドの外へ出るために階段を先に下りていく。

「おいおい。女に頼りつきりか？ しかも一人とは、舐めた真似してくれてんじゃねえか」

「所詮脳筋が。あんまりがつついてるとお里が知れるぞ？」

「っ！？・・・この糞餓鬼・・・」

「セリーヌを倒せたら相手してやんよ。倒せたらな」

「はっ！ 後で泣いても知らねえぞ！」

そう叫んで男も後ろに続く男達を連れて階段を下りていった。

「ちょっとソウジ！」

「ん？」

「姉さんに何かあったらどうすんのよ！」

「大丈夫だって。」

「何が大丈夫なのよ！いくら姉さんでもあの男達全員を相手にしたら勝てっこないわ！」

「大丈夫大丈夫。それに・・・」

「・・・それに？」

「この程度で負けるなら、いらねえよ」

瞬間蒼慈の周りの空気が冷える。

「っ!？」

それを感じてフレールは思った。

…もし姉さんが負けたら本当に見捨ててるつもりだわ・・・

「まあ、負けるなんてことは万が一、いや億が一にもないと思うけどねえ」

はははと笑いながら蒼慈も階段を下っていった。
そしてそれに無言で華奈恵が続く。

蒼慈と契約したことでセリーヌの力がかなり上がっていることは
フレールも知っていた。

しかし、相手はAランク以上の熟練者。

それが5人ともなれば勝てるとは思えなかった。

「っ!!」

この戦いを止めるべくフレールも急いで外へと向かった。

フレールが1階へ降り、外へ出た時にはすでに戦いは始まっていた。

「そんな女ぶっ飛ばしちまえ！」

「ここのルールを叩き込んでやれえ！」

野次馬の最前線まで人を掻き分けて出てきたフレールの横の野次
馬達が大声を上げていた。

そして、それらの全ては姉のセリーヌに対する暴言。

そんな中フレールは余裕な顔で男たちと向き合っている姉を見た。

「あらあら。私のためにこんなにも観客が来てくれるなんて、なん
か嬉しいものですね」

「えらい余裕じゃねえか。その綺麗な顔をグチャグチャになっても

知らねえぞ」

「フフフ。いつでもいらっしやい」

セリーヌの挑発に苛立ちを隠せない男達。

ある男は大剣を、ある男は大斧を、またある男は槍、そしてグロ
ーブをはめている者が一人、最後にメイスを盛った者が一人。

全員が全員近距離戦闘専門の武器を持つもの達。

それでいてランクがAー以上と言うことは、もちろん魔法使いを
倒すことにも慣れている。

「このアマア、舐めやがって・・・いくぞ!!」

先頭の男の叫び声と共に全員がセリーヌに向かって走り出す。

しかし、全員が固まってるわけではなく散り散りになりながら全
方向からセリーヌを潰そうとしている。

魔術師の攻撃は大抵が範囲魔法や直線型魔法であることから、全
方向からの攻撃が最も魔術師に対して効果的である。

やはり、この男達はかなりの熟練者であり、それなりに理にかな
った戦法と言える。

「脳筋に見える割には・・・でも、遅い」

『激流よ、我が命じるままに流れよ。地下水!』
グラウンドウォーター

この技は普通の魔術師にとってはかなりの魔力を消耗するためそ
う簡単に打てる物でもないし、なによりこれほどにまで簡略化した
詠唱でこれほどの威力が出ることは普通の魔術師ではありえない。

それにも関わらず、セリーヌの足元から発生した津波は全方向へ
向かって流れ、男達全員を押し流していく。

この技をここまでコントロールするのなら、並みの魔術師はこの1発で気を失う可能性だってある。

それほどの技をセリーヌは意図も簡単にやってのけた。

「私をそこらへんの魔術師と一緒にして欲しくはないわね」

ニコリと笑みを気絶している男達に向けるセリーヌ。

「ね、姉さん！大丈夫なの！？」

フレールがセリーヌの身を案じて駆け寄ってくる。

本人もそれが愚問だと分かっていたが、聞かずにはいられなかった。

「大丈夫もなにも、余裕過ぎるわ」

その時のセリーヌの顔が、あの時の蒼慈に少し似ているなどとは口が裂けても言えないとフレールは思った。

「てなわけで、この依頼は俺達がやるから」

気絶している男の前にしゃがみ込み蒼慈は依頼書をヒラヒラさせながら言った。

「じゃ、受付に行きますか」

と、蒼慈はギルドの中へと向かっていった。

華奈恵もそれに続く。

「な、なんつう威力だよ・・・」

「あいつ何者だよ・・・」

「名前聞いたことないぞ」

野次馬はあまりにも一瞬で終わったために少しばかり固まっていたが、ポツリポツリと呟き始めた。

そして、そんな野次馬を他所にセリ―ヌはフレーヌを連れてギルドの中へと入っていった。

残されたのは野次馬達だけだった。

22話（後書き）

誤字・雑字があれば感想でお願いします。

23話

「この依頼受けたいんですけど、いいですか？」

蒼慈が受付の女性に依頼書を見せている。

「この依頼はランクが最低A―必要ですが、どなたかその条件を満たしている方はいますか？」

「フレール」

蒼慈は後ろに立っているフレールを呼ぶ。
しかし、

「フンッ」

さつきセリーヌを戦わせたことを怒っているのか、フレールは目に見えて不機嫌だった。

「フンッ、て子供じゃないんだからさ」

「・・・」

「せっかくセリーヌが頑張ってこの依頼を受けれるようになったのに」

「ヌヌヌ・・・」

「それに元はと言えばフレールがこの依頼やりたいてって言ったのに」

「くう・・・」

「仕方ないか・・・諦めるか、せっかくセリーヌ頑張ったのに、元は自分のせいだって言うのに、あゝあ。仕方ないか・・・」

「分かったわよ！ほらっ！」

勢い良くフレールがギルドカードを受付の人に見せた。

「は、はい。確認しました。では後で依頼人のところへ行ってそこで詳細を聞いてください」

「怪しいな」

「怪しいわね」

「怪しいですね」

「怪しい」

上から順に蒼慈、華奈恵、セリーヌ、フレール。

「なんで依頼人がいる場所が森の中なんだ？これは普通なの？」

「んなわけないでしょ」

蒼慈の問いにフレールが答えた。

蒼慈達は依頼人の元へ行くため依頼書に記載されていた宿屋へと向かったが、その主人に、

『ああ、依頼を受けたのか。その人たちから伝言を預かっていてな。この町の東の門から出た先にある森の中で待っていると伝えてくれと言われたんだ』

それを聞いてさっそく森へとやってきたわけだった。

「にしてもなんで森の中なんだよ・・・ありえなくねー？」

「なにかしら理由があるのでしょいか？」

「こういう時は大抵が身分を隠さなければいけない貴族とかが多いわね」

「ほう。それはそれは、だからこの報酬か。にしても依頼書に書いてあった火山までの護衛ってさ、そんなに危険なわけ？」

蒼慈達が受けた依頼の内容は、

護衛任務

ヘルドール火山まで我々を護衛してもらいたい。

道中は危険なため、腕に自信がある者に限る。

という物だった。

「あまり聞いたことないけど、宿屋の主人曰く、盗賊とかランクがD〜Cランクのモンスターがよく出るらしいわ」

「それはまあ・・・て、結構簡単じゃないか？」

「ランクCのモンスターを簡単に倒せるのはあんた等ぐらいよ」

若干呆れ顔でフレールは蒼慈と華奈恵を見た。

「ふうん」

何を思ったのか蒼慈は一人うんうんと頷いていた。

「あ、あそこに人がいますよ！」

セリーヌは森の奥を指差して言った。

「お、ほんとだ。おい」

その人影に手を振りながら蒼慈は奥へと進んでいった。

「あなたが依頼人？」

「ええ、そうです。それにしても・・・腕には本当に自信があるの
で？」

依頼人は全員で4人いた。

その中の一番長身の者が蒼慈達の声に反応してきた。

「もちろん」

「失礼ですがランクの方は？」

「E」

「E一よ」

「Cです」

「A」

言わずとも分かるが、上から蒼慈、華奈恵、セリーヌ、フレール。

「・・・実力があるのは貴方だけですか」

そう言って男はフレールの方を見る。

「失礼ですが、今回の依頼はなかったことにしてもらえませんか？
ようか」

男は呆れたような顔でそう言った。

「どういうことかしら？ちゃんとギルドの承認は得ているわよ？」

男に華奈恵が言い返す。

「今回の火山へ我々が行く目的は貴方達には理解できないほど重要なことなのです。ですから、失敗は許されません」

「なるほど。俺達だと失敗する？」

「はい」

蒼慈が尋ねるとなんの躊躇もなく男は言った。

「なるほどなるほど。そんなにも重要なのか？」

「はい」

男は答える。

「ランクSの護衛。ここでは下のランクの者は上位のランクの依頼を“見る”ことすらできない。そしてこの報酬の額。その上、商人とは思えないのに商人の格好をしている依頼人」

ニヤリと笑いながら蒼慈は言う。

その言葉に男の眉がピクリと反応した。

「これはただの護衛ではないな。あんたの後ろにいる杖を持った男と剣を持つてる女、相当な腕だ。それこそ護衛がいないほどにな」

「・・・」

男は無言。

「最近噂で聞いたんだがな」

蒼慈は宿を探したり、買い物をしているついでに色々と町の人間と話すことがあった。

そこで気になる噂を聞いたのだ。

「冒険者の中から王女の近衛兵を決める、とな」

すると途端に男の後ろにいる物の雰囲気が変わった。

「貴様・・・何者だ？誰にこのことを聞いた？」

「噂を聞いたただけだ。後は俺の推測。まさか本当だったとは」

そこでまたニヤリと蒼慈は笑みを浮かべた。

「生きて帰れると思うなよ？」

そう言うとなは剣を抜いた。

それに合わせるように横にいた杖を持った男も臨戦態勢に入る。
そして、さっきまで話していた長身の男は残りの小柄な女性を抱いて後ろへと下がった。

「凶星だったか、となるとそいつが王女か、まあ多少は変装してるんだろうけど」

「だったらなんだ！」

そう言うとなは蒼慈に剣を振り被って迫った。

「だったらこうだ」

女が剣を振り下ろした先に蒼慈はいない。

「なっ!？」

女の攻撃はかなりの早さだった。

同じ剣士としてそれを見ていたフレールは思った。

・早いなんてもんじゃない。これはSランクレベルか、それ以上・

女は目線を上げて辺りを見渡し、驚愕に目を見開く。

そこには倒れる長身の男と蒼慈によってナイフを首に突きつけられている小柄の女性がいた。

「き、貴様っ!!」

「動くな、動けばこいつを殺すぞ？」

どこの悪役だと内心想いながらもその行動を見守るセリーヌと華奈恵。

「その方がどなたか分かっているのか！」

女は蒼慈に向かって叫んだ。

「さあ？んなもん知らんし、興味もない」

「な、なんだと!？」

「さあ、どうする？」

「っ!・・・どうする、だど？貴様は自分が何をしているのかわかっているのか！」

「もちろん。どっかの国の王女様を人質に身代金の要求している」

「それが分かっていて、無礼だとは思わんのか！」

女は目線で蒼慈を殺すかの如く睨みつけるが、蒼慈はそれを気にもせずさらりと流す。

「・・・これが終わったら貴様の命はないぞ」

女はドスの効いた声を出す。

「これが無事に終わればな」

「っ！」

今にも蒼慈に走りだそうとしている女に蒼慈はニヤニヤと笑みを浮かべる。

24話

「さあ、どうする？どうする？」

ニヤニヤと笑みが絶えない蒼慈。

「貴様・・・何が目的だ？」

「こいつの命」

「なっ!？」

「冗談だ」

「っ!！」

女は蒼慈にからかわれたことに怒りを覚え、蒼慈に殺気をより放つ。

「そんなに怒るなよ。美人な顔が台無しだぞ？」

「・・・ナメているのか？」

「どうだろうね。それよりその魔術師さん、変な動きしたらこいつ殺すよ？」

その言葉に無詠唱魔法を放とうとしていた男がビクリと反応した。

…こ、こいつ一体何者なんだ!？普通無詠唱魔法には気付かないだ

ろ、気付かれない自信もあったのに・・・

「それに、俺にはまだ仲間がいるんだぜ？」

そう言っつて蒼慈は目線を華奈恵達の方へと向ける。
その目線の先を追って、女はさらに顔を歪める。

「何が目的だ」

女はもう一度同じセリフを蒼慈に言った。

「俺の目的は一つ。この王都にいる預言者の身柄だ」

「!?!?・・・理由を言え」

「・・・」

「理由を言え！」

「お前さ、一応この状況わかる？」

「分かっている！だから聞いているのだ！」

「・・・はあく。お前が俺の機嫌を損ねれば、この女を殺すとは考えないのか？」

「っ!?!?」

女は蒼慈の言葉に固まった。

「『言え』じゃないだろ？『教えてください、お願いします』だろ？」

「……お、教えてください、お願い……します」

目線で蒼慈を殺すかの如く女は蒼慈を睨み付ける。

「嫌っぷ」

「……き、貴様!!!!」

女は真っ赤になって怒鳴る。

「はいはい。動くなつての、こいつ殺すよ?」

「くっ……」

「理由を言つてそれでそっちが納得する内容なら、こんなことしな
いってば」

「……今代の預言者は今、床に伏せておられる」

「だから?」

「だから、だと!?ここに連れて来れば死ぬかもしれないんだぞ!」

「んなもん知らん。用が済めば死のうとどうなろうと俺には関係ない」

「何処までも卑劣な奴め!」

「口調には気をつけろよ？こいつの首が飛ぶぞ。それとも俺が傷つけないとでも思ってるのか？指を一本つつ切り落としてやろうか？」

「っ！」

「とっとなここにつれて来い。こいつとどちらの命が大切なんだ？」

「き、貴様……」

「まずは小指からかな？」

「ま、待て！あ、いや、待って……ください」

尻すぼみになり、最後の方は声が小さくなっていて聞こえづらい。

「聞こえない」

「……待ってください。お願いします」

「自分の立場を理解するのが遅いな。こんな奴が王女を守っているとは、この国も終わりだな」

「くっ……」

女は何も言い返せない。

下手に言い返せば蒼慈の機嫌を損ねることが分かっているのだ。

「今から10分だけ待ってやるよ、預言者をとっと連れて来い」

「じゅ、10分!?それはいくらんでも無理だ!早くてもここから
王城まで30分は掛かる!」

さっきまで黙っていた魔術師の男の方が蒼慈に向かって言った。

「そうか、なら10分おきにこの女の指を一本づつ切り落としてい
こうか」

「なっ!?!」

「足も合わせて合計10本。1時間40分も時間があるじゃないか」

「ま、待ってくれ!それは流石に無理と言うものがっ」

「黙れ。早く行け、今から・・・スタート!」

「え、ちょ、待ってくれ!」

「もう始まっているぞ?右手の小指がなくなるまで後9分53秒」

「「っ!?!」」

そう蒼慈が言うのを聞くと男と女は同時に王城の方へと走ってい
った。

「いやはや、早いねえ」

ははは、とこの場に似合わない笑みを浮かべる蒼慈。

「じゃあ、ここで待ちますかあ」

そう言って蒼慈は抱えていた女を離した。
その瞬間、その女が走り出すが、

「あう！」

何もないところからゴンという音がして、走り出した女が額を抑えてしゃがみ込む。

「あ、言うの忘れてた。結界張ってあるから」

「くう」

女は蒼慈を睨み付ける。

「そんなに痛かったか？」

そう言って蒼慈は女の方へと近寄る。

「蒼慈。もうやめといたら？その子相当ビビってるわよ？」

「流石にやりすぎなんじゃない？」

華奈恵とフレールが蒼慈に言った。

その横で蒼慈に冷ややかな目線を送るセリーヌがいた。

「どうせならちゃんと相談してもらえませんか？」

「あの時思いついたんだもん、仕方ないっしょ？」

その言葉に蒼慈と座り込む女以外の皆がため息をついた。

「それに、こんなことしたらこの国にいらなくなるわよ？」

「そのための『馬車』だよ」

華奈恵の非難を込めた言葉に蒼慈がそう返す。

それを聞いて皆が一瞬固まり、次の瞬間ため息をついた。

「それに、“魔王”倒せば俺は元の世界に帰るし、この国関係ないじゃん？」

“元の世界”という言葉に座り込んでいる女がピクリと反応したが、誰もそのことには気付かなかった。

「残された私達はどうなるんです？」

セリーヌが蒼慈に問う。

「一緒にこっち来る？」

軽い調子で蒼慈が答える。

その言葉にさらにため息を皆がつく。

「なんか・・・ねえ」

「はあ・・・ねえ」

「確かに・・・ねえ」

華奈恵達は互いに何か納得したようだった。

「まさかこの国に喧嘩売るとは思わなかった」

そう言ってフレールはドサリと地面に座る。

「国に喧嘩売るような奴にフレールは喧嘩を売ったんだよ」

はははと笑いながら蒼慈はフレールに言った。
その言葉にフレールは少し顔を歪める。

「あれは悪かったわよ。まさかアレでキレるとは思わなくて」

「俺はアレでしかキレないけどな」

「今度から気をつけるわよ。次は無さそうだし」

「賢明な判断だな」

蒼慈はまた、はははと笑ながら答える。

そんな蒼慈達をありえない物でも見るかのような目で女は見っていた。

「何？ そんな目でこっち見てさ・・・」

蒼慈かそう問いかけると女はビクツと怯えたような反応をした。

「ああ、なるほど。そうか・・・」

蒼慈はニヤリと笑みを浮かべる。

その顔を見て華奈恵達は額を押さえながらため息をついた。

「もう10分経ったのか」

25話(前書き)

なんか駄文すぎて話の展開がアレですけど・・・これが限界なんです(おい

25話

「ではでは、指切ろっか♪」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら蒼慈は怯える女の方へと歩いていく。

「・・・い、いやあ・・・いやあ!! 来ないで!!」

「おいおい、一国の王女様ともあろう御方がこの程度でそんなに泣き喚いちゃダメだろ」

はははと蒼慈は笑う。

そんな蒼慈を見て女は思う。

…こ、この人は狂ってる。このままじゃ殺されちゃう! 誰か、誰か助けて!

「助けなんてこないよ」

ビクッ。蒼慈の言葉に女は肩を震わせる。

「そうだ、いいこと思いついた♪」

ニヤリとまた笑みを浮かべる蒼慈。

「俺の質問に答えてくれたら、指を切るのはやめてあげるよ」

「え・・・本当!？」

蒼慈の言葉に食らい付く女。

彼女は普段は城の兵士に守られ、その上さっきまで彼女といった護衛の二人は中でもかなりの腕であるため、彼女は町に出るときも彼ら二人の護衛だけでよかった。

そのため今まで苦労したことはなく、よく王族の子供が感じるような窮屈さもあまり感じていなかった。

だから、このような状況に陥った時、彼女は初めて恐怖を感じ、自分が王族、つまりは身一つで交渉になり得るものだということを改めて理解していた。

恐怖、つまりは目の前にいる自分よりも若い男が自分の指を切るということから逃れられるのならば、今の彼女にとってはこれよりも嬉しいことはなかった。

「うん。本当。だからさ、いくつかの質問に答えてもらってもいい？」

「わ、私に答えられる範囲なら・・・」

「よし、じゃあ、まずはね・・・」

何かしら考えるように蒼慈は腕を組む。

ちなみに、華奈恵達3人は木陰で何やら話していた。

「とりあえずは名前教えて」

ニコリと、さっきまでのとは違った笑みを蒼慈は浮かべる。

「え？・・・名前？」

「うん。名前」

「えっと、フレア・ヘルゼス・クリスパニアです」

「歳はいくつ？」

「今年で18歳です」

「俺より2つ上か・・・趣味は？」

「しゅ、趣味？」

「趣味」

「編み物・・・かな？」

「ほほう。好きな物は？」

「可愛いものとか・・・」

フレアは混乱していた。

目の前にいる男の口ぶりからして、きっと国家機密に関わるようなことを聞かれるのだろうとばかり思っていた。

フレアの歳を聞いて自分よりも2つ上だと言った。

つまり目の前の男は16歳。

たった16歳。それなのにフレアの護衛に付いていた優秀な城の兵士をいとも簡単に負かした。

剣の腕はこの国で5本の指に入るほどの強さを持つエレナ、そして魔法の詠唱の早さ、威力が共に高く、何よりも無詠唱でもかなりの威力の魔法を使えるクレイ。

あっさり倒されてしまったが、最初に蒼慈と話をしていた使用人のリンセスは暗部に属していて、決して弱いわけではない。

それなのに、この男が自分に聞いてくることは国とは全く関係なく、フレア個人に対する質問ばかりだった。

…意図がつかめない。この人は一体何を考えてるの？

「フムフム、じゃあ次は・・・」

「いい加減にしてください！」

「どしたの？」

蒼慈はいきなり大声を出したフレアに対して驚かずに冷静に尋ねる。

「あなたは・・・一体なにをっ」

「あ、わかった」

『一体何を考えているのですか！？』

蒼慈は安易にフレアが言いたいことがわかった。

彼女にとって自分は得体の知れない男なのだろう。

この歳でこれほどまでの強さ、そして脅すような残虐とも思える性格。

なのに、蒼慈がフレアにする質問にはそのような悪意が全くない。

…混乱してるんだろうなあ・・・

内心笑いながらも蒼慈は言う。

「俺の自己紹介してなかったね。さっきから不機嫌なのはソレか。そうだよ、君のことばっか聞いて、俺のことは話してないもんね」

「え・・・ちがつ」

「いって分かってるって」

：違う！何がわかってるよ！誰もあなたのことなんて知りたくないわ！

心の中で蒼慈に怒鳴りながら表情には出さないフレア。

「俺の名前は蒼慈・神城。歳は16歳。趣味はネットゲーム・・・あ、わかんないか」

ヘラヘラと笑いながら蒼慈は自分の自己紹介をしていく。

「・・・そんでもって、好きな武器は刀で・・・」

「もういいです！そんなことは聞いてません！」

「え？でもまだ初体験のこと話してないんだけど、これ重要じゃない？」

「そんなのどうでもいいです！」

「あ、そっかそっか。華奈恵！フレール！セリーヌ！」

蒼慈は木陰で話している3人の名を呼ぶ。

「なんかね、フレアちゃん18歳が3人のことも知りたいんだってさ」

「はあ！？誰がいつ！そんなことを言ったんですか！てか何で“ちゃん”！？」

「わかるさ、顔に書いてる」

ビシッと親指をフレアに向けて立てる蒼慈。

「じゃあ、私から」

こちらに歩いてきた3人の中からセリーヌが言った。

「ちょ、だから・・・」

「私はセリーヌ・ニルフェール、19歳です。あなたより1つ年上だから、セリーヌお姉ちゃんと呼んでねっ♪」

ニコリと笑いセリーヌはフレアに自己紹介をした。

「私はフレール・ニルフェール、18歳。セリーヌの妹よ。タメだけど、私の方が精神年齢高いから敬語使ってね」

「だから別にあなた達のことなんて・・・」

「華奈恵・森咲。21歳。私のことはお姉さまと呼びなさい」

「なんで!？」

若干1名納得してない人がいるけれど、それはあえて放置の方向でいくとして。

「これでいい？」

「よくない！」

蒼慈の言葉に瞬間的に反応するフレア。

「あなた達は・・・一体何が目的でこんなことを！」

「世界征服」

「へ？」

「というのは冗談でこちらとしても色々事情があってね」

「くっ・・・その事情は、一国の王女を人質にとってまでする必要があるのでですか？こんなことがあったと父が聞けば、あなた達がただでは済みませんよ？」

からかわれたことで若干顔を怒りで赤く染めながらフレアは言った。

「はははっ、ただでは済まないか・・・まあ、こっちが本気なれば国一つ滅ぼすなんて造作もないんだけどねえ」

蒼慈のその言葉に華奈恵以外の者が驚く。

フレアだけでなく、セリーヌにしてもフレールにしても蒼慈の力をほとんど知らない。

しかし、蒼慈はフレールと戦った時に自分がどれほど力を持っているのか知った。

華奈恵はそのことを元より知っていた。

「そ、それは本気で言ってるの？」

声を震わせながらフレアは聞く。

「どうだろうね」

また蒼慈は、はははと笑いながら言った
そんな時、

「フレア様！」

…やっと来たか・・・

26話

「遅かったねえ」

「き、貴様、フレア様に傷一つでも付けててみる、殺すぞ！」

「あらあら、殺すだなんて物騒だなあ。せっかく指を切らないでいてあげたのに」

蒼慈達の所へはさっきの護衛と思われた兵2人と、預言者らしき人物、そして小隊一つだった。

「貴様の言うことなど信じれるものか！いくぞ！」

フレアの護衛をしていた剣を持った女が叫ぶと同時に傍にいた小隊の者が動いた。

魔法使い達は1歩下がり詠唱を唱えだす。

そして、騎士達は蒼慈の方へと突っ込んできた。
その時、

「やめなさい！」

凜とした声がある場に響く。

その声に反応して、蒼慈達を攻撃しようとしていた者達が固まる。
声の主は小隊の者達の後ろから歩いてきていた。

「ほう、あなたが預言者か？」

「貴様、ユクネイル様に向かってなんて口の聞き方を！」

騎士の1人が言った。

「いいのです・・・私に用があるらしいですね」

預言者らしき人物は手で騎士を制して蒼慈に尋ねた。

「まあね、単刀直入に言うけどいい？」

「私はなんせ病の身ですから、あまりここに長居はしたくないので
そちらの方が嬉しいですね」

「そっか、なら言わせてもらおう。“魔王”は何処だ？」

「・・・」

蒼慈の言葉に預言者が固まった。

流石に予想してもいなかったのだろう。

周りの兵士達は預言者とは違い、何がなんだかわからないという
表情だった。

預言者は白髪で歳も40後半くらいのように見える。

そして顔色も悪い。病の身というのは嘘ではないのだろう。

「何故そのようなことをお聞きなさるので？」

静かな声で、そして拒絶の意もこめて彼女は言った。

「俺は“魔王”を倒しにこの“世界”に来た」

蒼慈の言葉に周りの兵士達は呆れた顔をする。

彼らの心情としては“こいつ頭がおかしいんだな”と言ったころだ。

「・・・」

預言者は無言。

数秒、彼女にとっては数時間に感じたかもしれないが彼女は口を開いた。

「あなたはもしかして・・・“契約者”ですか？」

「当たたり♪」

蒼慈が肯定すると預言者の顔が目に見えて変わる。

「ユクネイル様、この賊はどうやら頭がおかしいようです。我々こいつを討伐する命令を・・・ユクネイル様？」

「エレナ・・・至急王に報告しなさい」

「は？ど、どうしたのです？」

「王に伝えなさい。“契約者が現われた”と」

「契約者？」

「いいから行きなさい！そして、クレイ」

ユクネイルに言われエレナは1人で城の方へと戻っていった。

「はっ！」

クレイと呼ばれた魔法使いが反応した。

「この者達を客人として城に連れ行きなさい」

「きゃ、客人として、ですか？」

「客人としてです。どんな小さなことでも粗相のないように」

「は、はい！了解しました！」

そういうとクレイは蒼慈達の方に走ってきた。

そして、ユクネイルはそのまま数人の者達と一緒に城へと戻っていった。

「ユクネイル様のご好意に感謝しろ。今からお前達を客人として城に案内する」

そうクレイは言うだけ言って、フレアの元へと駆け寄った。

「大丈夫ですか！？フレア様！」

「ええ、大丈夫です」

「あいつらに何かされなかったのですか！？」

「特に・・・何も」

「本当ですか！？」

「ちょっと、いくらなんでも心配し過ぎじゃないかしら？」

華奈恵が、フレアが無事かしきりに確認するクレイに言った。

「貴様等が指を切るなどと言ったせいだろ！」

「私は言っていないわよ」

「っ・・・屁理屈を・・・」

「それに私達はお話してただけだしね、ねえフレア？」

「貴様っ、フレア様になんて口の利き方を！」

「いいのよ、この人達には何を言っても無駄だから」

「おお、流石フレアっち。わかってるじゃん」

「誰がフレアっちよ！」

そんな蒼慈達とフレアの会話にクレイは訳がわからない、という
ような顔をしていた。

「そんなことより、あそこに倒れてる、正確には俺が倒したんだが、
あの人ほっといていいの？」

蒼慈がそう指差しながら言うとかレイはその指の指す方向を見て、

「り、リンセス！・・・やべ、忘れた！」

「まあ、影薄そうだもんね」

「そうなんだよ・・・って、貴様には関係ないことだ！」

微妙にノリツツコミしながらクレイはリンセスと呼んだ男に走りよっていった。

「じゃ、そろそろ俺達も移動したいんだけど・・・」

チラリと兵士の方へと目を向ける。

すると兵士から殺意の籠った視線だけが帰ってきた。

「ありゃ？嫌われちゃった？」

「当たり前でしょ、使えてる主人にあんなことされて嫌わない方がおかしいじゃない」

さっきまで黙っていたフレールが言った。

「そりゃそうか」

「そんなことよりソウジさん」

「ん？」

セリーヌが呼んだので蒼慈はそちらへと顔を向ける。

「“契約者”ってなんですか？」

「さあ？詳しいことは華奈恵に聞いて。俺は自分が“契約者”って知ってるけど、それがどういうことなのかは知らない」

「そうですか、じゃあ一つだけ聞かせてください。あなたはこうなることがわかってたんですか？」

「いや、全然。全く持って予想外だけど？」

その言葉にセリーヌ達は固まる。

「そ、そうですか・・・」

「ま、それよりも城へ行こう。なんか知らんけど客人扱いだし、“魔王”のこと聞けてないし」

そう言って蒼慈はフレアとクレイ達を置いて城があるだろうと思われる方向へと足を向けた。

それに華奈恵達も続く。

27話

「ほほー、やっぱでっかいね」

蒼慈達は途中から兵士達に案内されて城の中にいた。

「そうね。流石は王城ね」

先導する使用人の女性の後ろを4人は城の中を見ながら付いていった。

「あれ？華奈恵が騒がないなんて珍しいね」

「っ！？べ、別にいつも騒いでるわけじゃないでしょ！？」

顔を赤くさせながら華奈恵は言った。

「そういうことにしといてあげるよ」

今だ反論する華奈恵を笑いながらスルーして蒼慈はもう一度城の構造に目を向ける。

流石に王城と言うだけあってかなり良い造りだと思われる。

壁はほとんどが白で統一されており、汚れの一切もない。

床の方にも汚れはなく、普段から使用人が掃除しているのがよくわかる。

「で、俺らを何処に連れてくわけ？」

蒼慈は先導している使用人らしき女性に声を掛けた。

使用人と言ってもその仕草や立ち振る舞いからわかるが、多分暗部の者だろうと蒼慈は思った。

何より隙がない。そして、フレアを人質にした時に最初に倒した執事のような男と雰囲気似ていた。

「客人としておもてなしをするようにと言われておりますが、すぐに王との謁見がありますので、それまでお待ちしてもらおうお部屋に向かっているのですが・・・何かお気に召さないようなことでもありましたでしょうか？」

あくまで言い方は丁寧だが、その端々に敵意を蒼慈は感じた。

それもそうだろう。

自らが使えている主をあのように扱われて、その上客人として丁寧に扱うなどと、彼ら使用人や兵士にとってはこの上ない屈辱なのだろうから。

「いや、別に。ただ、さっきから監視の目がいたいな、と」

ニヤリと蒼慈は笑う。

「っ!？」

一瞬驚きはしたが、すぐに目の前の使用人は無表情を装う。

「そうですか。それは失礼しました。ご不快なようでしたらすぐに下げさせますが」

蒼慈達を監視しているの者はもちろん王の命令であり、それらの者は王直属であるためトップレベルの実力がある。

簡単にいることがバレていいはずがない。

「いや、いいよ。どうせなんだかんだ言っても誰かが監視するんだろうし」

蒼慈の言った皮肉にピクリとも反応せず、あくまで無表情のまま使用人は再び前を向いて歩き出す。

そして、城内に入ってから5分ほど歩いただろうか、ある扉の前に着いた。

「こちらのお部屋でお待ち下さい」

そう言ってさっきの使用人は頭を下げて去って行った。

「はあ。ソウジのせいで国に目をつけられちゃったじゃん」

蒼慈達が案内された部屋はそれなりにいい部屋だった。

部屋には真ん中に机があり、その周りに椅子がいくつか並んでいた。

フレールはその1つにドサツと座った。

「いいじゃん。あの様子からして、俺の予想は的中したと見た」

蒼慈はまたもやニヤリと笑みを浮かべる。

「また良からぬことを考えているんですか？」

セリーヌはフレールの隣の椅子に座った。

「またってなんだよ、またって」

そう言つて蒼慈はちょうどセリーヌの向かいに座る。

「ついさっき自分がしたこと忘れたのかしら？」

最後に華奈恵が蒼慈とセリーヌの間に座り、机を丸く囲む形で全員が座った。

「まあ、あれは敵が弱すぎたというかなんというか」

「・・・もつとまともな人だと思ってたんだけど？」

「え？俺まともじゃない？」

「自覚ないのかしら？」

「だって華奈恵達も止めなかったし、むしろ乗ってたじゃん」

「気づいた時にはあの状況。止めるなんて無理よ」

呆れたように華奈恵は言う。

「だってさ、ああでもしないと預言者に会えないじゃん？」

「もつとやりようがあったと思うんだけど？」

フレールも呆れたように言った。

「だってだよ？たぶん預言者の人さ王族か近衛兵しか会うことできないと思うんだけど」

「そんなことないんじゃないの？」

「だって予言だよ？ 予言。勝手に漏れていい情報じゃないでしょ」

「まあ・・・確かに。でも強引すぎない？」

「めんどくさいんだもん。俺は帰ればいいんだよ」

「あなたはそうかもしれないけど・・・」

蒼慈の向かいに座っているセリーヌが言った。

「だから一緒にこっちくればいいじゃん。住まいと金なら華奈恵がなんとかしてくれるらしいし」

「私の家、そんなにお金ないわよ？」

「・・・うそん」

予想外だ、という思いを顔一面に表しながら蒼慈は呟いた。

「まあ、最悪どっかに隠れて住むけどさ。そんなことより、今度は何をしようって言うの？」

フレールは言った。

「えっとね・・・と、その前に、華奈恵」

蒼慈は華奈恵に目配りだけする。

「了解・・・シャウト」

途端部屋を魔力が覆う。

外部に内部の音を漏らさないための魔法だ。

「サンキュ」

さも当然のことのように蒼慈は華奈恵にお礼を言うが、セリーヌ達は驚きを隠せないようだった。

「え？どうやったんですか!？」

「普通に音だけを遮断する結界を張ったのよ」

華奈恵達の言う普通はこの世界の普通ではないのだと、あらためて2人は思った。

「それじゃ、俺の計画？ていうかこれから起こることの予想話していい?」

そう言って蒼慈は新しいイタズラを思いついた子供のような表情で話し始めた。

28話（前書き）

遅くなってスイマセン^^；

28話

蒼慈達は部屋に案内してきた使用人に案内され、王の元へと向かっていった。

「ここ王ってさ、どんな人なの？」

蒼慈は彼らを先導している使用人に尋ねる。

「そんなことを聞いてどうされるのですか？」

振り返ることも立ち止まることもせずただ答える使用人の女性。

「別になんでもないけど・・・冷たいね。会ってこれだけの短期間でこれほど嫌われたのは始めてだよ」

「嫌ってなどおりません。これが普通です。不快ですか？」

「いんや。それよりも王さん、ちゃんと腕の立つ兵士に守られてるといいんだけどねー」

蒼慈のその言葉に使用人がギロリと振り返った。

「もし、もし王に何かしてみなさい。殺しますよ」

さっきまで丁寧な言葉づかいとはまったく違う氷のように冷たい声。

「あらあら。もはや正体を隠す気なんてなくなったのか？」

ニヤリと笑みを浮かべる蒼慈。

「・・・」

立ち止まり蒼慈を睨み付ける使用人。

蒼慈はその威嚇を特に気にした様子もなく笑みを絶やさない。

「いつまで立ち止まってるのかしら？早く案内して欲しいんだけど」

蒼慈の横から華奈恵が使用人に言った。

「・・・」

華奈恵に言われて再び歩き始める使用人。

「ここで王がお待ちになっています」

暫く歩いたのち、おる部屋の前で止まった。

「・・・」

使用人の女性は蒼慈が部屋に入るのをジッと睨み付けながら去っていった。

部屋の構造はさっき待たされた部屋とは比べ物にならないくらいの豪華さが伺えた。

部屋の中央にはある程度の机があり、その向こう側に王が蒼慈達を出迎える形で座って待っていた。

周りには重鎮と思われる者たちが何名か見受けられる。

「我は、クリスパニア王国、第8代国王グレゴール2世だ」

真っ先に王が立ち上がり名乗った。

「俺はソウジ・カミシロ」

「私はカナエ・モリサキ。“導き手”です」

蒼慈に続いて華奈恵が名乗る。

…“導き手”か・・・なんかまた訳のわからん単語が・・・

「私はセリーヌ・ニルフェールです」

そう言ってセリーヌは王の前に跪く。

「妹のフレールです」

それに続くようにフレールも王の前に跪く。

「ふむ・・・とりあえず座ってくれ」

王の言葉に従い蒼慈達は席に着く。

「それで、お前達のうちの誰が“契約者”だ？」

唐突に王は蒼慈達に尋ねる。

「彼です」

そう言つて華奈恵は蒼慈の方を見る。

「・・・幼いな。ソウジと言ったか、何歳だ？」

王の物言いにピクリと蒼慈の眉が動いた。

「16だ。“契約者”に年齢が関係あるのか？」

蒼慈の言い方に周りの重鎮達が蒼慈に厳しい視線を向ける。

「そんなことより単刀直入に聞くが、“魔王”は何処だ？」

「それが人に者を尋ねる態度か、親の顔が見てみたいものだ・・・
小僧」

流石王と言ったところか、纏うオーラがこの場を支配した。

「小僧か・・・何か勘違いしてるようだけど、貴様らは・・・俺達
と対等な関係が持てると思ってるのか？」

王のオーラに一步も引く様子のない蒼慈。

「ほう・・・」

「俺がその気になれば国1つ潰すことなんて、造作もない・・・ちなみに俺の親の顔が見たいならこの場で殺してやるよ」

王と蒼慈がその場で睨み合う。

その沈黙に周りの者達にも緊張が走る。

そして、その沈黙を破ったのは王だった。

「・・・魔王の居場所だったか？」

「ああ。話が早くて助かる」

「悪いが今はわからん」

「何？」

「予言では魔王が私の代で現れるということしかわからなかったのだ」

「そのわりには余裕だな」

「焦っても仕方のないことだ。時が来ればわかるだろう」

「時が来る、ねえ・・・明日にでも“魔王”が出てきてもおかしくないってのに」

「それこそ神のみが知ることだ」

「神か、そんないもしない物を一国の王が信じてるとは、この国のお先は真っ暗だな」

セリフの最後に（笑）でもついてそうな蒼慈の発言にまたもや場の空気が悪くなる。

しかし、誰も蒼慈に対して何も言わない。

いや、言えないと言った方が正しい。

彼らは知っているのだ。蒼慈が何者か、“契約者”というものがどういうものなのか。

本来、伝承によると何処からか現れる“契約者”は、温厚な性格で自分の命を捨てても周りの者を守ろうとする勇氣あるもの、まさに勇者。そして“契約者”の力は絶大な物で一人でドラゴンを倒すことも出来るほどだと言い伝えられている。しかし、

「果たしてあなたは神の存在を冒瀆するほどの力をお持ちになっているのですか？」

王の真後ろに控えていた初老の男が一步前に進み出る。

「代々言い伝えられている伝承では、“契約者”には国一つ滅ぼすほどの力はないと心得ておりますが？」

この雰囲気の中で堂々と発言してみせる。

「へえ、そうなんだ。あんた名前は？」

「これは失礼。私はレイノール・クロート。宰相を務めさせていただいております」

王の真横まで出てきたレイノールと名乗る男は、白髪で身長は170センチを超えているくらいで何処か王に似た威厳を感じさせる。そして、口元と顎に生えた髭は宰相と言うよりも執事を思わせる。

「宰相か・・・レイノールとか言ったね」

蒼慈は王よりもそちらの方に興味を向ける。

「はい」

「今、伝承とか言ったけどソレ、聞かせてもらえるかな？」

王の時とは違う、高圧的な物言いではない言い方で蒼慈は言う。

「私でよければ話させてもらいましょう」

宰相はチラリと確認を取るかのように王の方を見る。

それに王は頷いて答える。

それを見た宰相は話し始める。

この国と“契約者”との関係を。

28話（後書き）

書いた後で思ったけど・・・王族とかの名前ってどんな構成か理解してないやへへ；

29話

ある所に偉大なる人の王が治める国があった。

その国は他国に比べ平和で、豊かであった。

しかし、その平和を良しとしない者がいた。

それは人とは決して相容れぬことのない魔族の王だった。

魔族の王、魔王はその平和を壊し、その富を得るためにその国へと赴くことを決めた。

魔族は本来いる、人間のいる空間とは別の空間から突如現れ、その国を滅ぼさんとした。

魔族は人間よりも遥かに勝る。

猛者の剣を体で弾き、賢者の魔法を腕を振って消し飛ばす。

1日も経たぬうちに国の半分は黒く染まった。

誰もが絶望した。怯えた。

愛する者を守ることにために魔族の前に立つ者。

突然のことで今だに事実を受け入れることの出来ぬ者。

皆、皆散っていく。

国の全てが黒く染まろうとした時。

突如現れた者がいた。

魔族を退けるほどの力を持つ者。

彼は魔族を倒し、その彼の剣は魔族の王の喉元までも迫る。

2つの大きな力がぶつかり合う。

3日3晩の戦いの後、彼らは魔王を打ち倒した。

皆が彼を勇者だと、英雄だと褒め称える。

彼の傍で彼を支えていた者達も褒め立てる。

彼は自らのことを英雄ではなく、“契約者”だと名乗った。

彼は王に国の復興を無償で手伝うと申し出た。

彼の優しさに触れ、皆が彼を称える。

そして、その国は以前にも増して、より豊かになった。

「このような感じの物です。私もあまり詳しくは知りませんが」

そう言って宰相は話し終えた。

「へえ・・・そんな伝承があったのか」

少し納得したような顔を蒼慈はした。

「その話だと、十分に国を滅ぼしてもおかしくないと思うんだけど？」

「その伝承はこの国では絵本のようになっているのですが、その中にある“契約者”の方々の力は魔族を倒せると言っても、意図も簡単というわけではないのです」

「絵本か・・・そりゃまた、なんとも」

蒼慈は若干馬鹿にするように笑う。

「・・・“契約者”の方はこの国の兵士と共に戦い、魔族を倒し、魔王を倒したとなっております」

「なるほど。つまりは一人で魔王を倒すほどの力はないと、この国の者が総出を挙げればその“契約者”と同等の力、もしくはそれ以上あると？」

「はい。仮にそうでなくても国を滅ぼすほどの力はないと考えております」

蒼慈はフムフムと頷く。

「じゃあ、俺はその伝承の“契約者”とは違うのかも知れない」

蒼慈はジッとその宰相を見つめる。

「……紛いなりにも自分の力だ。どれくらいのものかくらい分かる。俺が本気で片手を振ればこの王国の少なくとも4分の1は一瞬で焦土と化す」

何の躊躇いもなく蒼慈は言い切る。

その言葉を聞いて皆が固まる。

王は蒼慈の方を見てから、華奈恵へと真偽を確かめるために視線を移す。

その視線を受けて華奈恵は口を開いた。

「私の一族は代々“導き手”をしています。我々の役目は崩れそうな世界へと“契約者”なる者を連れて行くことです。ですので、代々の“契約者”の資料もございます」

華奈恵はそこで一度言葉を切り、蒼慈、王へと視線を流す。

「……彼は、蒼慈は、その中で初めて異例なまでの大きな力を持っています」

その言葉に王達やフレール達だけでなく蒼慈も驚いた顔をした。

蒼慈にとっても初めて聞く話だったからだ。

「本来“契約者”とは、心の正の力を糧にしています。それゆえにさっき言われた伝承に残る“契約者”も英雄や勇者となりえる性格をしています。しかし・・・」

なんとなく華奈恵の言いたいことが分かるのだろう。

蒼慈はフッと目線を華奈恵から外した。

「彼の力は正の力というよりはむしろ・・・」

「負の力か？」

華奈恵の方を見ずに蒼慈が華奈恵の言葉を継ぐ。

「・・・ええ」

「なるほどな。それゆえのこの力か・・・」

蒼慈は自分の手のひらを見つめながら手を開いたり閉じたりしている。

「だから、彼に国を滅ぼす力があつたとしてもおかしくはない」

華奈恵は王に対してそう言い切った。

「・・・ふむ。少しばかりお主を侮っていたようだ。さっきのことは詫びよう」

そう言って王は立ち上がり蒼慈に頭を下げた。

国の王が頭を下げる。

これがどれほど稀でどれほど大きな意味をなすのか、今の蒼慈には分からないだろう。

「気が変わるのが早いな。予想以上に力があるとわかれば、今度は媚を売るか？」

蒼慈は王に挑発的な言葉を投げかける。

「我はこの国の皆の命を背負っているのだ。仕方のないことだろう」

コロツと意見を変える王。

「おいおい・・・王がこんなでいいのかよ」

「変に自らの誇りに執着し、それで守るべき物を自ら壊してしまつては意味がないだろう」

「ほう・・・なかなか出来た王じゃないか」

ニヤリと蒼慈は笑みを浮かべ、それに答えるように王も笑みを浮かべる。

「“魔王”が現れた時は力を貸してやる。その代わりと言っちゃ割りに合わないが、ここで衣食住の保障をしてくれ。余裕と言えどあまりモンスターと戦いたいとは思わないんだよ」

フツと笑みを王は零す。

「それぐらいで国が救われるなら安いこと極まりない。最高級の御

もてなしをしよう」

それを聞いて満足げな顔をする蒼慈。

「最初からそう言ってればいいものを」

はぁ、と大げさに呆れたような態度をとる。

それを見ながら、それに対して注意できない王の臣下達はぐっと唇を噛んでいた。

30話

目の前には王がいる。

この国の国民であるから王の前では忠誠の意として膝を折る。

仮にもこの国の国民でなかったとしても、これほどのオーラを持った人物が目の前にいれば少なからず気後れしてしまうだろう。

なのに、

「小僧か・・・何か勘違いしてるようだけど、貴様らは・・・俺達と対等な関係が持てると思ってるのか？」

こんな発言を王にしたのは彼が初めてではないだろうかと思う。

彼が部屋に入った時、王自らが先に挨拶をなさった。

つまりは、王自身が彼らよりも自ら謙る相手と判断したということ。

しかし、それはあくまで形の上でのみ。

“勇者”“契約者”そう呼ばれる者は、この国にとっては“救世主”なのだ。

それ故に敬意と期待を込めてこのような行動を取る。

「ほう・・・」

「俺がその気になれば国1つ潰すことなんて、造作もない・・・ちなみに俺の親の顔が見たいならこの場で殺してやるよ」

目の前に堂々と座っている青年、いやまだ少年だろう。

さっき16歳だと言っていた。

そして、まだ幼さが残る顔つきをしている。

しゃべらずにただ座っているだけなら、どちらかというと大人し

そんな雰囲気がある。

そんな見た目から思わせる弱気な態度ではなく、彼は王に対して一歩も引かず、むしろ確実に圧倒する態度をとっている。

「・・・魔王の居場所だったか？」

彼らの間に訪れた沈黙を破ったのは王だった。

彼は王の“魔王”に対する姿勢に少しばかり苛立ちを感じるような素振りをする。

「そのわりには余裕だな」

王に対して見下したような態度だ。

「焦っても仕方のないことだ。時が来ればわかるだろう」

視線を彼から離し、彼に付いてきた3人の女性に目を向ける。

どの女性も誰もが美人と認めるような顔をしている。

その中のカナエと名乗った一番年長であろう女性は自らを“導き手”と名乗っていた。

自らの役目をきっちり理解しているからだろうか、彼女の態度は堂々としているものがあつた。

さらに横に目を向けるとそこには姉妹である二人の女性がいた。

彼女達はこの国の者だろう。王を見て跪いたのが何よりの証拠。

姉の方は無表情を保とうとしているが、緊張しているのが見て取れた。

時折、少年の方を不安気味にチラチラと見ている。

そして、妹の方だが、王を前にして緊張しすぎたのだろうか、完全に固まっていた。

「時が来る、ねえ・・・明日にでも“魔王”が出てきてもおかしくないってのに」

考え事をしている内に彼らの会話は進んでいく。

「それこそ神のみが知ることだ」

わが国には国家宗教という物が存在しているわけではないが、この国にも宗教は存在する。

王自体は形の上だけだが、私はある宗教に属している。
紛いなりにも神を信仰している。

「神か、そんないもしない物を一国の王が信じてるとは、この国のお先は真っ暗だな」

まるで王を、いやこの国全体を馬鹿にしたような態度で目の前の少年は言った。

おそらくこの少年は神を信仰しないのだろう。
そういう人もいる。それは普通のことだ。

しかし、だからといって他人が信じているであろう神を侮辱するのは果たして人間としてどうなのだろうか。

伝承に伝え聞く“契約者”は、他を尊重する人柄だと聞いていた。
それなのにこの少年はそれとは全く違う、むしろ真逆だと言える。
王の前ということもあったし、何より“契約者”に対してあまり失礼な態度を取るべきでないのはわかっている。

しかし、このような人を本当に信じてもいいのだろうか。
いくら力を持っているからといって、無敵ではないはず。

「果たしてあなたは神の存在を冒瀆するほどの力をお持ちになっているのですか？」

暫くは自重していたが、やはり我慢ならなかった。

私が一步出て、言葉を発したことに周りの重鎮達は驚きを隠せないようだった。

それと比べ、目の前の少年は驚いたというよりは興味が沸いた、みたいな表情をしている。

「代々言い伝えられている伝承では、“契約者”には国一つ滅ぼすほどの力はないと心得ておりますが？」

ギスギスした雰囲気だが、仮にも私はこの国のナンバー2。
堂々と言い放ってみせる。

「へえ、そうなんだ。あんた名前は？」

王とは違った言葉遣いで私に対して話しかける少年。

「これは失礼。私はレイノール・クロート。宰相を務めさせていた
だいております」

言葉遣いで少し苛立っているのがバレているかもしれないが、少年はそんなことは事は気にした風もなく軽い調子だ。

「宰相か・・・レイノールとか言ったね」

少年が王と向き合っていた体勢から完全にこちらに体を向ける。

「はい」

「今、伝承とか言ったけどソレ、聞かせてもらえるかな？」

さっきまでの王に対していた態度はどこへ行ったのか、かなり柔
らかい物言いだった。

そのことにいささか疑問を感じる。

「私でよければ話させてもらいましょう」

そう言いながら王に対して自分が話してもいいのか、という意を
込めて目線を送る。

そして、それを受けて王が頷いたのを確認してから私は話した。

1話

誰からも忘れ去られ、存在すら不確かな塔の中の一室から、窓の外を見つめる一つの影があった。

その影は微動にしない。

まるで自分は石像でもあるかのように。

——フワリ

風が舞う。

それに釣られてカーテンがフワリと浮き上がり、その影の顔がはつきりと見えた。

そこにいた者は幼い顔つきをした少年のようだ。

しかし、少年の横顔にはその歳相応の感情は伺えない。

彼は彼方を見つめる。

ただ遠くを見つめる。

それが、彼に許された、いや、彼だけに許されたこと。

そして、それは使命でもあり存在意義でもある。

ただ傍観するだけ。

その瞳に映る景色、人。

しかし、彼の瞳には感情は一切宿らない。

仕方のないことなのだ。

彼は、

——観測者なのだから。

「やっぱり王城は違うなあ。居心地良すぎ」

そう言っつていつもと変わらぬ様子で蒼慈は椅子にもたれ掛かる。

「確かにね……王族達とか上級貴族はこんな楽な暮らしをしてたなんて……」

その向かい側にある椅子に同じように持たれているフレール。彼らがこの国の王と話し合い、“魔王”が出てくるまでここにいることが決定してから2週間が過ぎようとしていた。

「こんな毎日ダラダラしてたら太っちゃいそうですね」

そう言っつて、窓から差し込む日の光を受けながらセリーヌは蒼慈の右隣の椅子に腰掛ける。

「嫌な事言わないで欲しいんだけど」

若干そのことを気にしているのか、顔を少しゆがめながら華奈恵が蒼慈に左隣の椅子に座った。

彼らは1人1つつつ部屋を与えられて、毎日のご飯も全てこの王城で世話になっている。

「やっぱ、ニートが一番だあ」

かなりダメ人間発言をしながら蒼慈は今度は机に突っ伏す。
毎日の生活のために特段何かする必要もなく、彼らはかなり気ま

まに過ぎていた。

しかし、そんな墮落的な楽な日常はそれほど長くは続かない。

——コンコン

少しばかり控えめな音が扉からなる。

「どぞぞ」

いまだに机に突っ伏したままの蒼慈が気だるげに答える。

「失礼します」

ガチャリ、と音を立てて誰かが部屋に入ってくる。

入ってきたのは侍女の女だった。

特段美人でもなく、特に何か特記することもない普通の侍女。

彼女は蒼慈達の接待、世話を主に王から命じられている。

「王が少し来てくれないか、と」

彼女のその言葉に怪訝な顔をしながら顔を上げる蒼慈。

彼が不思議に思うのも当然のことだった。

なぜならこの2週間、王の方から呼び出してくるなんてことは一度もなかったからだ。

「一体何の用？」

蒼慈は入ってきたその場所から一步も動かない侍女にそう尋ねる。別に彼女がその場から動かないのは、蒼慈達を恐れているからとかそういう理由ではない。

蒼慈はどちらかというところの2週間フレンドリーに話しかけて来ただろう。

しかし、どうやら王から何か言われてるようである程度の距離を保ったまま、それ以上親密になろうとはしなかった。

「用件は直接話す、とのことですよ」

いつも通りのクールななんの感情もないような声で彼女は告げる。蒼慈達は彼女のことを嫌ってなどいない。

華奈恵が町へ買い物に行く時は、どこに何が売っているのかなど色々と丁寧に説明をしていたし、フレールが軍の鍛錬を少し覗きたいと言えば、そのまま鍛錬所まで案内をしていた。手合わせしたいと言うと、流石に止められたみたいだが。

セリーヌの方も、よく紅茶の入れ方やお菓子の作り方など、女の子染みたことも教えてもらっていた。

「ふくん。どする？」

チラリと皆を見渡す蒼慈。

「もう城下町も見たいし、特に用事もないから別にいいんじゃないかしら？」

蒼慈に頷き返す華奈恵。

「そうですね」

華奈恵の向かいにいるセリーヌも頷く。

「うん？」

イマイチ何故皆がわざわざ確認を取っているのかわかっていないフレール。

王が直接話したいという時点で、ある程度厄介なことを言われるであろうことは容易に想像できた。

どちらかと言うと今日までの2週間、何もなかったという方が蒼慈にとっては不思議であった。

本来、“勇者”などと呼ばれる人種は、国から手厚く歓迎を受け、自由気ままに暮らし、そして魔王だけを倒す、なんていう者であるはずもない。

彼らは謂わば、“何でも屋”のような者だ。

地方に怪物が出た。しかし、軍が向かえば倒せることは確実なのだが、被害が多く出ることも確実である。そういう時に、ほぼ無償でその怪物を倒してれる。

他には、どっかのお姫様が不治の病だ、という時には“勇者”一行の中の治療師がそれを治してくれたり。もちろん無償で、だ。

とにかく、“勇者ご一行様”に頼めば安くて、確実に安全に問題が解決する。

故に蒼慈は“勇者”もとい“契約者”もそういう風に扱われるのだと思っていた。

「じゃ、行くか。案内くれる？」

立ち上がり侍女に言う。

侍女はその言葉に表情をあまり変えることなく頷く。

侍女は先に扉の外に出て、蒼慈達が出てくるのを待つ。

そして、蒼慈達全員が外に出たのを確認すると扉を閉め、

「こちらです」

と言って先頭に立ち、歩き出した。

2話

「分かっているとは思うが、今回貴殿らに頼みたいことがある」

王はそう言って一度言葉を切って、蒼慈達の顔を見渡す。

「かなりやっかいな内容になるが、受けてくれるか？」

蒼慈達はあのまま王の私室に呼ばれていた。

王の目の前には蒼慈達全員が椅子に座っている。

王の後ろには数人の兵士が控えている。

以前の蒼慈の態度に対する警戒だろう。

「いいよ」

そこでいきなり蒼慈が肯定の意を示した。

「!？」

王は、まだ内容を話していないにもかかわらず蒼慈がこの件を受けけることに驚きを隠せない様子だった。

「あんたらじゃ解決できないんだろう？」

足を組みながら蒼慈が言う。

「あ、ああ・・・そうなのだが・・・」

「やってやるって言ってんだから素直に喜んでけよ」

王からすれば信じられないのだろう。

以前彼と話した時の印象からだ、絶対にこのような面倒事は断ると思っていたからだ。

「で、内容は？」

蒼慈は然も当然のように話の続きを促す。

華奈恵達は事前に打ち合わせをしていたのもあるが、蒼慈の性格を大体把握しているからだろうか、全く驚いた様子はなかった。

「う、うむ。内容は・・・」

王の話を簡潔にまとめると、

西の端にあるガゼリアル火山に巨大な火竜がいた。

何故かそれが突然、村の方へとやって来ていて村人が襲われてるとのこと。

小型の竜ならば王軍でなんとかできないことはないのだが、あそこまで大きいと無理だということだった。

「襲われた村は全部で3つ。全てが完全に焼きの原になっている。死人は合計で300人以上。怪我人を入れると倍以上いる」

「かなりの被害だな。その3つの村、割と人がいるんだな」

「ああ。その村の近くに大きな町があるんだ」

「なるほど。で、依頼内容はその火竜の討伐だけか？」

そう言って蒼慈は足を組み直す。

「いや、出来ればまだ頼みたいことがあるのだが・・・」

「いいよ。やってやるから、言ってくれ」

「あ、ああ」

やはり蒼慈の態度に違和感があるのだろう。

さつきから王は、何か企んでるのでは？と内心で動揺しまくっていた。

最も、その動揺は全く隠せていなかったが。

そして、その王の内心とは全く逆に蒼慈は、

（来た来た来た。ついに“勇者”的な仕事が出来たぜ。なんでもっと早く持ってこなかったんだよ）

と、過去の自分の行動を全く忘れていたようだった。

「出来れば、何故竜が暴れたのか、その原因を調べて欲しい。黒幕がいるかもしれないのでな」

王曰く、竜は普段は人間に危害を加えるようなことはしない。

竜は大型になればなるほど力や魔力だけでなく、知能も高くなる。

それゆえに、竜とは普段は温厚な生き物で、あまり争い好まないらしい。

「期限は？」

知能の低い竜が小さなことで暴れるのは判らなくもないが、大型の竜が暴れるのは余程のことらしい。

「出来るだけ早くしてもらいたい。さっき言った通り、その襲われた村の近くに大きな町があるのでな……」

「なるほど、その町を潰されると今後が大変だと？」

「うむ。そこは西の貿易の中心地なのでな」

「そうか……ちょっと聞いていいか？」

「なんだ？」

蒼慈の浮かべた表情はいつものようなニヘラとした顔ではなく、真剣というような表情だった。

と言ってもどこかしら緩んだ雰囲気は否めないが。

「もし、襲われた村の近くに、この国にとって重要な町が一つもなかった場合、あんたはこの事を俺らに頼んだか？」

「っ!？」

そう言われて、王の表情が一気に引きつった。

そして、蒼慈はそれを見て確信めいた顔をする。

「なるほど」

この国の、今蒼慈達の目の前にいる王は決して無能などではない。むしろ歴史上でも、この大陸上でもそれなりに有能だと言える。しかし、だからこそ、小さなことを切り捨てるのに躊躇いはない、持てない、持ってはいけないと言う方が正しいのかもしれないが。

「・・・」

無言で王は俯く。

肘掛に置かれた拳は震えていた。

村人を助けるために軍を動かしたとして、結果は見えている。

竜は倒せない。逆にこちらに明確な敵意を向けられ、そのうえ軍も大半を失う。

それを判っていて、竜の討伐に向かうのは決して懸命とは言えないだろう。

そして仮に蒼慈達に頼んで莫大な報酬を要求されたとしても、その村の価値と比べると村の価値が劣るであろう。

なにより断られてまた脅されるなんて、たまったものではない。この要求ですら一種の賭けだった。

「別に責めるつもりはない。ただ、一つだけ言っておく」

蒼慈の言葉に顔を上げる王。

「よほどの事がない限り、俺に助けを求める奴を俺は拒まない」

その言葉に驚愕する王。

「俺は、見下されるのが嫌いだ。下に見られるのはどうしても我慢ならない。例えそれが一国の王であろうとも」

蒼慈の言葉に、王は蒼慈の態度の意味を理解した。

ただ、気に入らなかっただけ、なのだろう。

なんて幼稚なのだろうか、王は、そう思わずにはいられない。

そして、なんて小さな理由で我が国は潰されかけたのか、そう考

えると苦笑いしか浮かんでこない。

「そうか・・・では、この依頼、やってくれないか？」

王はそう言って頭を下げる。

「ああ、もちろんだ」

蒼慈は力強く頷く。

彼の後ろにいる華奈恵達も頷いてみせる。

「あ、そうだ」

そこで蒼慈は何か思い出しように言う。

「？」

一同が疑問符を頭の上に浮かべながら蒼慈の次の言葉を待った。

「報酬はどすんの？」

「・・・」

「ははは・・・」

後には王の乾いた笑い声だけが残った。

3話

「やってまいりました。今日はここガゼリアル火山から中継でお送りします。ガゼリアル火山と言えば、かの魔王をもが入ったとされる温泉がある、有名な観光地です。そして、火山の麓にはガゼリアルまんじゅう……」

「ちょっと！ソウジ！何処に向かって言ってるのよ！早く手伝って！」

「ソウジさん！？なんで一人だけそんな安全地帯に！？」

「蒼慈い！！」

「……あー、ちょっと電波が良くないみたいですわ……あ、繋がりましたか？はい。では、えー、ここガゼリアル……」

「蒼慈！！さっきから何してるのよ！！」

ただ今彼らは絶賛戦闘中だった。
体長10メートルは優に超える大型ドラゴン。

「でっかいな……」

そして、そのドラゴンの強大なブレスを水の壁で何とか防いでるセリヌ。

「乗ってみたいわ……」

セリーヌの後ろからちよこちよこと電撃を食らわせているフレール。

あまり、というか全く効いていないが。

「男のロマンだな、ドラゴンってのは」

ドラゴン上空からは華奈恵が風銃などで攻撃をしている。

これはどうやら効いているみたいだが、あまり相性が良いわけではないらしく、大ダメージには至っていない。

「捕獲しちゃう？もうこれは、やっちゃう？」

と、さっきからリポーターの真似をしたり、一人ぶつぶつと言っているのは蒼慈。

彼女らが下で戦ってるのを、後ろの大きな岩の上から悠々と見学している。

「ソウジ！本当にヤバいって！」

蒼慈と契約している華奈恵とセリーヌはそれなりに戦えているのだが、やはり普通の人間であるフレールでは全く手が出ないらしい。

「寧ろ足手まといになってるな、さっきからセリーヌ防御するので精一杯だし」

「そう言うなら手伝ええ！！」

姉であるセリーヌの病気を治してから一緒に旅(?)をしているが、蒼慈の力に怯えることもなく、かなり碎けた調子で彼女は蒼慈に対して接している。

「というより、なんで水属性が得意なセリーヌが攻撃しないんだ？」

蒼慈がそう思うのも当然。

明らかに今は不利である。

普通なら華奈恵とセリーヌの立ち位置が逆だろう。

「私っ グランドウォーター 『地下水』しか攻撃魔法知らないんですっ！」

まさかとは思っていたが、

「まさかの補助特化・・・」

「そう思うなら手伝って下さいっ！」

さっきからドラゴンのブレスを防ぎ続けているセリーヌは額に汗を掻いていた。

別にセリーヌの本気の『地下水』は威力が不十分というわけではない。

ただ、いかせんドラゴンは飛んでいるのだ。

地面から出る『地下水』では分が悪い。

「俺がやったら一瞬ジャン？」

俺にどうしろと？と言った様な風に肩をすくめる蒼慈。

「だから！一瞬で倒しても問題ないでしょ！」

「何言ってるんだ華奈恵。ドラゴンだぞ。前に戦ったあんなちっさいのじゃない。マジでファンタジーのドラゴンなんだよ」

「だから、何なのよっ！くっ！」

華奈恵はドラゴンの翼の風圧によるめきながら叫ぶ。

「ドラゴンを殺すなんてそんな勿体無い事できるか！」

まるで間違ってるのはお前達だ、とでも言わんばかりの蒼慈。

「そんな事・・・言ってる場合じゃないでしょう！」

華奈恵は、ひたすら上空からドラゴンを叩き落そうと翼に風銃で銃弾を浴びせ続ける。

彼女達もはじめはこんなことになるとは思っていなかったのだろう。

蒼慈達は今から20分ほど前にこのドラゴンの前に到着し、華奈恵が一発浴びせて、そのまま村から火山までひっぱってきたのだ。

その時は彼女達はそこで蒼慈が一瞬で片付けるのだろうと思っていた。

しかし、

「じゃ、後は任せた」

何もしない人間が言うセリフではないということだけは確かであろうセリフを吐いて、蒼慈はとっと岩の上へと避難したのだ。

すでに竜の獲物として敵対意識を持たれている華奈恵、そしてそれを助けるために傍に居たセリーヌと、逃げ遅れたフレールはそのまま逃げることもできずに戦闘に入ったのだった。

「っ！」

セリーヌの水の壁、『水壁』ウォーターウォールは前面にしか展開されていない。

全体に球帯状に展開して薄くすれば、このブレスを防げないと感じたのだろう。

全てが前面半分に集められている。

故に、ドラゴンのブレスが頭上を通過し、後ろの岩を爆発させた時の岩の破片を防げなかった。

「セリーヌ！フレール！」

上空から華奈恵が声を上げる。

そして、爆発してたった砂煙の中に、岩の破片で切れて出来たであろう傷から血を流す二人を見つける華奈恵。

「蒼慈！」

そして、流石に洒落にならない、と目で訴えかけてくる。

「・・・はあ。ドラゴン・・・」

いかにも面倒臭いと言う風に立ち上がる蒼慈。

「捕獲用の魔法とか思いつかないんだけどな・・・」

蒼慈は仲間が怪我をしているのに、今だに捕獲のことを考えていた。

そうして蒼慈が考えている間にもセリーヌ達には死が刻々と迫っていた。

ドラゴンの口がブレスを吐くためにセリーヌ達に向けられる。

さっきの衝撃でセリーヌは意識を失っていた。

しかし、辛うじて意識を保っているフレールにこの危機を打破する力はない。

「・・・あ、思いついた」

蒼慈がつぶやいた瞬間、
ドラゴンの口からブレスが放たれた

4話

ドラゴンの口からブレスが放たれた瞬間、フレールはもうダメだ
と思って目を閉じた。

「っ！」

死を覚悟する。

フレール自身は蒼慈は仲間だと思っていた。
しかし、どうやら違ったようだ。

（ああ・・・私の一人よがりだったのかな、契約してないからかな・
・もし、助かったら契約してもらおうかな）

キュツと目を閉じて、姉の上に覆いかぶさりながらフレールはそ
んな事を考えていた。

そして、その瞬間を閉じた目の暗闇の中で待つ。

「ギャアア!？」

しかし、その瞬間が来ることはなかった。

ドラゴンの悲鳴を聞き、フレールは目を開ける。

「!？」

そこには信じられない光景が映っていた。

「おお、案外上手くいくもんだな」

ドラゴンの両翼、両腕、両足、そして尾に氷の氷柱が突き刺さっており、蒼慈がドラゴンを地面に縛りつけて、いや貼り付けていた。「そんなに大きな物じゃないけどさ、貫通するとやっぱ痛いだろう？」ニヤリと悪党のような笑みを浮かべ、ドラゴンの目の前に立つ蒼慈。

「蒼慈！まだドラゴンは死んでないわよ！」

上空から華奈恵が降りながら、蒼慈に注意を促す。

「いや、殺すつもりないし」

「ガァァ」

蒼慈が華奈恵へと視線を向けた隙に、ドラゴンがブレスを吐こうと口を開ける。

「ソウジ！」

——ズシュッ！

鈍い音がして氷柱がドラゴンの口を上から落ち、ささった。

「コラコラ、暴れるなって」

黒い笑みを浮かべたまま蒼慈は、ドラゴンにより近づく。

「まだ、死にたくないだろ？」

フレールは蒼慈の言葉にゾッと背筋が冷えたのがわかった。
対象をドラゴンとして考えた上での殺気。

自分に向けられているわけではない、それなのにこれほど恐ろしいと感じるのは何故だろうか。

「お前の選択肢は2つ、俺のペットになるか、それとも死ぬか・・・
さあ、どっちがいい？」

「・・・」

ドラゴンは蒼慈の氷柱によって強制的に口を閉じられているため、
話すことが出来なかった。

王の話によると、このレベルのドラゴンなら人間よりも高い知能
を持っているらしく、人語を話すことも可能らしい。

「一回だけ氷柱抜いてやるよ、でも・・・もし俺に攻撃したら殺す
からな？」

顔から笑みを絶やすことなく蒼慈はドラゴンに向かって言い、手
をスッと上げる。

「グガッ」

ズブリ、という音と共にドラゴンの口から氷柱が抜ける。

「・・・答えを聞かせてもらおうか」

「・・・」

ドラゴンの瞳はまっすぐ蒼慈の瞳を見つめる。

《我が人間に下される日がこようとはな・・・》

ドラゴンの口から発せられた言葉、正確に言葉と言えるのかは定かではないが、その言葉はその場にいる皆の頭に直接響くような物だった。

「へえ・・・これ何？」

頭に直接響く声に対して疑問を抱いた蒼慈はドラゴンに質問をする。

《汝らが“念話”と呼んでいる物だ。我は直接人語を話すことは出来んからな》

「なるほど・・・で？」

蒼慈はドラゴンに対してさっきの問いの答えを求める。

《ひとつ聞かせてもらいたい》

「なんだ？」

《汝は、“契約者”か？》

「ああ、そうだ」

蒼慈の言葉にドラゴンは何処か納得したような風に唸る。

《我らが一族“火龍”フレイムドラゴンは代々の“契約者”に使える“契約者の友”なる龍の一角を担う者》

「代々？」

蒼慈には「代々」という言葉が気になるらしく、首をかしげている。

《このような形で従わされるとは思ってもいなかった》

ドラゴンは呆れたのか怒っているのか、鼻からバフウ、と煙を出しながら話しかけてくる。

その二人の、一人と一匹の会話を華奈恵に治療してもらい意識を取り戻したセリーヌと、それを看病していたフレールはまるで今にも卒倒しそうな顔色で伺っていた。

華奈恵は慣れているのか、すでに諦めているのか、どこか悟ったような顔でそれを見ていた。

「お前、何代目？」

《我はそのような言葉遣いで話しかけられるとも思っていなかった》

ドラゴンは、蒼慈の言葉遣いが尺に触ったのか、鼻からまた煙を出しながらフイツと横を向いた。

途端、

——ズシュッ！

「グガッ！」

ドラゴンの口から苦痛の声が漏れる。

「お前は、代々のように“契約者の友”じゃねーんだよ。“契約者の奴隷”なんだよ。言葉遣いに気をつけろ」

ドラゴンの口にはさっき抜かれた氷柱が再び刺さっていた。

《っ、貴様っ！》

「俺の言葉を理解してないのか？それともバカなのか？」

——ズシュッ！

「ガァッ！」

さらにもう一本氷柱がドラゴンの口に刺さる。

「っ！ソウジ！」

やり過ぎだ、とでも言うように後ろから非難の声が上がる。

「黙ってろ」

そうフレールに告げると、蒼慈は再びドラゴンに注意を向ける。

「今一度問おう。俺に従うか、死ぬか」

《我が、痛み屈するとも？》

何処か苦しげな声でドラゴンはしゃべる。

「お前の代わりなど幾らでもいる・・・もう一度聞こう。俺に従うか、Yes or NO？」

《・・・》

ドラゴンが蒼慈を憎憎しげに見つめる。

ドラゴンは誇り高い生物である。人間のちっぽけな誇りなんぞとは比べ物にならないほどの誇りを持っている。

別に彼、ドラゴンにとって命が惜しいわけではない。

むしろこのような自らが納得せぬ形で従うなら死を選ぶ。

しかし、相手が“契約者”なのだ。

《・・・》

ドラゴンが沈黙を続ける。

「・・・」

不意に蒼慈が手を上げる。

その行動を見て、止めを刺すように見えたのかフレール達が蒼慈に駆け寄ろうと立ち上がり、華奈恵に止められる。

ズブリという音を立てて、2本の氷柱がドラゴンから抜ける。

「グウツ」

ドラゴンが苦しげに唸る。

「答えろ」

瞳に何の感情も映さぬまま蒼慈は問う。

5話

彼にとって“契約者”に仕えることは誇りだった。幼い頃からそう言い聞かされてきた。

彼ら火龍の寿命は他の龍に比べてあまり長くはない。しかし、それ故に絶大な力を持つ。

この世界で龍はそれほど珍しい生き物ではない。

もちろんその龍種の中にも格、という物は存在する。

彼ら火龍はその龍種の中では、2番目の力を持っている。

まず、トップには神龍と呼ばれる超上級クラスの龍がいる。

それらは、主に時空を操っている。

その能力ゆえにあまり地上に姿を現すことはない。

そして、その次に火龍、水龍、風龍、地龍が存在している。

それらはその名の通り四代元素をそれぞれ操ることができる。

しかし神龍や、彼らより一つランクが下の龍よりも寿命が短く、総じて四大龍と言われる。

彼はその火龍に属しており、その上、火龍の族長を務めている。

龍は同種同士で争うなんて真似はしない。

それゆえにその龍を治める者も対して必要ではない。

しかし、火龍は族長を決める時のみ互いに争い、その地位を手に入れようとする。

何故なら、その“族長”のみが、“契約者の友”となることが許されるからだ。

皆はその名誉を得ようと、または人間という生き物に興味を持ち人間と触れ合おうという目的で、その地位を得ようとする。

彼はその思いを持ち、族長の座を狙い争い、そしてその地位を勝ち取った唯一の龍。

彼は人間という種に興味を持った。

彼ら火龍は他の龍に比べて寿命は短い。

それと同じくして人もまた短い寿命を持つ。

しかし、彼らはあまりにも弱く、脆い。

力も魔力も、人が誇る知能でさえ、龍には劣る。

それゆえなのか、人というものの“生きる”ということへの執念、執着はどの種をも凌駕している。

その力に驚き、彼は興味を持った。

それと同時に彼らの弱さを憐れんだ。

そんな時に知った“契約者”という存在。

竜種の中でも最高クラスの四大龍のうちの一匹を従えることが出来るほどの力を持った存在。

彼は“契約者”に興味を抱いた。

人でありながら強大な力を持つと言われる“契約者”に、自らが関わるのが唯一許された人間に。

“契約者”は他の人間と同じように“生きる”ことに執着するか。

“契約者”は他の人間と同じように愛する者のためなら自らの命をも投げ出すのか。

そして、“契約者”は火龍の頂点に立つ彼を本当に従えることの出来る力を持つのか。

彼は興味を持った。

それはどこか恋焦がれる乙女のように。

彼ら龍種には性別は存在しないが、もし存在していて彼が“彼女”であったなら、彼は間違いなく恋する乙女だったであろう。

それほどまでに“契約者”のことを考え続けていた。

“契約者”は大抵一種の龍としか契約しない。

それは“契約者”の力の限界を示している。

自分より先に他の龍種が契約してしまえば自分は契約できないであろう。

そのことを思い、さらに焦り、“契約者”が現れるのを待った。

そして、彼が“契約者の友”となるために火龍の頂点に立つてから50年。

龍種にとってはほんの少しの間。

四大龍にとってはそれなりの時間。

そして、まだ100年と少ししか生きていない彼にとっては、あまりにも長い時間だった。

そんな時、世界に“契約者”の魔力がフツと現れた。

《汝が“契約者”か？》

「・・・」

目の前の少年は首を横に振る。

《ならば、何故我が前に現れた》

少年と呼ぶのさえ憚られるほど幼い。

10歳にすら満たないのではないのかという年齢の少年は龍の前

であるにも関わらず、堂々としていた。

「・・・忠告」

いや、あまりにも異常だった。

龍が今いるのは火山のマグマの中。

それなのに目の前にいる少年は、何事もないかのようにその中にいる。

日の光が入らず、真っ暗なマグマの中で、龍とその少年だけは何故か姿かたちがハッキリと見えている。

《我にか?・・・何者だ》

「・・・忠告」

少年は龍の言葉を無視し、同じセリフを2度言う。

《・・・》

龍もこの場にいるということの異常さに気が付く。

《聞かせてもらおう》

龍の言葉を聞いて、少年はコクリと頷く。

「今のままだと、貴方は“契約者”に会えない」

《何っ!?!》

その幼さを打ち消してもまだ足りないほどの無表情さで少年は告

げる。

「ここに貴方がいるとは気付かない」

四大龍は自らの力が高いことを知っている。

それゆえに人は皆、自分達を探しにくくると考え、誰も近寄らないような所で“契約者”を待っている。

《・・・どうということだ？》

「今代の“契約者”に、龍の力は必要ない」

故に求めるはずもない。目の前の少年は告げる。

その忠告は彼、火龍にとってはあまりにも衝撃的なものだった。

《・・・なんだと？》

「今代は異常」

《・・・》

少年の言葉に考え込む火龍。

《人間よ。何故そのことを我に？》

通常の龍はプライドが高い。

いや、高すぎると言っても過言ではない。

それゆえに人は龍を称え、機嫌を取る。

このような態度を取る人間がいれば、その地域は焦土になることは間違いないだろう。

しかし、今の火龍にそんな余裕はない。

「今代に存在を知らせる必要がある」

火龍にとって、第一は龍としての誇りではなく、“契約者”だからだ。

《・・・どうすればよいのだ》

龍が人に意見を、ましてや助言を求めるなんてことはありえない。それほどまでにこれは異常なこと。

歳に似合わぬ雰囲気をもし出す、人では入ることの出来ぬ場所に平然という少年。

誇りよりも自らの興味を優先させる幼き龍。

過去になくらい強い“契約者”。

何もかもが異常だった。

「目立てばいい」

《どのようにしてだ？》

「・・・」

少年の返答は無言。

これ以上は自分で考えろということなだろう。

《忠告感謝する》

龍がそう告げると少年はコクリと頷き、フッと消える。まるで元々、彼がいなかったかのように。

《目立たねばならんのか・・・》

100年と少ししか生きていない彼には、いや龍にとっては理解し難いことであろう。

彼らは存在しているだけで目立つのだから。
そして、“契約者”を求める龍は動き出す。

6話

火龍の“契約者”に会いたいという願いは果たされた。
龍種のどれも思いもよらぬ結果をもたらしながら。

《83代目だ・・・》

「・・・過去に82人も“契約者”がいたのか」

《そういうわけではない》

「・・・」

蒼慈はさっさと続きを言えと、目で促す。

《火龍の族長として83代目ということだ》

「・・・」

蒼慈はいまだに無言で、ドラゴンに続きを促す。

華奈恵とフレール、そして治療がある程度終え、既に目を覚ましているセリーヌ達が固唾を吞んで見守っている。

《“契約者の友”に我がなれば、火龍としては2代目になる》

「火龍として、か・・・他にいるような口ぶりだな」

蒼慈は“契約者”についてほとんど知識を持っていない。

《ああ。火龍、水龍、風龍、地龍。これらの四大龍と呼ばれる存在が“契約者の友”となる資格を持つ》

ドラゴンは抵抗するのを完全に諦めたのか、蒼慈の知りたいことを先読みして答えていく。

「俺は“契約者”としては何代目なんだ？」

蒼慈の質問にドラゴンは少し驚く。

《・・・4代目だ》

「過去に3人“契約者”がいた、ということか・・・」

《そうなる。聞かされていないのか？》

蒼慈がドラゴンとの会話で何かを考えている時、それを見ている華奈恵は内心冷や汗が止まらなかった。

彼女は“導き手”。つまりは蒼慈を導く者なのだ。
本来ならば、彼に全ての知識を与えるべきなのだが、

「・・・華奈恵」

いつもとは違う、感情のこもっていない声で、首だけを回して蒼慈は華奈恵を見る。

「っ!？」

呼ばれた華奈恵はビクツと肩を揺らす。

「何故言わなかった」

「・・・」

言える筈がなかった。

彼、蒼慈は“契約者”としてはあまりに異常で、“勇者”“救世主”としてはあまりに異端であった。

「何故黙っている」

本来の力とは真逆の力を持つ蒼慈。

そんな蒼慈をちゃんとした道に導くために、彼に知識を与えるわけにはいかなかった。

「・・・わ、私達“導き手”も全てを知ってるわけじゃないのよ」

《前代、いや前々代だが、その者はちゃんと理解していたが？》

ドラゴンの言葉に悪態を付きたいのを必死に我慢しながら、華奈恵は答える。

「代々受け継がれるなかで、資料を完璧に保ち続けるのは不可能なのよ」

言われれば納得しえる理由だった。

しかし、それはあくまで一般人におけること。

彼女のように代々“導き手”の巫女を務めるような一族においてそんなミスはしない。

「そうか・・・わかった」

追求することなく蒼慈はドラゴンの方に向きなおす。

華奈恵はそのことで、さっきのことを信じてもらえたとホッと胸を撫で下ろした。

「華奈恵」

だから、不意打ちだった蒼慈の言葉に華奈恵は再び、ビクッと肩を揺らす。

「な、何かしら？」

「・・・本当だな？」

蒼慈の言葉を聞き、華奈恵に襲い掛かる後悔と恐怖。

彼は気付いてる。

蒼慈の声に含まれる、怒りの感情を少し感じ取りながら華奈恵はそう思った。

「え、ええ」

おもわずそう答えてしまった。

そして、その後すぐに途方もない後悔の念に追われる。

今ので華奈恵は蒼慈からの信頼を全て失ったと言っても過言ではないのだ。

「火龍とやら。少し話が逸れたな、それでまだ返答をもらってないのだが」

先の事で顔を青ざめさせてる華奈恵を他所に蒼慈は会話を続けた。

《我が従うか、否か、か？》

「ああ」

《我に拒否権はあるのか？》

ドラゴンの言うことはもつともなことだった。

脅し、脅迫のような形でドラゴンに答えを求めるあたりもはや交渉などではなかった。

「別に断っても構わない・・・ここで死んでもいいならな」

蒼慈は冷たい声でそう言い放つ。

《・・・従おう。元よりそのつもりだった。屈服された屈辱よりも、“契約者の友”となることの名誉の方が勝る》

「賢い判断だな」

ドラゴンの返事を聞いて蒼慈は頷く。

「ついでに聞いておきたいんだが、何故暴れてたんだ？」

《目立つためだ》

「・・・」

一瞬ドラゴンの返答に驚かされ固まっていまい、若干の狼狽を隠せぬまま蒼慈は答える。

「何故目立つ必要があった？」

《そなたに見つけてもらうためだ》

「・・・他に方法はなかったのか？」

《あったかもしれんが、我は思いつかなかった》

はあ、と蒼慈は大きなため息をついた。

「もし俺が来なかったらどうしたんだ？」

《来るまで暴れた》

（ドラゴンとは賢い生き物だと王は言っていなかったか？これじゃまるで、）

「バカだろ」

《仕方なからう！“契約者の友”は一体しかなれんのだ。我先と思うのは自然のこと》

「一匹だけ？何故一匹だけなんだ？」

疑問に思い首を傾げる蒼慈。

そしてそのまま後ろを振り返り華奈恵の方に顔だけ向ける。

「知ってるか？」

ドラゴンが答える前に先に華奈恵にその疑問をぶつける。

蒼慈に話しかけられたことで、またビクッと反応しながら華奈恵は答えた。

「え、ええ。確か“契約者”の力がドラゴン一体が限界だから、だったはず・・・」

華奈恵にとってはちゃんと確立した知識なのだが、蒼慈に聞かれると、さっきの自分の言葉の影響もあるためかどこか確信がないかのような言葉になってしまう。

本来“契約者”が行く世界は何種類もあり、それを順番に回っていくことになっている。

だから、歴代にどれだけ“契約者”がいようとも、同じ世界に来る人数は少なくなり、その分資料も減ってしまう。

しかし、それでもその資料が昔から一切欠けることなく伝え継げるのが“導き手”だからこそなのだろう。

「ふん」

ニヤリと笑みを浮かべ蒼慈はドラゴンを見やる。

《・・・》

「ドラゴンよ・・・俺は一体、何体のドラゴンと契約出来る？」

そう言って蒼慈は、その言葉の意味を理解できないドラゴンの方へと手を伸ばした。

7話

ピクリ、とわずかにドラゴンが動く。

《な、何!?!》

思わず声を上げてしまうほどに。

「どうだ?」

蒼慈はドラゴンの額に手のひらをくっつけながら言う。

《なんだ・・・こんな量の魔力、神龍ですらありえん》

その言葉を聞き驚くセリーヌとフレール。

ただ、華奈恵だけはそれを苦虫をつぶしたような顔で聞いていた。

「それで?」

《これほどの魔力があれば、四大龍皆を従えてもおつりが来るな》

「・・・それほどか」

自分のことだが、どこか他人事のような反応を蒼慈は示す。

「ならその4大龍とやらを全部手に入れるのもありだな」

ドラゴンから手を離し、その手を閉じたり開いたりしながら、まるで自分の力を確かめるように蒼慈は言った。

《お主なら可能だろう》

「・・・そうか」

蒼慈はフツと見た目に似合わない大人びた顔で笑みを零した。

「とりあえず、今は足が欲しいからな。契約させてもらおうか」

そう言ってドラゴンにさらに近づいていく。

《元よりそのつもりだ》

ドラゴンはその瞳を閉じ、契約の時を待つ。

その様子を何処か、別世界の事のような顔で華奈恵意外の二人は見ていた。

「華奈恵。ドラゴンと人との場合で契約の仕方に違いはあるのか？」

蒼慈は華奈恵の方を見ることもなく尋ねる。

「ドラゴンの場合名を与えることで契約がなされるわ」

華奈恵は答える。

「そうか・・・名か・・・」

《・・・》

ドラゴンは何も言わずにジッと蒼慈の言葉を待つ。

そして、その名を得ることが彼の夢であり、全てだった。

「・・・ファイってのはどうだ？火龍なんだろう？」

火を英語読みしてファイヤ、それからとってファイ。
少し、安直過ぎる名前かもしれないが。

《ファイ、か・・・悪くない。ここに“契約”を》

途端、ドラゴンから眩い光が出て、それが蒼慈を包み込む。
数秒経ったのち、その光が収束していく。

《力が漲るとはこのことか・・・》

「・・・ほう。今までとは違ってお前となにかしら繋がりを感じるな」

蒼慈は何処か関心するような声出した。

実際、人と“契約”した場合でも魔力的な繋がりはあるのだが、
蒼慈の力が強大なためその繋がりが些細な物に思え、魔力に慣れて
ない蒼慈には気付きにくいことだった。

しかし、より強大な力を持つドラゴンと“契約”すると、その繋
がりも顕著に現れるため蒼慈でも認識ができたのだ。

「!？」

「えっ!？」

突然後ろで見ていたフレール達も驚いた声を上げる。
蒼慈自身も驚いた顔をしていた。

唯一人、華奈恵だけは以前と変わらぬ表情だったが。

《・・・フム》

ファイの体に蒼慈の魔力が行き渡ったのか、蒼慈によってつけられた傷が癒えていく。

「・・・すごい」

回復魔法が得意であるセリーヌには、蒼慈によってつけられた傷の深さからしてそう簡単に治るものではないことを知っていた。

もちろん蒼慈自身が直接治しにかかれば、治ってしまうのかもしれないとは思っていたが。

まさか“契約”の副産物で治るとは思ってもいなかったのだろう。

「姉さんの時と同じ・・・」

ポツリとフレールが零す。

その光景は蒼慈がセリーヌの“契約”して、セリーヌの病気を治した時と酷似していた。

《これで我は念願の“契約者の友”になった》

グルグルと笑っているのだろうか。そんな感じの音を口元からファイは発する。

「まあ、これで足も手に入れたことだし。いろんなところに楽に行けるな」

うんうんと笑みを浮かべながら蒼慈は頷いていた。

「こいつが暴れてた理由もわかったことだし。戻りますかー」

結局は一人ですべて治めてしまった蒼慈は、グッと伸びをしながら後ろにいる皆に言う。

「そうね。姉さんの傷も大丈夫だとは思うけど、少し心配だし」

「大丈夫よ、これくらい」

ファイを見ながら、目をキラキラさせている普段からはあまり見られない蒼慈の顔を見ながらセリーヌは口元に微笑を浮かべながら言った。

「・・・そうでしょうか」

沈んだ感じを隠せないまま華奈恵も二人に同意する。

「じゃあ、早速乗って帰りますか!」

嬉々としてファイの頭をペシペシ叩く。

そして、皆が何か言う前に一人先にファイに飛び乗る。

「ほらほら。乗った乗った」

どこかの商人のような蒼慈の言い方に苦笑しながら皆もファイへと続く。

ドラゴンに乗るのは恐れ多いが、それよりもやはり乗ってみたいという気持ちの方が勝ったらしい。

「ファイ行けるか？」

《もちろんだ主殿》

うなずくとファイは折りたたんでいた翼を大きく広げる。

そして足の方へと重心を落としたかと思うと、一気に上空へと飛ぶ。

「キャッ」

セリーヌが思わず悲鳴を上げる。

その横後ろで妹のフレールは今だにドラゴンに乗っているという事実には驚いたままの表情で固まっていた。

「ははっ。やっぱ空はいいね！」

ファイの首の付け根辺りに跨っている蒼慈は両手を大きく広げて叫ぶ。

「これぞ男のロマンだぁ！」

まるでジェットコースターに初めてののった少年のようなはしゃぎっぷりだ。

彼の後ろには、周りの雲を見ながら楽しげなセリーヌが乗っている。

そしてその後ろには華奈恵が少し青い顔をしながら口元を押さええている。

そのまた後ろの最後尾にファイの翼や鱗をガン見しているフレールが乗っている。

《主殿》

「ん？」

安定した飛行に入ってすぐファイが蒼慈に話しかける。

《何処へ向かえばいいのだ？》

「・・・あー。とりあえず、あっちらへん」

ファイに聞かれて敵等に指を指す蒼慈。

「ソウジ・・・そっちは王都とは真逆です」

若干の呆れと、子供が楽しんでいるのを見守る母親のような表情でセリーヌは後ろから蒼慈に告げる。

セリーヌに言われて、自分が指した方向と逆方向を蒼慈は指差す。それにしたがってファイも旋回しながらそちらへと向かった。

8話

あの日のことが未だに頭から離れない

毎晩毎晩

その罪を確認するかの如く

夢を見る

動く物はない

ただ異臭がするだけ

死んだように固まる自分

目を見開いて

目の前の光景に絶望した

神などいない

もしいたとしても

それは

絶対に認めない

認めてはいけない

目の前の現実を受け入れられない

転がっている

つい昨日までは動いていた

昨日と違うのは

あの優しさ笑顔ではなく

苦しそうな表情であることと

ソレだけだということ

動けない

何かが自分の上に乗っている

動けない

重さで

動けない

恐怖で

動けない

動けない

動いてはいけない

本能がつげる恐怖

この場はこのままやり過ぐせと本能が言う

今

目の前でた打ち周り

こちらに手を伸ばす

その手を掴んではならない

見捨てろ

さもなければ

自分も目の前に転がるソレ

目の前に転がる

昨日まで父親だった生首と同じ末路を辿る

絶叫を上げながら

見知らぬ男に犯され

殺されゆく姉と母

母は既に死に

姉はこちらを見る

そして

犯されている姉の

死んだ父の

死んだ母の

口から発せられる言葉

《何故お前だけ…》

あの時の匂いも

姉と母の絶叫も

肉の切れる音も

未だに忘れられない

あれは罪

見捨てた罪

姉はこちらを見る

助けを求める目

口からは

絶叫がほとばしる

《助けて》

助けて

助けて…と

こちらに手を伸ばす

千切れんばかりに手を伸ばす

そして

そのまま死に絶える

「っ！！！」

ガバツと少年は起き上がる。

少年の体には、嫌な汗がベツタリとまとわり付いている。

あの日から、見なくなった日は一日とない。

「・・・ふう」

少年は深く息を吐く。

まるで何かを堪えるように、まるで何かを必死で押さえつけるように。

あの日の恐怖を

あの日の異臭を

あの日の絶叫を

あの日の絶望を

あの日のあの時の、言葉を。

少年は、自分の部屋として割り当てられたところにある、質素なベット、この世界ではそれなりに豪華なのだろうが、から降りる。そして、顔を洗うために水を出す。

「水流防御」

本来は水を纏うことによって、敵からの攻撃ダメージを少し減らす魔法。

しかし、今はそれに必要以上の魔力を込め、体全身を洗うように水を流れさせる。

不思議なことに、これは直に肌に当てることができ、服がぬれることはない。

「炎」

小さく眩く。

すると、小さな炎が少年の手のひらから現れる。

少年はさっきまで纏っていた水を全てそこに集める。

——ジュッ

一瞬にして水が蒸発する。

「風」

その蒸発した空気を風で丸めて、外へ飛ばす。

なんとも、外の人たちの迷惑を考えない行動だが、本人はそんなことに全く気をかけていない。

少年はその後、グッと伸びをして、寝巻き用に用意された今着ている服を脱ぎ、いつもの服に着替える。

すると、少年が目覚めたことで、目が覚めたのか、外から龍の咆哮が聞こえる。

——ガァァァァァ!

なんとも品のない咆哮だ、と思いながら少年は部屋を出る。

「あ、起きたのねソウジ」

柔らかい笑みを蒼慈へと向けるセリーヌ。

「朝食がさっき運ばれてきたわ。それと、後で王様が会いに来て欲しいんだって」

この朝食を持ってきたメイドがそう言っていたわ、と続け、セリーヌは席に着く。

「残りの二人はまだ寝てるの？」

蒼慈は朝食を見ながらセリーヌに言う。

「カナエはなんか、外で一人で食べるって言って早くに出て行ったわ。フレールはまだよ」

我が妹ながら、なんて呆れながら言いつつセリーヌは朝食を並べる。

ちなみに、今現在の時刻は地球で言うと、大体9時ごろだ。

昨日遅くまでドラゴンの世話、というより、ファイと話をした後、蒼慈はフレールと“契約”をした。

フレールは多分起きているのだろうけど、自分と顔をあわせるのが恥ずかしいのだろう、と思いながら蒼慈は呟く。

「初心なやつだ」

「あらあら、そう言わないで。彼女はずっと恋愛なんかしてる暇はなかったんだから」

蒼慈がフレールがいない理由に気付いたことに驚き、その後自分で続けた言葉に、自ら落ち込むセリーヌ。

「まあ、いいや。それより、食べようか」

多分、蒼慈が起きてくるのを待っていてくれたセリーヌにそう言っ
て朝食を食べ始める蒼慈。

「そうね」

蒼慈の気遣いがわかったのか、少し微笑みながらセリーヌも遅れ
て朝食をとり始める。

そんな時、フレールと言えば、

「ソ、ソウジとき、キス……／＼／＼／」

自分で呟いた後、ボフンと顔から湯気を出しながら顔を真っ赤にさせるフレール。

特段、ソウジに対して特別な感情を持っていたというわけではない。

しかし、姉の恩人であり、なにより自分よりも強い。

そのことでフレールはだんだんと惹かれていた。

そんな時の“契約”。

ずっと戦いばかりしていたフレールにとっては初めての経験だった。

そんな時に、異性として意識している、それに恋愛感情が始めはなかったとしても、唯一の男性とキスをした。

フレールにとってはそれだけで恋に落ちるには十分だった。

「キ、キス・・・」

自分の唇を指でなぞり、その後ものすごい勢いで顔を枕にぶつける。

「~~~~~／／／」

華奈恵もフレールも、見た目に似合わずかなり初心らしい。

8話（後書き）

なんとなく、こういう過去は必須な気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8018m/>

Contract ～契約～

2011年4月10日18時55分発行